つだわたるさん（美賀多台）抑止力を考える(2015.2～12)

INDEX

非核神戸方式 40 周年　(2015 . 1)
抑止力を考える(1)　(2015 . 2)
抑止力を考える(2)　(2015 . 3)
抑止力を考える(3)　(2015 . 4)
抑止力を考える(4)　(2015 . 5)
抑止力を考える(5)　(2015 . 6)
抑止力を考える(6)　(2015 . 7)
抑止力を考える(番外編)　(2015 . 8)
抑止力を考える(7)　(2015 . 9)
抑止力を考える(8)　(2015 . 10)
相手の土俵に乗ってでも　抑止力を考える(9)　(2015 . 11)
抑止力を考える(10 完)　(2015 . 12)

つだわたるさん（美賀多台）文化的生活を考える(2014.12～2016.12)

INDEX

私のシネマライフ　(2014 . 11)
58歳からのフルマラソン　(2014 . 10)
笑いを武器に　文化的生活を考える(1)　(2016 . 1)
団結は文化　文化的生活を考える(2)　(2016 . 2)
自由な労働時間　文化的生活を考える(3)　(2016 . 4)
労働者の良心　文化的生活を考える(4)　(2016 . 6)
自由な言論　文化的生活を考える(5)　(2016 . 7)
研修を成功させるには　文化的生活を考える(6)　(2016 . 8)
日本選手が負けると悲鳴　文化的生活を考える(7)　(2016 . 9)
北風と太陽　文化的生活を考える(8)　(2016 . 10)
映画『シン・ゴジラ』　文化的生活を考える(9)　(2016 . 11)
希望と絶望　文化的生活を考える(10)　(2016 . 12)

つだわたるさん（美賀多台）憲法と映画(2017.1～)

INDEX

山田洋次『学校』　憲法と映画 (1)　(2017 . 1)
韓国映画『明日へ』『外泊』　憲法と映画 (2)　(2017 . 2)
『顔のないヒトラーたち』『アイヒマンを追え』　憲法と映画 (3)　(2017 . 3)
現代の戦争『アイ・イン・ザ・スカイ』　憲法と映画 (4)　(2017 . 4)
『わたしは、ダニエル・ブレイク』　憲法と映画 (5)　(2017 . 5)

『ニュースの真相』偽ニュースの恐ろしさ　憲法と映画（6）　（2017 . 6）
『ある戦争』軍事力による支援の矛盾　憲法と映画（7）　（2017 . 7）
『ちょっと今から仕事やめてくる』もっとブラック企業をたたけ　憲法と映画（8）　（2017 . 8）
『汚れたミルク』大企業、権力を告発する　憲法と映画（9）　（2017 . 9）
『未来を花束にして』　憲法と映画（10）　（2017 . 10）
『スノーデン』権力が監視、抑圧する社会　憲法と映画（11）　（2017 . 11）
『弁護人』国家の無法と戦う人々　憲法と映画（12）　（2017 . 12）
『映画で学ぶ憲法』映画が描いた憲法の心　憲法と映画（13）　（2018 . 1）
『肯定と否定』「もう一つの事実」の流布　憲法と映画（14）　（2018 . 2）
『デトロイト』根深い「人種」差別　憲法と映画（15）　（2018 . 3）
『ロープ／戦場の生命線』花はどこへ行った　憲法と映画（16）　（2018 . 4）
『ペンダコン・ペーパーズ　最高機密文書』　憲法と映画（17）　（2018 . 5）
『コスタリカの奇跡　～積極的平和国家のつくり方～』　憲法と映画（18）　（2018 . 6）
『万引き家族』　体を寄せ合って生きる　憲法と映画（19）　（2018 . 7）
『空飛ぶタイヤ』　内部告発する職業的良心　憲法と映画（20）　（2018 . 8）
『ゲッペルスと私』　人生を問い直さない人間　憲法と映画（21）　（2018 . 9）
『ナチュラルウーマン』　静かな歌声が心に響く　憲法と映画（22）　（2018 . 10）
『沖縄スパイ戦史』　軍隊の本質を暴いた映画　憲法と映画（23）　（2018 . 11）
『1987、ある闘いの真実』　歴史を動かす人々の力　憲法と映画（24）　（2018 . 12）
『ザ・ウォーター・ウォー』　植民地と新自由主義　憲法と映画（25）　（2019 . 1）
『天命の城』　現代に「天命」を問う　憲法と映画（26）　（2019 . 2）
『こんな夜更けにバナナかよ　愛しき実話』　憲法と映画（27）　（2019 . 3）
『ブラック・クランズマン』　憲法と映画（28）　（2019 . 4）
『衝撃と畏怖の真実』『バイス』事実の捏造と報道記者たち　憲法と映画（29）　（2019 . 5）
『グリーン・ブック』　人種差別と友情　憲法と映画（30）　（2019 . 6）
『12 か月の未来図』　未来をつくる教育　憲法と映画（31）　（2019 . 7）
『ニューヨーク公共図書館』　公共性と民主主義　憲法と映画（32）　（2019 . 8）
『工作／黒金星（ブラック・ビーナス）と呼ばれた男』　憲法と映画（33）　（2019 . 9）
『あなたの名前を呼べたなら』インドの一つの変化　憲法と映画（34）　（2019 . 10）
『空母いぶき』9条を踏まえた架空の戦闘　憲法と映画（35）　（2019 . 11）
『ザ・ネゴシエーション』誰を巨悪にするか　憲法と映画（36）　（2019 . 12）
『家族を想うとき』「自由な働き方」の現実　憲法と映画（37）　（2020 . 1）
『パラサイト　半地下の家族』平凡な人々の惨劇　憲法と映画（38）　（2020 . 2）
『コンプリシティ／優しい共犯』生きづらい日々だけど　憲法と映画（39）　（2020 . 3）
『黒い司法　0%からの奇跡』米国の根強い黒人差別　憲法と映画（40）　（2020 . 4）
『ｉ－新聞記者ドキュメント－』誰が権力を監視するか　憲法と映画（41）　（2020 . 5）
DVD『百年の恋』他　憲法と映画（42）　（2020 . 6）

『ルース・エドガー』人権とアイデンティティ　憲法と映画（43）　（2020 ． 7）
『テルアビブ・オン・ファイ』イスラエルの日常的な悲劇　憲法と映画（44）　（2020 ． 8）
『娘は戦場で生まれた』私たちの知らないところで　憲法と映画（45）　（2020 ． 9）
『コリーニ事件』ドイツは過去に目を閉ざさない　憲法と映画（46）　（2020 ． 10）
『パパは奮闘中！』あるフランス男の間違い　憲法と映画（47）　（2020 ． 11）
『芳華』検閲のもとで何を表現したか　憲法と映画（48）　（2020 ． 12）
『サイレント・トーキョー』迫力ある映像だが　憲法と映画（49）　（2021 ． 1）
『シカゴ7裁判』現代の米国に通じる　憲法と映画（50）　（2021 ． 2）
『すばらしき世界』生きていく力の源　憲法と映画（51）　（2021 ． 3）
『花束みたいな恋をした』なぜ一緒に暮らすのか　憲法と映画（52）　（2021 ． 4）
『生きろ　島田叡　戦中最後の沖縄県知事』特異な官選知事の生きざま　憲法と映画（53）　（2021 ． 5）
『薬の神じゃない』社会を変える力　憲法と映画（54）　（2021 ． 6）
『一人になる』コロナ禍の今も　憲法と映画（55）　（2021 ． 7）
『シャイニー・シュリンプス！愉快で愛しい仲間たち』　憲法と映画（56）　（2021 ． 8）
『グレース・オブ・ゴッド　告発の時』　個性が連帯して闘う映画　憲法と映画（57）　（2021 ． 9）
『スイング・ステート』選挙は民主主義の手法　憲法と映画（58）　（2021 ． 10）
『わたしの叔父さん』人生を自分で決めることができる社会　憲法と映画（59）　（2021 ． 11）
『梅切らぬバカ』共存する社会への模索　憲法と映画（60）　（2021 ． 12）
『大コメ騒動』徒党を組んで闘った女たち　憲法と映画（61）　（2022 ． 1）
『汚れたミルク』勇気ある人々　憲法と映画（62）　（2022 ． 2）
『ボストン市庁舎』市民と向き合う市政　憲法と映画（63）　（2022 ． 3）
『スリーピング・ボイス　沈黙の叫び』残酷な時代を描く　憲法と映画（64）　（2022 ． 4）
『英雄の証明』ICT(情報通信技術)の時代で　憲法と映画（65）　（2022 ． 5）
『大河への道』落語と映画　憲法と映画（66）　（2022 ． 6）
『クーリエ／最高機密の運び屋』国益ではなく家族を守る　憲法と映画（67）　（2022 ． 7）
『戦争と女の顔』過酷な戦闘は人間をどう変えるか　憲法と映画（68）　（2022 ． 8）
『島守の塔』戦争の何を描くべきか　憲法と映画（69）　（2022 ． 9）
『さよならテレビ』民放の危機的な一面を捉えた　憲法と映画（70）　（2022 ． 10）
『メイド・イン・バングラディシュ』貧困、搾取と闘う人々　憲法と映画（71）　（2022. 11）
『空のない世界から』見えない人々　憲法と映画(72)（2022. 12）
『ある男』　自分の人生を求めて　憲法と映画(73)（2023. 1）
『モリコーネ』映画の娯楽性と芸術性　憲法と映画(74)（2023. 2）
『ラーゲリより愛をこめて』戦争の悲劇を訴えているが　憲法と映画(75)（2023. 3）
『妖怪の孫』情けない思いで見ていた　憲法と映画(76)（2023. 4）
『PLAN75』希望が見えない社会　憲法と映画(77)（2023. 5）
『ハマのドン』久々の快挙を描いた　憲法と映画(78)（2023. 6）
『怪物』現代の恐ろしさ描いた　憲法と映画(79)（2023. 7）

『世界のはしっこ、ちいさな教室』教育は本当に大事　憲法と映画(80)　(2023. 8)
『教育と愛国』戦争は教室から始まる、といいます　憲法と映画(81)　(2023. 9)
『こんにちは、母さん』サユリ賛歌の映画　憲法と映画(82)　(2023. 10)
『福田村事件』過去を描き、現代を照射する　憲法と映画(83)　(2023. 11)
『ぼくは君たちを憎まないことにした』憎悪の連鎖を止める　憲法と映画(84)　(2023. 12)
『NO 選挙, NO LIFE』『シン・ちむどんどん』選挙の表と裏　憲法と映画(85)　(2024. 1)
『モロッコ、彼女たちの朝』世界を変える一歩　憲法と映画(86)　(2024. 2)
『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』反戦映画を考えた　憲法と映画(87)　(2024. 3)
『戦雲』「二度と戦場にしない」闘いは続く　憲法と映画(88)　(2024. 4)
『オッペンハイマー』核兵器の残酷さを世界へ　憲法と映画(89)　(2024. 5)
『ダーク・ウォーターズ 巨大企業が恐れた男』公害は予防が大事　憲法と映画(90)　(2024. 6)
『罪深き少年たち』正面から警察の犯罪を描く　憲法と映画(91)　(2024. 7)
『アイアム・ア・コメディアン』　笑いで社会を変える　憲法と映画(92)　(2024. 8)
『ぼくの家族と祖国の戦争』　一人ひとりが考えるべきこと　憲法と映画(93)　(2024. 9)
『ボストン 1947』世界一の走りを見ながら　憲法と映画(94)　(2024. 10)
『あしたの少女』韓国社会の醜悪さを暴く　憲法と映画(95)　(2024. 11)
『ビバ・マエストロ！指揮者ドゥダメルの挑戦』強烈なメッセージ　憲法と映画(96)　(2024. 12)
『オン・ザ・ロード～不屈の男金大中～』民主主義を訴え続けた金大中　憲法と映画(97)　(2025. 1)
『再会長江』映像に出ない意味を考えた　憲法と映画(98)　(2025. 2)
『侍タイムスリッパー』ヒットしています　憲法と映画(99)　(2025. 3)
『ノー・アザー・ランド故郷はほかにない』人類はジェノサイドを見ているだけ　憲法と映画(100)　(2025.4)

非核神戸方式40周年　　つだわたる　（美賀多台）

　ノーベル平和賞を日本人でもらったのは、唯一佐藤栄作元総理大臣です。
彼は非核3原則（核兵器を持たず、つくらず、持ち込ませず）を日本の国是とすると言明し、米国に占領されていた沖縄返還（1972年）に際して、これを主張したことを
評価されました。
　この受賞に対しては、その当時から、佐藤政権は米国の侵略戦争であるベトナム戦争に加担してきた、という批判はありました。そして今では、受賞の主な理由となった非核3原則そのものが欺瞞であった、日米政府は米軍の核兵器持ち込みを認める密約を交わしていた、ことも明らかになっています。沖縄返還に際しても核兵器持ち込みを認めるなどの密約がありました。
　ノーベル平和賞受賞が1974年です。翌年1975年に、その非核3原則を地方自治のもとに実施する非核神戸方式が全会一致で市会決議されました。港湾管理者を自治体の首長とする地方自治の原則を生かして、宮崎辰雄市長（当時）の神戸港を軍港化させない、平和な国際商業貿易港として発展させていく決意を示すものです。
　これ以後、神戸港には米国軍艦は一切入港せず、世界に冠たる平和の守り手となっています。
　自治体の協力で核兵器廃絶をめざそうという平和首長会議は、1982年広島市長と長崎市長の提唱で結成されました。ここには160国・地域、6435都市（国内では1530自治体）が参加しています（神戸市は2010年加盟）。
　しかし神戸港と同じような制度を持っている港湾都市は、残念ながらまだありません。
　非核3原則の「持ち込ませず」を具体化する非核神戸方式が広がることを、国や米国は非常に恐れています。神戸市にはあらゆる角度から強い圧力がかけられ続けていますし、それをめざす自治体を徹底的につぶします。
　神戸市は憲法集会の後援を断りました。それに対して批判するべきです。同時に非核神戸方式記念の集いには市長からメッセージが寄せられています。
　今年は非核神戸方式40周年です。現市政は自民党よりですが、考え方は違っても、核兵器廃絶を一歩でも進めるために、平和を守るために１点共闘はとても大切です。

抑止力を考える（1）　　つだわたる　（美賀多台）

　I. Tさんの「攻めてくると戦争になるのちがい」を読み、それに対する、はなこさんの「『好むと好まざるとにかかわらず、自衛隊と米軍は現実には圧倒的な「抑止力」になっているのである』という文章にひっかかりを感じてしまいました」を読み、なるほどなあ、と思いました。
　I. Tさんは、冒頭に「中国が攻め来たらどうするんや」という、よくある意見を紹介して、それに答える形で自衛隊と米軍（以下「米軍等」）が抑止力になっている、と言っています。その上でその抑止力があっても、尖閣列島での軍事衝突から「『戦争になる』事態は、ないとはいえない」、「真に懸念するべきはこの事態」と指摘しています。

ですから、米軍等は中国が「攻めてくる」ことに対する抑止力があっても「戦争になる」可能性があるという意見だと思います。これは、米軍等は「戦争の抑止力」ではない、と言う意味です。

これに対してはなこさんは、再意見（こちらはなぜ「要旨」になっているのか、なぜ全文ではないのか）で、「軍隊、軍事力を持つことが抑止力になるのだろうか？」と、軍事力全般の抑止力に否定的です。

ということは、I. Tさんが提起した「攻めて来る」と「戦争になる」という違いについて議論を深めるというテーマからは、少し観点がずれた議論になっていると思います。

私が「なるほどなあ」と思ったのは、私もそうですが、相手の意見がおかしいと思うと、その問題提起、設問に直接的に答えるのではなく、自分の意見を言ってしまうことが、時々あるからです。 その結果、本当に考えないといけない問題を忘れてしまうと言うことです。

もう一度、議論を整理すると、I. Tさんもはなこさんも「中国が攻めてくる」ことはない、と言っています。I.Tさんは国際的な政治経済の情勢と、さらに米軍等が抑止力になっている、といいます。

はなこさんは、I. Tさんが前半で展開されている国際的な政治経済の情勢で十分、軍事力は余分という意見でしょう。あるいはもっと9条と9条に沿った外交を強調するべき、ということでしょう。

私は、気持ち的には、はなこさんの意見に同意します。ですが、ここで「9 条の会」として重要なのは、「中国が攻め来たらどうするんや」と言う意見の持ち主に対して、納得させることができる考え方は何かと言うこと、だと思います。

その場合はI. Tさんの意見の方がわかりやすい、のではないですか。

もう少し書きたいのですが、長くなりそうなので、次回に、抑止力とは何か、も含め考えて見たいと思います。

抑止力を考える（2）　　つだわたる　（美賀多台）

私自身は、中国や北朝鮮が「攻めてくる」とはとても思いませんが、中国などの脅威を感じている人は多いと思います。だけど米国が「攻めてくる」と思う人はほとんどいま
せん。

「鬼畜米英」と呼んでアジア太平洋戦争を経験した人も、そんなことは言いません。都市部への無差別大空襲や原爆投下など、残酷な殺戮を受けていますが「ノーモア・ヒロシマナガサキ」等、原水爆廃止の運動や空襲を記録する運動はあっても、反米的な言辞や運動は、一部の過激派を除いて、日本にはほとんど無いと思います。

戦後の日米関係は安保条約があり政治や経済、軍事的な対米従属関係が大きく暗い影を落としていますが、文化芸術、教育、スポーツ、観光など生活に身近なところの市民的全面的な交流が、日米間にはあります。

沖縄の基地の実態などを見ると、アメリカの世界戦略のためには日本人の命も人権も平気で蹂躙していますし、黒人少年を殺した警官が不起訴になるなど、アメリカ社会の本質的なところに人種差別が根強くあると思います。

でも日本人は、そんなアメリカの負の部分を見ません。仮に日米安保が平和的に解消されても、日本人の多くはアメリカが「攻めてくる」とは思わないのではないでしょうか。

逆にアメリカ人は日本人のことをどう思っているのでしょうか。イチロー選手や黒田投手等、メジャーリーガーの声援を見ていると、国民レベルの親近感は確実に高まっています。

また欧州を考えたときに、EUが 28 国約 5 億人を統合しています。EUの前身である欧州石炭鉄鋼共同体設立の主旨がフランスとドイツの積年の対立を解消することであり、そこから発展しています。現在では多くの複雑な課題を抱えていますが、両国を中心に欧州全域が、政治、経済、文化などあらゆる面で国境線が薄くなっています。

もはや欧州における国家同士の戦争は考えられない情勢だと思います。

こういう国民的総合的な理解と交流を深めることが、国家による戦争の抑止力であると思います。そして、それは誰もが考える、ほとんど自明のことです。

ですが、そういう交流が出来ない国に対しては「軍事力で抑え込むしかない」ことから軍事力や軍事同盟が抑止力になるという、考え方が出てくるのでしょう。

「中国が攻めてきたらどうするんや」と言う人は、中国に北朝鮮に対しては「交流できない国」と見ているのでしょうか。　（続く）

抑止力を考える（3）　　つだわたる　（美賀多台）

軍事力や軍事同盟による抑止力という考え方は、戦争をする主体が国家であり、しかも「戦争を仕掛ければ手酷い反撃を受ける、戦争を仕掛けても、得るものより失うものが多い」という判断力、いわば人間的理性、経済的合理性が機能している、と言う前提だと思います。

わが日本の歴史を振り返った時、無謀な戦争に突入して行った時代があります。1931 年満州事変を皮切りに中国大陸に侵略戦争を仕掛け、ついには米国、英国等世界中を相手に戦争しました。

政府や軍部の責任者たちは、狂信的なごく一部を除いて、米英と戦争することは、その軍事力、総合的な国力の違いから、敗北しかないことを知っていました。しかし誰もこの戦争への道を止めようとしなかったのです。その理由は色々あると思いますが、例えば山本五十六が「半年や 1 年は暴れて見せる」と言ったように、自分の置かれた立場で責任を果たすことはしても、国全体、ましてや国民の未来のことを考えては行動していません。 それは、保身しか考えない政治家であり軍人である、としか思えません。

米国の要求である中国から手を引くことは、日本国中が「満蒙は日本の生命線」と思い込んでいた時代では、非常に困難であった、と理解します。国際連盟から脱退した時、全権大使だった松岡洋右は外交の敗北と自覚していましたが、新聞等日本国中が喝采をあげていたのに驚いたと言っています。

言論、思想信条の自由がない国、民主主義が機能していない国では、物事の真実、本質が多くの国民にはわからない状態でした。もしかしたら内閣や御前会議の構成メンバーであっても、どこまで情報を共有していたのか、と思います。

そして主権者であり、全軍の統帥権も持っていた天皇も開戦を拒否せず、1941 年 12 月 8 日、真珠湾とマレー半島でまったく見通しのない破滅的な戦争に突入します。

この歴史を見ると、天皇制軍事独裁国家、大日本帝国は、まったくの無責任体制であったとしか思えません。戦前の日本のような国には「抑止力」は働かない、と考えても良いと思います。 大日本帝国と現在の北朝鮮は、よく似ているような気がします。ということは、北朝鮮は、彼我の力関係を認識しても、自滅的な戦争を仕掛けてくる可能性があると言うことです。

戦前の日本は、国民の命より何より、天皇制を守ることが一番大事であったように、北朝鮮も現在の独裁政権を守ることが大事なのでしょう。 そう考えて行くと、北朝鮮に対しては軍事力で押さえ込むよりも、内政不干渉をはっきりさせて、経済制裁などと現在の国家体制に圧力をかけるよりも、国交を回復してさまざまなレベルでの交流を行うことが一番効果的であると思います

「拉致被害者」の捜索にしても、たくさんの日本人が北朝鮮に行くことで、色々な接点が見つかりそうに思います。（続く）

抑止力を考える（4）　　つだわたる　（美賀多台）

現在、沖縄の辺野古基地建設が強引に推し進められています。その根拠のおおもとは、戦争の抑止力として考えられている日米安保条約であり、日本に米軍基地を置くことを前提とする米国の世界戦略、そしてそれに積極的に迎合する安倍政権であると思います。

これに対して沖縄の人々は、絶対反対の意思表示をしています。米軍普天間基地は、世界で一番危険な軍事基地だと言われ、「その安全回避のために」辺野古へ「移設」をする、として日本政府が着工しています。仲井眞前沖縄知事が工事認可しました。

しかし、いろいろと調べていくと「移設」ではなく、新しい機能が付いた恒久的な「新基地建設」であることがわかってきます。基地建設反対を掲げて当選した翁長沖縄県知事は「沖縄自らが基地を差し出したことは無い」と言っています。前知事の公約に反する「新基地容認」は、県民に対する歴史的な裏切りです。

たしかに、沖縄では米軍基地容認を選挙公約として当選した知事や国会議員はいないと思います。自民党の国会議員や前知事は、県民を裏切る「転向」と公約違反で、政府と自民党に屈しています。

そして、この間、彼らを落選させてきた沖縄県民の意思は明らかです。これ以上、沖縄が米軍基地の負担をする必要はない、これは沖縄の人々だけでなく、日本全体にも徐々に広がると思います。しかし自分のところに米軍基地は来て欲しくない、という思いもあります。ですから沖縄の基地反対闘争が広がれば、日米安保条約の矛盾も考えるようになると思います。

日本政府が米軍基地を必要と考え、そして民主国家であるならば、その負担を負う地域の合意をとる必要があると思います。「辺野古が嫌なら普天間基地にかわる代替基地、代替案を出せ」など沖縄県や県民に責任転嫁するのはまったく理不尽です。　しかし安倍首相は年末から翁長知事との会談を避け続け、やっと形ばかりの会談をしただけです。政府は真剣に沖縄県と話し合う姿勢を見せていません。 工事を強引に進め、住民の反対運動を暴力で排除するばかりです。これは公共事業一般を進める手続きではありません。それは新基地建設を急ぐ理由はまったくなく、さらに、その根拠となる戦争の抑止力を仮に認めたとしても、沖縄に米軍基地を集中しなければならない理由もないからです。

日本全体の面積の0．6%しかない沖縄に、米軍基地の74%が集中し、県面積の10%を米軍基地が占めています。

抑止力はきわめて曖昧な概念です。それに対して基地の現状や新基地建設は具体的な環境破壊であり、沖縄県民の安全の破壊です。しかも基地の集中は抑止力の脆弱性を招きます。

理性的に考えればおかしなことばかりです。こんなおかしな辺野古新基地建設を平気で進められる日本、それを見てみぬ振りをする国民、まったくおかしな国です。

抑止力を考える（5）　　つだわたる　（美賀多台）

「戦争法案」が国会に上程されました。これらの法案は、「積極的平和主義」と集団的自衛権に基づき、自衛隊（専守防衛）を軍隊（戦争のための武装組織）として海外に出す理由を並べ立てているように思えます。

欺瞞的に平和、安全と言う冠を付けた「戦争法案」に対しては、新聞社の世論調査でも今国会で成立させる必要がない、と言う意見が多数を占めています。国民の多くは、法律の意味するところがよくわからない、急ぐ理由もわからない、ただこれまでの日本と大きく変わる恐れがある、そんなことを漠然と感じているのではないか、と思います。

労働組合で反対の決議をあげましたが、若い人に聞くと「よくわからない」「自分のこととして考えたことがない」「メリット、デメリットの説明がない」と言われました。

マスコミの状況は、全国紙では朝日新聞と毎日新聞は反対ですし、地方紙の多くも反対の論陣を張っています。しかしテレビの多くはあいまいで、安倍首相をはじめとするペテン師達の言葉を無批判に垂れ流しています。

テレビの報道番組などで見る、「戦争法案」に賛成する人の声は「日本を守ってくれる米軍の支援は当たり前」、「中国が侵略してくる」と、政府の宣伝通りのことを言います。だから抑止力を高めないと危ない、日米軍事同盟をいっそう強固にすることで抑止力が高まる、日本の安全は守られる、と考えているのでしょう。

自衛隊の海外派兵に対するリスクは極力隠されています。また米国と中国は武力衝突が発生しないように、「かなり意見交換をしている」（寺島実郎氏、TBSの報道番組サンデーモーニング）という情報がまったく入っていないようです。

米国は、アフガニスタンやイラクで「大量破壊兵器」という虚偽の理由をでっち上げて、米国に反対する勢力を軍事力で抑え込んできました。しかし中国に対しては、軍事的な抑止力だけではなく、多角的にあらゆる手段を使った抑止力を発揮させて軍事的衝突がないように慎重に動いています。

「中国脅威論」はまちがいなく国民の中に入っています。それにどう批判し応えていくのか。「戦争法案」を廃案とするために、国際情勢の真の姿も明らかにしながら考える必要があります。

抑止力を考える(6)　　つだわたる　(美賀多台)

憲法審査会で自民党推薦の憲法学者も含めて「集団的自衛権は憲法違反」と明確に言い切りました。この発言は「戦争法案」に反対する我々をはげましたし、多くの国民にも、この法案の本質を知らせたと思います。

朝日新聞の世論調査で内閣支持率が 39%に落ち、「法案に反対」が 53%になっています。

大きく潮目が変わりました。国会での数を背景に、好き放題言っていた安倍政権は言い訳を始めました。そしてついには憲法違反という批判に対して、安倍首相が考える「政治家の責任」なるものを言いました。

それに対して 6 月 19 日の神戸新聞正平調は「『国際情勢に目をつぶり(憲法の)従来の解釈に固執するのは、政治家の責任放棄』とも。権力者を縛る憲法について、あろうことか権力者自身が時々の情勢判断で変えてしまう。そんなむちゃな」と国会答弁に真正面から批判しました。

これは安倍首相が憲法を守る気などない、と言ったことと同じです。自身を憲法の上に置くような驕り高ぶりです。

また菅官房長官は冷静そうな対応をしていますが、極めつけの嘘つきです。「集団自衛権は合憲と言う著名な憲法学者は多数いる」と言った後で、3人しか名前をあげず「数じゃない」と言いました。

そして、その3人とは西修・駒沢大名誉教授、百地章・日本大教授、長尾一紘・中央大名誉教授です。彼らは安倍政権でさえも違憲という徴兵制を「合憲」と言う特異な憲法学者です。

仮に、もしそれほどの国際情勢の変化、日本に対する脅威があるのなら、憲法に違反する武力による「抑止力」ではなく、外交戦略など平和憲法の精神に則った「抑止力」の方法がいくらでもある、と思います。それを探り、努力することこそが本当の政治家の責任です。

現在の安倍政権は、そういうことには一切頭が回らない感じです。それは彼らが韓国や中国と敵対的な歴史認識を持つことと表裏一体にあります。

統一ドイツ初代大統領ヴァイツゼッカーの「過去に目を閉ざす者は、現在に対してもやはり盲目となる」という言葉が思い起こされます。9条の会の呼びかけ人梅原猛さんは、保守的な哲学者ですが、安倍首相が登場した時に「近衛文麿首相とダブって見える」と言いました。かつて「満蒙は日本の生命線」といって、中国大陸を侵略することしか考えなかった政治家や軍部を思い起こします。

戦争の準備をすることは戦争の「抑止力」にはなりません。日本の戦前の歴史から明らかです。(続く)

抑止力を考える(番外編)　　つだわたる　(美賀多台)

7月25日から自治体学校(金沢)に行ってきました。このエッセイとはテーマが違いますが、今回は、ここで聞いてきたことを書きます。

宮本憲一先生の「地方自治の危機と再生への道―憲法と沖縄問題から考える」という記念講演がありました。当然、現在の政治情勢の最重要課題である「戦争法案」が焦点として取り上げられます。今、

安倍政権が進めていることは平和と戦争の問題だけではなく、民主主義の破壊であり、日本国憲法の基本である、国民主権、基本的人権、恒久平和そして地方自治を破壊していると、怒りを込めた講演でした。

特に沖縄、辺野古の新基地建設に関し、沖縄県民の意思を無視して、国が「外交と防衛は国の専管事項」として強硬に埋め立て工事を進めようとする行為が、いかに憲法に反しているかを明らかにしました。

憲法は、住民の生命、生活を守ることを地方自治体の基本的な任務として、「地方自治の本旨」という、住民自治と団体自治の原則を定めています。中央政府と地方自治体は対等の関係で、戦前のような国の出先機関ではありません。

ですから地域と住民生活に大きな影響を与える米軍基地建設に際しては、十分な協議を行い、住民と自治体の合意を得なければなりません。しかも公有水面の埋め立て工事は、法律によって知事の許可が必要です。

現在、新基地建設のために埋め立て工事を進めている辺野古一帯の海は、沖縄でも最も優れた生態系や景観を持っています。ジュゴンなど絶滅危惧種の生物が多数生息する世界自然遺産の候補地にもなっています。

事前に環境影響評価を行いました。これについて、前沖縄知事の仲井真さんも当初は基地建設反対の公約を持っていましたから、防衛局が出してきた報告書には「25分野175件の疑義があり到底認めがたい」と言っていました。ところが「5年間3000億円の沖縄振興費を保障する」と安倍首相に言われて、公約を翻して、公有水面の埋め立てを許可しました。

変節した前知事を破って知事となった翁長知事は、専門家による第3者委員会をつくり再調査しました。そして「この許可には瑕疵がある」という結論を得て、許可取り消し手続きを取ろうとしています。

貴重な自然環境は破壊すると二度と取り戻すことは出来ません。最低でも国はすぐ工事を中止して沖縄の人々と再度話し合わなければなりません。

ましてや沖縄では知事選や先の衆議院選挙の選挙区選挙で「辺野古新基地反対」が明確に示されました。

安倍政権は、このように住民自治を否定し、地方自治を蹂躙しています。

違憲の「戦争法案」を提案し、言論や思想の自由に圧力を加えています。11本の重要法案の審議にたった116時間、1本当たり10時間しか掛けずに強行採決しました。民主主義を壊す政治を推し進めています。

それに対し「アベ政治を許さない」など日増しに反対の声が大きくなり、国民の圧倒的多数が「今国会で決めるべきではない」と言っています。

アベ政治を退陣に追い込みましょう。

抑止力を考える（7）　　つだわたる　（美賀多台）

国会の審議が参議院に移って、安倍政権は「中国の脅威」を出してきました。

新聞各社の世論調査でも内閣支持率が低下し、不支持が支持を上回るようになっています。応援団の読売新聞や産経新聞が、いくら設問に工夫を凝らしても、戦争法案に反対が賛成を上回っています。

SEALDs等の若い人から、歴年の闘士まで幅広い年齢層が参加する反対運動が全国で広がっています。「戦闘的」な労働組合ではなく、普通の主婦や学生が発言し、学者、法曹界などの奮闘が目立っています。

安倍首相は、反対が多いのは「国民の理解が進んでいない」ためだと言っていますが、この法案を「違憲」と断定した長谷部教授は「国民の理解は進んでいるから反対が増えていく」と言いました。 さらに集団的自衛権に賛成している人でも、審議や説明が不十分であり「なぜ急いで成立させないといけないのか」と、今国会で成立にさせる必要性に疑問を持っています。

安倍首相は、国民的な反対が広がる情勢を変えるために「中国の脅威」が効果的と判断したのでしょう。

中国が今にも日本に攻めてきそうだ、と国民に思い込まそうとしています。中国が、南シナ海でベトナムやフィリピンと争っている、だから東シナ海にも軍事力によって領土を広げにやってくる、尖閣諸島に上陸する、かのような、イメージを持たそうとしています。

9条の会が駅前で宣伝活動をしていると「中国や北朝鮮が攻めてきたらどうするのか」という反発があります。それは比較的年齢の高い男性が多いようですが、「お上」を信じやすい層ですね。

「戦争法案」は全体として、自衛隊の活動範囲を広げる方向で、しかも、その制限があいまいです。

日本の防衛だけではなく他国の防衛に出動することと、地球の果ての戦闘現場にも派兵が出来ます。それは自衛隊が米軍の役に立つ存在になることと、協力協同（従属的な）の範囲を広げることを目的としています。

日米軍事同盟を強化し、それが中国に対する「抑止力」の強化になる、と言います。つまり軍事的「抑止力」で国を守る、それを強調し、それに同意する国民は多い、と判断して情勢を変えようとしています。

たしかに「国益」と「国益」がぶつかる国際社会では軍事力が必要という意見に同意する人は、多いと思います（私は反対ですが）。

「戦争法案」に対する今の情勢は、軍事的「抑止力」の是非を問うのではなく、軍事力は「自国の防衛」という必要最小限度にとどめ、無制限に広げていくことには絶対反対、という１点に絞った運動を広げていきましょう。

「戦争法案」反対勢力を分断したい安倍の手に乗らず、安倍政権打倒へと進めましょう。

抑止力を考える(8)　　つだわたる　（美賀多台）

　戦争法案が安倍政権の強行採決によって国会を通りました。しかし法案に賛成派も含めて、安倍政権の「不真面目さ」に多くの国民から批判があります。
　そして、そもそも違憲の法制度ですから、これでおしまい、と言うことにはなりません。多くの人々から「闘いはこれからだ」と声があり、とても励まされます。
　「15年安保闘争」は、保守革新という政治的な傾向、護憲改憲、自衛隊や日米安保条約の是非、さらには憲法9条の評価の違い等、これまでなら「とても超えられない」と思っていた違いを超えて「戦争法案自体がおかしい」「立憲主義に反する」「国民に説明していない、国民の声を聞かない」「国会審議、答弁がおかしい」と言う声が、多くの年代、階層から出てきました。
　そして「安倍政治を許さない」と繰り返し全国各地で反対の集会があり、国会を取り囲む12万人のデモが国民の声を代表しました。
　9月27日のサンデーモーニングでは、この闘いを振り返って「政治を見る国民の目が変わった」と強調しています。私はさらに新聞の姿勢も変わったと思います。
　毎日新聞の岸井さんは、安倍政権の国民を騙す手口を明らかにしました。
　「安倍政治」に対して、毎日新聞や朝日新聞は明確に批判する立場から報道しました。論調が「ほとんど変わらない」と言われた全国紙が、立憲主義を分水嶺に二分されました。読売新聞は明確に「安倍政治」を擁護する論調です。地方紙の多くは「安倍政治」を批判しています。
　これまで政治的な発言が少なかった学生や、学者が行動し反対運動が盛り上がる中で、芸能人からも「安倍政治」に反対する声が上がりました。　俳優の宝田明さんは堂々の講演をしていますが、テレビやCMなどで活躍するテレビタレントたちも「平和を守れ」と言いました。笑福亭鶴瓶さんや石田純一さんなど意外な感じですが、この政治の流れの中で明快に語りました。
　デモを批判した松本人志さんも含めて、色々な立場の芸能人が政治を語るようになると面白い世の中になると思います。
　日常的な生活の中、職場や地域で政治的な話題が自由に語られるようになれば、政治意識や民主主義は高まり、面白い世の中になると思います。
　そうなるような活動をしたいものですね。

相手の土俵に乗ってでも,抑止力を考える　（9）　　つだわたる　（美賀多台）

　新聞を整理していると、7月 14 日付け神戸新聞に「安保法案への賛成、反対意見」というのが載っていました。
　それを読みながら、双方の違いはなにか、わかりあえる議論は出来たのか等を考えてみました。

　賛成意見では、見出しは「軍事的脅威を議論すべき」で①「独立した先進国として責任を果たす。(野党は)国家の安全保障が見えず」②「中国や北朝鮮の軍事的脅威あり」③「憲法が日本を守るわけでは

ない」④「世界は激動している。日本だけが変わらずに今の平和を維持できるとは思えない」⑤「助け合おうとせず、自分だけ助けてもらえると思うのは傲慢」⑥「日米同盟強化で抑止力は高まる」⑥「法案が戦争につながる、と言う世論を高める動きは疑問。今のままで日本の平和が守れるのか」⑦「戸締りであれ、防災であれ、国防であれ、備えは必要」⑧「米国の駐留を拒否し、中国の海洋進出を招いたフィリピンを反面教師にすべき」とありました。

反対意見の見出しは「武力は平和をもたらさない」で、「憲法違反」「急ぐ理由がわからない」「専守防衛に徹すべき」「武力が平和をもたらすことはない」等で、私にとってごく当たり前の意見です。

平和を守るために有効なのは、武力なのか憲法なのか、これで議論しても、お互いの違いが分かるだけで、歩み寄るのは難しいでしょう。

民主主義や立憲主義は、現代社会の普遍的な価値だと思いますが、「選挙で勝った政権の政策を遂行するのが民主主義」「時の政権は憲法の解釈権を持つ」「違憲合憲の判断は最高裁」といわれると、これまた平行線になるでしょう。

であるのならば、相手の土俵で議論する手はどうでしょうか。賛成派は国際社会の「現実」だけを見て「抑止力」を高める法制度が必要といいます。それを慎重に分析すると言うことであれば、話し合うことが出来たかもしれません。

「軍事的脅威」に対応して戦争を「抑止力」する実効ある法制度を考えるのであれば、その脅威の資料をもとに、議論を闘わし多角的に分析しなければなりません。

しかし、この法案は「大変重要」「国民の意見が大きく割れている」「不合理な説明」「国民の理解がない」「憲法学者の多くは違憲」にもかかわらず審議不足のままに強行採決されました。

ですから安倍政権は、賛成派にも「説明不足」であり、「軍事的脅威」の実態は明らかにされていません。

違憲の「戦争法」廃案を目指すのは重要で、そのための運動を続けていかないといけません。さらにこの法律の前提という「軍事的脅威」の虚実も明らかにしないと、と思います。

抑止力を考える（10．完）　　つだわたる　（美賀多台）

元自衛隊航空幕僚長、田母神俊雄さんは、昨年の朝日新聞労組主催のシンポジュウムで「プロレスラーに喧嘩を売る奴はいない。同様に軍事力を増強することで、周囲の国から攻められることはない、平和になる」と言いました。　なるほど、見るからに暴力的な人がいれば、たいていの人は喧嘩を売るどころか避けて通るでしょう。ものすごく単純な考え方ですが、それで平和が保てると、納得する人もいるかもしれません。しかし私は「プロレスラーが暴れたらどうするのか」あるいは「無敵の力道山もチンピラヤクザに殺された」と思いました。

今、安倍政権は「戦争法」を成立させて、専守防衛から、解釈改憲によって集団的自衛権を容認し、いつでも自衛隊を海外の戦争にも派兵する、他国の戦争に加担する準備を整えました。世界最大の米軍と、軍事費世界8位の日本がタッグを組んで、最強のプロレスラーが「世界の平和を守る」ために暴れまくるぞ、と宣言したように私には思えます。またリングの上では無敵の強さを誇った力道山が、見知らぬ男といきなり喧嘩になって、刺されて死亡するのは、まるでテロを見ているようです。

これと同様に、武装することで平和が保たれる、というのは時代錯誤です。強固な軍事同盟が「抑止力になる」というのも、国家同士が交戦権をかざして戦争するときに限ってしか通用しない、と思います。 近代戦争は軍隊同士の戦いから、国全体をあげた総力戦となりました。戦場は、軍隊が戦う地域だけではなく、一般市民が住む都市も攻撃の対象となりました。第２次世界大戦では、連合国枢軸国を問わず、一般市民、非戦闘員に対して無差別攻撃を加えました。原爆は、その最たるものです。

そして今や、交戦権をかざしての戦争だけではない「戦争」が広がっています。その犠牲者の多くは一般市民です。子どもや弱い人たちに容赦なく爆弾は落とされています。そして、それに反発したテロ行為は、紛争地域だけではなく、広範な一般市民を巻き込み、世界中に広がっています。戦闘行為に加担するだけで、その国はテロの標的になるのです。つまり戦争に加担し巻き込まれることは、軍隊だけの問題ではないのです。国民は、直感的にそれを見抜いたと思います。ですから軍事力で国を守ろうという人も含めて「今国会での戦争法成立反対」が８割を超えたと思います。現代の戦争では軍事力、軍事同盟という抑止力は無力です。

平和憲法は、積極的に戦闘、戦争に関わるのではなく、軍事力ではない別の方法で戦闘、戦争を終わらせる、そういう国づくりを、政府と国民に求めていると、私は思います。（終）

私のシネマライフ

つだ わたる（美賀多台）

映画を本格的に見始めたのは働き出してからで、今年で38年です。だいたい年間20～60本を見続けてきました。子育て等で忙しい時期は減りました。神戸に来て映画サークルに入ったことで、見る映画の幅が広がり、映画の面白さがわかってきました。それは二つの理由があります。

一つは世界各地の映画を見るようになったことです。映画サークル「市民映画劇場」は今年12月で500回になります。邦画と欧米系が多いのですが、アジア、中南米、アフリカの映画も上映します。イヌイットやロマ、クルドといった少数民族に焦点を当てた映画もありました。これまで約60か国の映画を上映しています。

もう一つは映画に係わる話を聞くと言う事と、映画について話し合うことを続けてきたからです。映画サークルは、大学の先生や留学生、研究者等を招いて、映画の背景となるような学習会を開催しています。そのことでより深く映画を味わえるし、映画以上の知見に触れる機会となります。また感想を交換すると「こんな見方もあるのか」と気づきます。自分の意見を言うことは、感性の再確認になります。

私の人生の映画を2本紹介します。1本は『無人の野』というベトナム戦争を描くベトナム映画です。これまで米国側から見たベトナムしか知りませんでしたが、この映画でベトナム人の気持ちを知りました。侵略戦争の本質に触れたように思います。ベトナム人は、子育てや農作物を育てる日常生活を送りながら、米軍と闘っていたのです。映画を見てから歴史観が変わりました。

もう一つは『柳川堀割物語』です。福岡県柳川市で1970年代に実際にあった、市職員と市民が力を合わせて、生活排水で汚染した堀割を浄化、再生させた「事件」のドキュメンタリーです。私の仕事であるまちづくりについて、深く考えさせられました。

いい映画に出会えることは、人生の楽しみを増やしてくれると思います。みなさんも大きなスクリーンで映画を見てください。

58歳からのフルマラソン

つだ わたる　　（美賀多台）

11月9日にハーフマラソンを走ってきました。2時間15分3秒、初めてのレースで、私にとってはいいタイムです。疲れましたが、次につなぐ走りが出来ました。

23日には神戸マラソンのボランティアに行きました。すごいスピードの人、必死に走っている人、よたよたと今にも倒れそうな人、みんないいですね。来年は私も走りたいと思いました。

私は運痴です。小学校時代から運動会は嫌いでした。徒競走ではいつもべべたです。中学時代のスポーツテストもまったく駄目でした。高専時代に校内剣道大会で優勝二回のチームの一員であったぐらいがスポーツに関するいい思い出です。

20歳までは、バドミントンを少しやった程度で、何も出来ません。しかし働き始めてから、誘われたらなんでもやってやろうと、気持ちを入れ替えました。それで職場にあったスキー、テニス、野球というスポーツクラブに入りました。野球ではピッチャーもやらしてもらいました。どれも下手でしたが、充実感はありました。

40半ばからスポーツジムに通い始めました。体重が増えたのと、中性脂肪や尿酸値、コレストレールなど生活習慣病の危険値が出たからです。ジムでは主に水泳をしました。気分転換になる程度、気楽に楽しみました。

2年前に職場の駅伝大会に誘われて、員数あわせで参加したことで、それが変わりました。1 年目は何とか走りましたが、不満が残るものでした。もう少しできるだろうと、今年も走りました。

その高揚のまま、神戸マラソンに応募し、3月からマラソンに向けて練習を始めました。今日まで1週間に1回は10㎞ 以上を走り続けています。でも外れました。

ハーフマラソンを完走したことは自信になりました。でもその延長線上にフルマラソンがあるとは思いません。42.192㎞ は大変な距離だと改めて思いました。

58歳からの冒険に胸が高鳴っています。限られた時間を使って練習し、必ずフルマラソンを走りたいと思っています。人生の目標が増えました。

笑いを武器に　文化的生活を考える(1)

つだわたる　（美賀多台）

今年 3 月、60 歳定年退職を迎えます。

しかしまだ働き続けます。元気ですし、いろいろやりたいこともあります。そのためには一定の収入も必要です。私の年金(一部)が支給されるのは 62 歳からです。

それでも現役時代よりも、自由に使える時間は多くなると思います。それを何に使おうか、今から、色々と考えて、わくわくしています。

働き始めた当初から、私は「仕事ばかりの人生はいやだな」と思っていました。きっと世の中を舐めていたのだと思います。

人生の目標を一つ立てました。1 年間で映画は 50 本見る、本を 50 冊読む、芝居は 10 本見る、美術館に 10 回いく、という「文化的な生活がしたい」ということです。しかし世の中は甘くなくて、とてもそこまで届きませんでした。

ここでは、そういう「文化的なもの」に触れたときに、考えたことを書きたいと思います。

最近、増えたのは落語会に行くことです。もともと好きでしたが、ラジオ、テレビで聞く程度でした。それがCD「昭和の名人」を購入し、文化ホールの「東西落語名人選」は毎回、天満の繁盛亭

も2回行きました。上京する機会があると、時間を作って新宿の末広亭とか上野の鈴本演芸場等の寄席に行くようにしています。

そんな実演の舞台で、こんな話を聞きました。

歴代首相の中で一番体重の重い、頭の軽い首相が、初めての訪米で大統領に挨拶した時です。最初だけは英語で挨拶して、あとは日本語で通訳を介して話し合うというものです。

「まず『はう、あー、ゆー』と言ってください。すると相手が『あい、ふぁいん、さんきゅう、あー、ゆー』と返しますので『みー、つー』と言ってください。それだけです」とアドバイスを受けました。

しかし頭の軽い首相は、出だしを「ふう、あー、ゆー」と言ってしまったのです。相手の大統領は困ってしまって「あい、あむ、ひらりーず、はずばんど」とジョークで返しました。当然彼は「みー、つー」と言いました。

これは実話でしょうか。時間をおいて二人、松元ヒロさんと三遊亭歌之助さんから聞きました。ともにバラエティ番組などテレビに出る人ではありません。首相経験者を笑い飛ばすことは、現在のテレビなどのマスメディアでは中々できません。

政治や社会批判、権力者や金持ちを笑い飛ばすことは、芸人、文化芸術の一つの役割です。しかしテレビなどで人気のある人は、むしろ弱者を笑い、権力を批判する人を無粋であるかのように言います。権力の幇間に落ちています。

実演を見るのは、笑いを武器にしている芸人を応援する気持ちもあります。

団結は文化　　文化的生活を考える（2）

つだわたる　（美賀多台）

新聞やテレビ等で、春闘が「本格化」という報道が出る時期です。春闘は春の季語となっていますし、私が働き始めた1970から80年代は、まだストライキを構えた賃上げ闘争がありました。春闘は「国民春闘」へ発展し、賃上げだけではなく福祉や経済政策の改善も要求しました。電車も止まり、国民生活に「影響」をあたえました。

現在は、労働組合の組織率が低下し、デモや集会も目立たず、ストライキはほとんどありません。私の職場では、スト権確立のための批准投票を実施し、学習会を開催していますが、賃上げを闘う、という感覚は薄れています。

朝日新聞で1月20日から連載されている「教えて春闘」を読んで、改めて春闘が労働者、国民から「離れている」と感じます。記事自体も、春闘なり労働組合の本質な課題を勉強して書いているのか、疑問があります。

経団連や連合、そして政府に対し課題を指摘するものの、現状の閉塞感を打ち破る意見を探っていません。

戦後、労働組合運動は平和憲法のもとに燎原の火の如く広がりました。それは多くの成果や失敗を生みながら、1989年「労働戦線の再編」を経て今日に至っています。

労働基本権は社会権であるとともに文化であると思います。しかし労働運動の原点である「労働者や弱者が団結して闘う」という思想は、現代日本では尊重されていません。

昨年の邦画『きみはいい子』は児童虐待や小学校の学級崩壊など、大人と子供を巡る困難な実態に鋭く描きました。しかし教師たちが団結して問題に立ち向かう姿はありません。

5月に『明日へ』という韓国映画を上映します。これはスーパーマーケットで働く非正規の女性たちが、不当な解雇に反対して労働組合を作り闘ったという 2007 年の実話に基づく映画です。

実話ですから「闘った、勝った、ばんざい」と言う映画ではありません。でも困難であったとしても人間としての生活や誇りを守るために、団結して闘うことが大事だ、という思いが伝わってきます。 東日本大震災以降「絆」が強調されました。私は「団結して闘う」文化が大事だと思います。

自由な労働時間　　文化的生活を考える（3）

つだわたる　（美賀多台）

先進資本主義国の中で、日本は米国と並んで最も労働時間の長い国です。「死ぬほど働く」と驚かれる「カローシ」は世界共通語になっています。

労働基準法を守らず、人権を認めない働かせ方をするブラック企業が、数年前から批判されるようになって来ました。

ブラック企業の代名詞ともなった居酒屋ワタミの創業者は「死ぬまで働け」と言い放ちました。ユニクロもそうですが、同様の考え方をする「カリスマ経営者」は多いようです。

彼らは、労働者に会社のために働く「滅私奉公」を強要することが大好きで、会社あっての労働者であり、会社の繁栄が労働者の幸せに直結すると言います。しかし本音は労働者の命や生活よりも会社が儲けることに固執しています。

ブラック企業は労働基準法を守らず、時には暴力をふるい、罵声を浴びせることで、人権を侵害し、特に長時間労働と休暇を取らさないことが、労働者の心身を破壊しました。

彼らによって、有為な若者の人生が潰されています。しかし世間もマスコミも意外なほど批判しません。　日本は、ILO（国際労働機構）の労働時間規制に係る条約に一切批准していません。財界の強い意向もありますが、労働組合運動がもっと活発であった時代でも、賃上げ要求に比べて労働時間の短縮を求める要求は強くはなかったと思います。

そこには日本人の労働観、「勤勉」「勤労」を尊ぶ特性から、休むことを罪悪視する考え方があります。それが「カローシ」にまでいたる長時間労働を強いる文化風土の根底であるように思います。期待に応えられない自分を責めるのです。

かつて公務員には「休息時間」（2006年廃止）というものがありました。1日15分×2＝30分、これは労働基準法で定められた無給で拘束されない「休憩時間」とは別です。いわば自由な労働時間です。働いていても休んでいてもいい、という時間です。

働く時間の中に休む時間を入れるなんて、とてもいい考え方であり制度です。
労働と休憩を一体として考えることが、文化的な生活です。

労働者の良心　　文化的生活を考える（4）

つだわたる　（美賀多台）

三菱自工（株）が実験データを捏造、改ざんしていました。幹部が謝罪し外部専門家による「真相解明」を言っています。
調査するまでもなく、主な構図ははっきりしています。会社の責任ある幹部が命じて、現場を担当する労働者がそれに従ったということです。
労働者のミスや一人の悪意で実行したということではなく、会社ぐるみの組織的な犯罪です。
自動車産業で言えば、世界的な大企業であるドイツのフォルクス・ワーゲンの実験データの偽造も記憶に新しいことです。
マンションの基礎杭の施工データ捏造は業界全体に広がっているといいます。東洋ゴムもビルの免震装置という人の生死に直接つながるようなことを偽造しました。
少し前には食品偽装がマスコミ等で立て続けに報道されたこともあります。 一流といわれる企業で、このような組織的な犯罪行為がなぜ起きるのか。「利益優先」が見えますが、それはいずれ説明されることでしょう。それとは別に、私は気になることがあります。
担当した労働者の気持ちはどうなのか、ということです。直接の担当者だけではなく、関連する職場の労働者に「突撃インタビュー」もなければ新聞、テレビ、週刊誌やネットにも出てきません。タブーのように報道されません。
末端の労働者は、上司の命令で機械的に実行するだけだから、そこに意見を聞いても意味がないと思っているのでしょうか。
担当した労働者は、自分がやっていることの意味を十分自覚していたはずです。それでいいと思ったのか、良心が押し潰されたのか、わかりません。
私は、労働者個人の仕事に対する誠実さ、良心が社会を支える力だと思っています。それがないがしろにされています。企業の犯罪を考えるとき、歯車とみなされる労働者個人の良心の自由を、あまり問い詰めません。なぜでしょう。
それを明らかにすることが、こういう企業犯罪を防止する決め手になると、私は思います。

自由な言論　　文化的生活を考える（5）

つだわたる　（美賀多台）

ヘイトスピーチを規制する法律ができました。「専ら本邦の域外にある国若しくは地域の出身である者又はその子孫であって適法に居住するもの」と守る対象を限定し、しかも罰則規定がないのが残念ですが、とりあえずは一つ前進だと思います。

ヘイトスピーチとは「人種、出身国、宗教、性的指向、性別、障害などに基づいて個人または集団を攻撃、脅迫、侮辱する発言や言動のこと」と言われます。その表現は下品であり「ぶっ殺せ」などと恐怖を覚えるような罵詈雑言です。

私も、実際に三宮センター街の入り口で、その集団を見ました。彼らは周囲を機動隊に囲まれてスピーカーでよく聞こえないことをがなり立てていました。さらに、その周辺には「カウンター」と呼ばれる人々がいて「人種差別はやめろ」「嘘をつくな」と叫んでいました。

ちょっと異様な風景です。

表現の自由は守られるべきですが、特定の人種、民族や社会的弱者を差別し排除するなど基本的人権を侵害する言動を「公共の空間」で行うことには反対です。しかもヘイトスピーチを行う団体の一つである在日コリアンを攻撃する「在特会」（在日特権を許さない市民の会）は「在日特権」などという根も葉もない嘘をばら撒きます。

しかし虚偽だとしても、そういう人たちの意見を法規制によって押さえ込むだけでよいのか、とも思います。

産経新聞は「南京事件や慰安婦問題等で日本の正当な主張が『差別的言動』とされる」と書いたそうです。彼らの言い分には納得しませんが、私は反対意見も間違った意見も、世の中に必要だと思っています。

しかし異なる意見を上手に闘わせることは難しい。「朝までテレビ」はひとつの方法でした。文化の成熟には、自由な言論を闘わせる仕組みを持つべきです。

研修を成功させるには　　文化的生活を考える（6）

つだわたる　（美賀多台）

コリジョン・ルールが変更されます。といってもプロ野球ファンでないと、何のことかわかりません。コリジョン（Collision）とは英語で衝突のことで、野球の本塁上で捕手と走りこんでくる走者の衝突に関わるルールです。

言いたいことは内容ではないので、その説明しません。衝突によって大きな怪我をしないようにと、今シーズンからルールを決めました。しかし 3 月末に開幕して 4 ヶ月でルールの見直し、変更するものです。それは現場の選手、監督の評判があまりにも悪いからという理由です。

ルールの変更理由は7月 20 日頃の新聞で報道、解説されています。私はその中身よりも「昨秋から今春にかけてキャンプ、オープン戦で現場への説明を繰り返してきたが、その時は質問がほとんど出なかった」に注目しました。

選手の身体を守るルールですから反対意見はなかったのかもしれませんが、点が入るか入らないか、本塁上のルールはきわめて重要です。それなのに意見、質問がなかった、と言うことに意外な感じがしました。

そこで職場のコンプライアンス（法令遵守）研修を思い出しました。懲戒処分にかかわる重要な問題ですが、ほとんど質問、意見が出ません。全員が真剣に考えていないと言うことではありません。管理職が講師をし、当たり前に守るべきことを説明しますから、それを拝聴して終わり、となるのです。

物事を学び考える時は、手軽な順番で①講演などを聴く、②本、文献を読む、③会議等のチューター（Tutor）をすると言われます。②と③の間に、突っ込んだ意見交換があるのでは、と私は思います。

気軽な疑問を皮切りに、立場や経験が違う人から率直な意見、質問が出ると問題の本質に迫ることができます。

研修を成功させるには討論を盛り上げることです。そのためには会議での発言に責任を負わせない、危うい無責任な意見も言ってもいいという工夫もあるのかな、と思います。

研修、会議は大事です。

日本選手が負けると悲鳴　　文化的生活を考える（7）

つだわたる　（美賀多台）

リオ・オリンピックが大きな事故もなく、無事に終わりました。南米大陸初めての開催を決めた時は、新鮮な期待を持っていました。しかし今のブラジルは政治も経済も最低の状況です。直前まで「オリンピックよりも貧困対策」を求める反対運動もありました。

4年後は東京です。日本はどんな社会になっているでしょうか。爆弾テロの危機だけはないことを願っています。

閑話休題。地球の反対側の国ですから、真夜中を過ぎても実況放送がありました。競技が次々と続くので、ついつい夜更かしをします。熱心に見たわけではありませんが、知らない国の選手でも、その躍動感にわくわくしました。若人たちの力漲る姿は美しいし、多くのドラマが生まれました。

ライブで見るのが怖いという感想を聞きました。「期待を背負った日本選手が負けたら」と心配し、負けると悲鳴が出るといいます。私は、勝っても負けてもいいプレイをすればいいだろう、と思うのですが、そうもいかないようです。

新聞でも国別のメダル数が出され、閉幕の翌日には「東京では金 20 個以上」という見出しが踊ります。ちょっと嫌な感じです。

競技での勝敗は大切です。最後まで勝ちに拘ることが選手の技量を向上させますし、ゴールまで、ゲームセットまで全力を挙げる姿に感動します。しかし応援する側は勝敗に拘るべきではない、というのが私の考え方です。

「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という名言があります。選手やコーチが闘いを振り返って、さらに精進するために勝敗を見つめなおすのは良いけれども、それをスポーツの最大の価値のように言うのは違うと思います。

ましてや「国を背負って」みたいな感覚もおかしいし「君が代」の強制など言語道断です。しかし権力側の人間は選手に「スポーツと国家、社会の関係を考えろ」と言います。

そういう彼らに「スポーツは人権であり平和だと認識しろ」と私は言いたい。

北風と太陽　　文化的生活を考える（8）

つだわたる　（美賀多台）

戦争法に反対と言うと「中国や北朝鮮が攻めてきたらどうする」という反論があります。小林節さんは「そうなれば優秀な自衛隊で守る」と明快にいいました。

北朝鮮の攻撃には専守防衛の自衛隊と憲法に即した法制度で十分に対応できるということです。

しかしミサイル発射実験や核実験を繰り返す北朝鮮に対して、それをやめさせることは専守防衛では出来ません。

北朝鮮の親交国である中国も含め、世界の多くの国が核実験等をやめるように批判し、国連でも制裁決議をしました。日本では制裁一色の論調です。

でもそれでは駄目だと思います。

彼の国は戦前の日本とよく似ています。国民の命や生活よりも軍事優先、首領様を神の如くに崇め、誰も政府批判が出来ない、逆らうと処刑。治安維持法の時代です。

今回でも、戦前の日本で国際連盟を脱退して帰国した松岡外相を国民や新聞が英雄のように大歓迎した如く、北朝鮮の人々は国際的な批判を気にかけていないように見えます。

そんな国を経済制裁で変えることは出来ません。ましてや軍事力では破壊はできても国造りはできません。

国民自身が自覚的に自国を変えることが1番です。それが困難なら、世界中の人々が彼らと直接につながることが出来ないか、と思います。

戦前の日本でも、欧米諸国を知っている人たちは、国際社会から孤立する日本を危惧していました。しかし庶民には、それらの情報は閉ざされていたのです。

現在の北朝鮮も同じではないかと思います。ですから核実験等をやめさせるためには、効果的な「制裁」よりも、彼の国の人々と交流を促進するべきです。暖かい気持ちを届けたら変化が生じます。

アントニオ猪木さんはよく行っているみたいだし、山田洋次監督も平壌映画祭に招待されています。文化芸術、スポーツ等での交流もいいし、多くの国が留学生を受入れるのがいいですね。若い人が国際社会を知ればその社会は確実に変わります。

憲法9条は専守防衛だけではなく、諸国民的との交流を求めています。

映画『シン・ゴジラ』　　文化的生活を考える（9）

つだわたる　（美賀多台）

今年の映画鑑賞本数は百本を越える見込みです。週休3日になって時間的な余裕が生まれ、精力的に観ました。

これまでは観たい映画を選んで観ていましたが、今はそれに加えて社会的な現象のように大ヒットしている映画も観ています。

今年で言えば『シン・ゴジラ』と『君の名は』です。これらがなぜヒットしているのか考えてみました。

『シン・ゴジラ』は、政治家や官僚を中心とした国家機構が「怪獣の来襲という『想定外』にどのように対応するか」という政治的なドラマとして「リアル」に描かれている、と新聞等の政治経済コラムの多くが取り上げました。

核廃棄物を体内に取入れた超生物ゴジラの日本上陸に対し、法制度、行政機関はどう対処するのか、住民の避難誘導はどうする、自衛隊出動の根拠は何か、在日米軍はゴジラを攻撃できるのか、核兵器の使用は・・・と言う具合に、ゴジラに現実をぶつける感じで映画は作られています。

ですからゴジラ＝大地震等の巨大な自然災害、あるいは原発事故に擬えて面白い、と言う評価です。

怪獣映画ですから、戯画的な面白さはふんだんに持っています。自衛隊と米軍のあらゆる兵器は跳ね返されますが、日本産業界の総力を上げた血液凝固剤を飲ませる「ヤシオリ作戦」（ヤマタノオロチ伝説にちなんだ名称）でゴジラを都心で凍結させます。映画はそのまま「続く」です。

私は本質的なところで評価できません。それはゴジラ自体を、放射能を撒き散らす、いわば壊れた原発のように設定しておきながら、国家の指導者たちが、制御不可のメルトダウンの可能性を恐れていないことです。しかも最後は核兵器を使えばゴジラを退治できると結論付けています。

原発廃炉に核兵器なのかと思いました。

興収 10 億円でヒット作といわれますが『シン・ゴジラ』はすでに 70 億円を超えています。普段めったに映画を観ない企業の中堅層男性が行ったようです。

（『君の名は』はブログ「半睡半醒日誌」で書きます）

希望と絶望　　文化的生活を考える（10）

つだわたる　（美賀多台）

米国の支配的な文化には根強い人種差別があると思っています。しかし日本のマスメディアは、それを避けています。

白人警官による黒人の射殺事件があると、さすがに人種差別として報道します。

しかし例えばデトロイト市の財政破綻の原因に人種差別があると指摘しません。全米では15％しかいない黒人が、同市では8割を占めていることや、なぜそんな人種構成になったのか、について焦点を当てた解説等はありません。

公務員の「高い」給料や年金が、財政破綻の原因であるかのようにいい、治安が悪いから人が出て行くと報道します。

富裕層がデトロイト市域から周辺のデトロイト都市圏に出て行き、公共交通しか利用できない貧困層が残ったと言われます。貧困層は黒人が多く、経済格差と人種差別は現実として結びついています。

第45代米国大統領にドナルド・トランプが当選しました。彼を支持したのは現在の政治に不満を持つ人が多いと言います。大企業の白人労働者が、労働条件の切り下げや企業の海外移転によって、プアホワイトへと転落したことは、トランプが言う移民のためだと信じているからでしょう。そこには多国籍企業の利益第1主義が抜けています。

トランプは米国第1主義を前面に出し、現在の政治を批判しながら、暴力と人種差別を肯定しています。結果的に米国民は、それを支持しました。そして彼は司法長官に白人至上主義のKKKに寛容な人物を指名しました。人種差別を推し進める勢力は活気づいています。

米国では1960年代の公民権運動など、差別をなくしていく粘り強い、血のにじむ闘いがありました。そして8年前に黒人の第44代オバマ大統領が生まれ、彼は希望を語りました。

しかしそこには現実との格差があり、彼に絶望した人がトランプを選んだのか、と思います。

現実の本質に迫る必要があります。現実が厳しいからといって絶望するとは思いません。むしろ偽の希望にしがみつくことが絶望を生みます。日本も同様です。

山田洋次『学校』　　憲法と映画（1）

つだわたる　（美賀多台）

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

2017 年は標記のシリーズを始めます。憲法のことはあまり勉強していないのですが、映画を観ながら考えたことを憲法に則して書いてみます。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

第1回は『学校』(1993 年)です。この映画は山田洋次監督の学校シリーズ(Ⅰ～Ⅳ)の第1作で、舞台になるのは東京都にある夜間中学です。西田敏行と竹下景子が先生役で出ています。

ここにはさまざまな境遇の人たちが集います。昼間の中学校に行けなかった少女、日本語の読み書きのできない在日のオモニ、不良少女、中国残留孤児の子ども等。その中に貧しくて学校に行けず、社会の底辺で生きてきた初老の男、イノさん(田中邦衛)がいました。

イノさんが病で死んだことを知った夜、彼らはホームルームでイノさんの思い出を話し合います。そして彼が「幸せであったか」と言う問い掛けが出ました。

イノさんの人生は「貧乏で、苦労ばっかりで何もいいことが無く不幸だった」と言う意見と「彼は彼なりに生きたから、幸福だ」「本人が幸福だったら幸福ではないか、他の人が決めることではない」、自らの人生を思いながら、彼らは口々に「幸福とは何か」を語ります。

でも結論は出ません。

このようなシーンは、山田映画ではよくあります。『男はつらいよ』では寅さんを囲んでとらやの面々が話し合います。山田ファンはこれを「寅のアリア」とか「幸福談義」と呼んで楽しみにしています。

映画は、それをみんなで考えること、話し合うことが大事と描きます。『学校』では幸福を考え、それを実現する術、生き方を学ぶ場が学校である、と伝わってきます。

「幸福とは何か」という問い掛けに対して、別の答えが出てきました。13 条の幸福追求権は人それぞれの生き方考え方の問題で、その談義から見えてくるのは、意見の一致ではなく個人、一人ひとりの尊重です。

韓国映画『明日へ』『外泊』　　憲法と映画（2）

つだわたる　（美賀多台）

この二つは、韓国の労働争議を元に作られた映画です。『明日へ』(監督：プ・ジヨン／2014 年、原題は『カート』)は劇映画で、『外泊』(監督：キム・ミレ／2009 年)は記録映画です。

大手スーパーマーケットが、パート労働者(レジ係りや清掃係り)の業務を派遣労働に振り替えるために、彼女たちに解雇を宣告したことに対して、2007 年 6 月 30 日彼女たちは労働組合を結成し、ストライキを決行します。

争議は 500 日以上続きます。最初は 1200 名が闘いますが、最後には組合員は 180 名になりました。そしてこのスーパーが別の企業に買収されて和解します。労働組合幹部 12 人を除いて、組合員は現職復帰するという「勝利」を収めます。

韓国の労働法制がどのようになっているのか、よく知りませんが、映画では、交渉を申し入れても会社は応じず、職場を占拠するストに警察が介入し 60 名が逮捕されます。

日本なら憲法 27、28 条で労働基本権や3権（団結権、団体交渉権、団体行動権）を保障しています。労組の交渉には企業は応じなければならないし、ストに警察が介入できるのかなと思いました。

明治憲法下では、このような労働者の権利を擁護する考え方はありません。世界史的に見ても 8 時間労働を要求して始まったメーデー（1886 年）も弾圧されました。それがILO（国際労働機構／1919 年）の結成によって、労働基本権が民主的な国際社会のルールなりました。労働基準もILO条約、勧告として普及しています。

日本国憲法も、その流れに乗っています。ところが日本は 189 条約の内、わずか 49 しか批准しない水準です。今、大きな問題となっている異常な長時間労働は、それを規制する条約に批准していないからです。

さらに自民党の憲法草案では、時代に逆行して公務員の労働基本権制約を明記するという反動性を露にしています。

憲法の規定や労働基準法等があっても、これを守らない企業、知らない労働者では困ります。学校での労働教育は必須だと思います。

（『外泊』のDVDがありますので観たい方は連絡ください）

『顔のないヒトラーたち』『アイヒマンを追え』　　憲法と映画（3）

つだわたる　（美賀多台）

「改憲」を声高く主張する人の多くは、憲法を否定するだけではなく、アジア太平洋戦争を「自存自衛の戦争」といい、アジア諸国に対する戦争犯罪を否定します。総理大臣になってもA級戦犯を祀る靖国神社を参拝します。

歴史的事実を歪めることが、どうして許されるのか。それは、戦争を遂行した人々が、その責任を問われることも無く、戦後社会の中枢に居座ったためだと私は思います。

戦後の西ドイツは違います。

ニュルンベルグ裁判が終わった後、ナチスの残党は高級官僚や財界等に残っていました。その彼らを、若い世代の勇敢な闘いにより裁きます。ドイツ人自身が戦争犯罪を直視し、政財界、司法を民主化しました。

それを描いた映画『顔のないヒトラーたち』(2014)と『アイヒマンを追え－ナチスが最も畏れた男』(2016)を見ました。

戦後、亡命先から帰国したユダヤ人の法律家フリッツ・バウアーは西ドイツ、ヘッセン州の検事長に就任します。彼は国外に逃亡したナチス高官を断罪しようとしますが、捜査機関内部にいるナチスの残党に邪魔されて思うように捜査が進みません。

『アイヒマンを追え』は彼の執念を描きます。ユダヤ人虐殺の中心を担ったアドルフ・アイヒマンがアルゼンチンに潜伏しているという情報を得たバウアーは、動かない西ドイツ捜査機関を尻目に、イスラエルの諜報機関モサドに情報を流して拘束させました。

『顔のないヒトラーたち』は、アイヒマンの逮捕の後、ユダヤ人虐殺に手を下した元親衛隊員たちを裁いた「アウシュヴィッツ裁判」(1963)への闘いを描きます。

若い検事が「元親衛隊員が教師をしている」情報を得ます。調べ始めると、元ナチス党員が、企業幹部や官僚等にたくさん隠れていました。若い検事たちが力を合わせ、親世代の妨害を乗り越えて、生存者の重い証言等、証拠を積み上げて起訴しました。

映画は、バウアー検事長が彼らの背後から励ました、と描きます。

現代の戦争『アイ・イン・ザ・スカイ』　　憲法と映画（4）

つだわたる　（美賀多台）

訳せば「空の目」でしょうか。日本では「世界一安全な戦場」という副題を添えました。

英国と米国の軍隊が協力して、軍事衛星とドローンを使い、ナイロビでテロリストを爆殺する映画です。

英米軍テロ対策本部はロンドンとラスベガスにあり、指名手配している英国人、米国人のテロリストたちの居所を捕捉します。当初は逮捕をめざしますが、現地ケニアの諜報部と協力して捜査していく中で、テロリスト達が自爆テロを準備していることを知り、逮捕の余裕がないことから、ミサイルを撃ち込む決裁を両国政府首脳に確認します。

その時、アジトの隣に一人の少女がやってきます。テロリストを見逃せばいずれ 80 人もの被害が出る、少女の命と引き換えに出来るのか。この作戦にかかわる軍人も政府関係者もすべて深刻に悩み、そして決断します。

超高空から軍事衛星で全体を監視し、小鳥や虫に似せた超小型ドローンにカメラを載せて屋内まで視認します。さらに顔認識システムによってテロリストを特定し、最後は戦闘機ドローンからミサイルを発射する、という現代の最先端科学技術を駆使した戦闘です。　スクリーンは臨場感あふれ、見る側も全篇緊張しっぱなしです。

問題は多くあります。一人の少女とテロ予想被害 80 人の命、他国へのミサイル撃ち込み、裁判もなく処刑、一握りの政府と軍首脳の判断、実行する地球の裏側にいる兵士。この結果は世界にどのように報じられるのか、と考えます。

2011年5月、パキスタンの隠れ家で米軍特殊部隊によって殺されたウサマ・ビン・ラディンを思い起こします。国際世論は「極悪人」の処刑に「歓迎」と流れました。

テロリストたちは突然ミサイルを撃ち込まれます。彼らは監視されていることも知らず、相手の姿を見ることもありません。一方、英米軍兵士にとってはこれ以上ない「安全な戦場」です。
しかしこれで世界が平和になるとは思えません。ここには憲法9条はもちろん基本的人権もありません。

『わたしは、ダニエル・ブレイク』　　憲法と映画（5）

つだわたる　（美賀多台）

現在の最も偉大な映画監督はだれかと聞かれれば、私は英国のケン・ローチと答えます。
彼は、主な国際映画祭で何度もグランプリ等を受賞していますし、この映画もカンヌ映画祭で2度目のグランプリに輝きました。そういう国際的な評価だけではなく、私が彼を好きなのは、常に労働者の側にたって映画を作ってきたからです。
ケン・ローチは「基本的人権とは人間の尊厳」と明確に描きます。それを大事にする社会や政治を求めて、切り捨てられている現実を厳しく描き、新自由主義政策を真っ向から批判してきました。
この映画も英国社会の底辺を生きる人々を描きます。もはや人間の尊厳を無視するようになった英国の福祉施策を、鋭く批判しました。
ダニエルは妻と死別し一人暮らしです。大工として働いてきましたが、年をとり心臓病を患い医者から働くことを止められます。生活支援給付を受けようと役所に赴きますが、給付プログラムで「働ける」と判定されました。求職活動をしないと給付金は受けられない、と通告されます。
彼を審査するのは公務員ではなく、給付業務を受託した企業の社員です。彼らは決められたことを決められたとおりに適用します。ダニエルの状況を見て、それに応じた対応をしません。
ダニエルは、彼と同様に生活支援給付を受けようとする、二人の幼い子供を抱えたシングルマザーのケイティと知り合います。二人は協力し、お互いに支え合いますが事態はますます厳しくなっていきます。
ダニエルは役所に窮状を訴えますが、あまりにも冷たい仕打ちにキレて、役所の壁に大きく批判の落書きをします。
「ゆりかごから墓場まで」と評された英国の福祉は改悪されました。しかもその業務は民間企業に委託され、公務員は監督するだけです。政治も行政も失業者や貧困層に向き合わず「効率的に処理」する、公務の民間化です。
「人権＝一人の人間」を求めるケン・ローチの怒りがストレイトに伝わる映画です。

『ニュースの真相』偽ニュースの恐ろしさ　　憲法と映画（6）

つだわたる　（美賀多台）

昨年末の米国大統領選挙以降「もう一つの事実」「フェイクニュース」という悪質なデマや嘘が、権力側から堂々と流されています。それが事象の本質を覆い隠し、民主主義や言論の自由を脅かしています。これは米国等日本も含む世界的な現象です。

映画『ニュースの真相』は二〇〇四年米国で実際にあった、テレビ報道番組の「誤報」事件をもとに作られました。

大統領選挙の直前にブッシュ（息子）元大統領の軍歴を報道した番組が「誤報」というレッテルを張られて、担当スタッフとメインキャスターが解雇されます。それは巧妙に「仕掛けられた罠」でした。

映画はその全体を描き、調査報道とはなにか、ジャーナリズムの役割、マス・メディア企業のあり方等を問いかけます。

この事件で、重要な役割を担うのがSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）です。CBSテレビというマス・メディアに対して、大統領を支持する保守的な個人がSNSを使って「偽ニュース」「誤報」「根拠資料は贋作」という番組批判を広げました（「炎上」という）。

他局も大統領の軍歴詐称よりも「誤報」騒動を報道します。テレビ局上層部は世論とブッシュ陣営を恐れるかのように調査委員会（ブッシュ派が多数）をつくり、担当スタッフを解雇しました。

調査委員会は、SNSが「偽」「贋作」と決め付けた根拠それ自体が嘘であることや、報道内容には数多くの裏付け資料があることから、番組全体を「誤報」と断じることが出来ません。処分の理由は、根拠の一つである重要文書が出所不明であることだけでした。

この映画の肝は、無責任なSNSの嘘が「もう一つの事実」を作り上げて、専門家が調査した関係者の証言や多く具体的な事実等がつくる軍歴詐称の蓋然性を吹き飛ばしたことです。

現代では権力者がデマを飛ばします。トランプ大統領は嘘ニュースを流し、気に入らない意見は嘘だと決めつけます。日本の為政者も同様です。

怖い時代です。

『ある戦争』軍事力による支援の矛盾　　憲法と映画（7）

つだわたる　（美賀多台）

治安維持活動の実態をリアルに描く映画です。

国際治安支援部隊としてアフガニスタンに派遣されたデンマーク軍が、子どもを含む住民を「誤爆」する、という設定で、軍事力による支援活動の矛盾を鋭く問いかけました。

前半は過酷なアフガニスタンの状況が描かれます。

デンマーク軍の任務は村を巡回し住民を守ることですが、若い兵士が地雷に触れて爆死します。兵士たちは大きく動揺します。

村を守るためには村人と触れ合う必要がありますが、兵士には敵も味方もわかりません。村人には、デンマーク軍と親しくするとゲリラに狙われる危険があります。

そんな戦場にいながら、故郷にいる家族とも電話で連絡をとりあう様子も挿入されます。

ある日待ち伏せしたタリバーンから激しい攻撃を受けます。致命傷を負った兵士を救うために、隊長は敵がいると思われる地域へ空爆を要請しました。激しく爆弾を降らせた結果、攻撃は止み、兵士たちは救われます。

後半は隊長がデンマークへ送還されて、「誤爆」の責任を問われる軍事裁判です。

部隊は助かりましたが、「誤爆」で大勢の住民が殺されました。裁判では敵を視認して空爆を要請したのか、この1点が問われました。

彼らの行動は、戦闘中も録画録音されています。隊長は敵の確認よりも「早く空爆を」と言いました。彼は「誰かはわからぬが、敵を確認したという報告を聞いた」と証言します。その場にいた兵士達も証言台に立たされました。

検事は「敵を視認せずに空爆を要請することを許せば、我々が望む世界ではなくなる」と隊長の有罪を厳しく主張しました。

非道な殺戮が横行している国に対し、外国から軍隊が来て、その国の住民を守るために軍事力を使うことは必要、これは国際政治の「常識」になっています。でもこの映画はその矛盾を暴きました。究極「軍隊は国民を守るのではなく軍隊を守る」のです。

だから9条を持つ日本の国際支援はどうするか、真剣に考える必要があります。

（この映画は映画サークルが8月に上映します。映画サークルのHPをご覧ください）

『ちょっと今から仕事やめてくる』もっとブラック企業をたたけ　　憲法と映画（8）

つだわたる　（美賀多台）

傑作映画というわけではありませんが、ブラック企業の異常さをよく描いているので紹介します。60 万部発行のベストセラーが原作で、主人公がブラック企業をやめて、南太平洋のバヌアツ共和国にいくという青春映画です。

小さくはない印刷会社の営業部の朝、狭い業務スペースに詰め込まれた社員たちが体操をし、社訓を唱和します。そこには「有給休暇はいらない」「心を捨てろ」「遅刻は罰金」等あからさまに労働基準法違反を書いています。

全員若手で、唯一の年長者である部長（吉田鋼太郎）がこわもてで怒鳴り散らしています。入社半年の青山隆も月 150 時間を超える連日のサービス残業と営業ノルマに追い立てられています。やっと入った会社ですが、つらい毎日です。

ある夜、隆が「もう電車にひかれてもいい」という心境になった時、幼馴染を名乗るヤマモトに助けられます。それから二人は飲み友達になり、落ち込んでいた隆は慰められます。発注ミスなど仕事の失敗を責められ、茫然自失でビルの屋上にいた隆を助けてくれたのもヤマモトです。

何のために働くのか」「自分の人生は自分だけのものではない」というヤマモトの忠告を聞き、隆は両親の元へ帰ります。「人生なんて、生きていればなんとでもなる」という親の言葉を得て、隆はスカッと会社を辞めました。

有為の青年が「会社をやめられない」「死ぬまで働く」ことに縛られて、過労自殺あるいは心身症に落ち込む人が多くいます。

ブラック事業の実態は映画で描かれた通りなのか、あるいはもっと酷いものなのか、私は知りません。体と心の健康を無視して働かされ、上司の罵詈雑言、人格を傷つける言葉が飛び交います。屈辱的な土下座を強要されます。しかしそれだけではなく、仲間同士労働者同士が助け合う環境にないのがブラック企業だと思います。

最も大きな問題は社会全体がブラック企業の存在を許していることです。ちょっと叩かれましたが電通もユニクロも繁盛しています。

『汚れたミルク』　大企業、権力を告発する　　憲法と映画（9）

つだわたる　（美賀多台）

日本では「憲法は大企業の門前で立ち竦む」と言われます。それは大企業の職場では基本的人権や思想信条が侵害されている実態を指したものです。昨今では実験結果の偽造、欠陥商品の隠ぺい等、業務の不正が頻発しています。

内部告発が非常に難しい社会です。「あるものをないとは言えない」といった前文科省事務次官は、官邸から読売新聞も動員した私生活を暴露する攻撃が加えられました。

良心の自由がゆがめられる大変な圧力です。しかし保守系論客の佐伯啓思さんは「大騒ぎするほど大問題か」と加計問題を矮小化しています。事実を歪め、内部告発を抑え込む権力、それを許す社会に警鐘が必要です。

『汚れたミルク』は 20 世紀末のパキスタンの実話をもとに、多国籍大企業の「犯罪」を告発する人、それを抑え込もうとする大企業と権力を描きました。

上水道が普及していない発展途上国では、粉ミルクを溶く水は不潔なものです。それを飲んだ赤ん坊が病気になり、死亡するという惨状が生まれました。

医師に賄賂を使ってまで母親たち粉ミルクを宣伝させていた多国籍企業の営業マンが、子どもたちの悲惨な状況を見て、辞職して企業の販売を是正させようとしますが、逆に脅されます。

身の危険を感じながらも闘い続け、国際的なNPOや海外のマスコミの協力を得て、その実態を暴露できる、というところまで行きます。ところが巧妙な罠にはめられて、それは中止となりました。結局、パキスタンに戻れずにカナダで生活をしている、で映画は終わりました。不正は明確にならないのです。

冒頭に、この事件をドキュメンタリーで撮ろうという企画段階のシーンが挿入されます。そこで「ネスレの名前はダメ」という弁護士の台詞を入れて、それ以降は、主役の営業マンが語る「劇中劇の形をとる劇映画」となりました。企業名も「ラスタ」に変えています。

多国籍大企業の横暴と、それに対抗するメディアの役割の在り方まで考えさせます。

『未来を花束にして』 人権は先人の血と汗で作られてきた　憲法と映画（10）

つだわたる　（美賀多台）

20世紀初めの英国、女性参政権運動を描く映画です。多くの実話に基づいていますが「エーこんなに過激なの」と思うようなシーンがたくさん出てきます。

「サフラジェット」と呼ばれた過激な女性参政権運動の女性たちは、街中のショーウインドウに投石する、電話線を切りポストに爆弾を仕掛け、はては閣僚の別荘を爆破する、そして競馬場で駆ける王家の馬に飛び込んで自殺するなど、社会に対して女性参政権運動の存在をアピールし、注目を集めるために過激な行動を次々に起こしていきます。

政府も弾圧を強めます。女性といえども警官に監視され、集会では暴行も受け、刑務所に放り込まれます。

この過激さは一つの側面で、運動の輪は、労働者や資産家の階級を越えて広がっていき、過激な闘争を批判するグループもありました。第一次世界大戦に向けては、戦争に協力するため運動を自粛する面も持っています。

映画は闘争と同時に、一人の女性の人生も描きます。彼女は洗濯工場で生まれ、そこで働き続け、結婚し子どもも作りました。彼女は男を「敬い、従って」きたが、この運動に出会い「別の生き方があるのでは」とのめり込んでいきます。そして離婚され子どもとも引き裂かれるのです。

現在の日本では、男女の普通参政権は当たり前であり、その他の平等や自由、社会的な生きる権利など基本的人権も認められています。いやそれは憲法では認められていても現実の社会では違う、という実態もあります。しかし人間らしく生きる権利は、20 世紀初頭とは格段のちがいで整備されました。

それはこの映画のように、苦しい状況の中で、命を懸けて闘った人々がいたからこそ前進した、ということを忘れてはなりません。「過去に学び未来を信じて」という強いメッセージを感じました。

「すべての娘たちはこの歴史を知るべきであり、すべての息子たちはこの歴史を心に刻むべきである」この映画に出た名優メリル・ストリープの言葉です。

『スノーデン』 権力が監視、抑圧する社会　　憲法と映画（11）

つだわたる　（美賀多台）

権力と個人情報

ICT（インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー）の急速な発達は、ビッグデータと呼ばれる、以前では想像も出来ない膨大な情報量を収集、蓄積、把握することが出来る世界をつくりました。私たちの個人情報もその一つです。

この映画は、国家権力がそれをやっていると告発しました。

米国国家安全保障局（NSA）元職員、エドワード・スノーデン氏は、米国政府機関がテロや犯罪に関係ない人々の個人情報を収集している、と世界に向けて暴露しました。

彼自身の命を危うくしても告発しようと決意したきっかけは、国会でNSA長官が「そんなことはやっていない」という虚偽の答弁をしたことです。

スノーデン氏は、国家が国民に隠れて個人情報を無差別に収集することを危惧し「その実態を国民が知り、それが適切かどうかの判断をするべきだ」と言っています。

なぜか。権力は、例えばアベ政権に逆らった前川喜平前事務次官への恫喝のように、それを使い、批判を抑圧します。

想像力が求められる

この映画には派手なアクションはありませんが、オリバー・ストーン監督は映像的に工夫を凝らしています。

スノーデン氏はICTの天才で、大学を中退してNSAやCIAに勤め、SE能力を高く評価されます。思想的には、決して進歩的ではありません。恋人とデモに参加しますが、イラク戦争に志願し、国家に忠誠を尽くす考え方の人間です。

彼の任務はコンピューターの世界での戦争です。日本の米軍基地でも働いていましたが、映画では、すでに米軍は日本国内のコンピューター網に潜入していて、日本が裏切ればコンピューター網を寸断して通信、交通、エネルギー等あらゆるシステムを機能不全に陥れることが出来ると言っています。　爆弾テロ以上に恐ろしい攻撃です。

映画は事実を映すだけで、個人情報収集と共謀罪法が組み合わされるとどんな事態になるか、その予測は描きません。

この映画は、目には見えない世界の想像を私たちに求めます。

『弁護人』　国家の無法と戦う人々　　憲法と映画（12）

つだわたる　（美賀多台）

この韓国映画は「釜林（ブリム）事件」（1981 年）を描きます。政府に批判的な市民、市民団体を弾圧するために、官憲が国家保安法違反をねつ造して、社会科学を学ぶ学生や市民を、令状もなく長期に不法拘留、拷問した冤罪事件です。

民事を扱う町の弁護士だったソン・ウソク（第 16 代大韓民国大統領盧武鉉をモデル）は、知人の大学生を救うために、初めて国家（政府、裁判所、検察、警察等）とマスコミを相手にして、大韓民国憲法をよりどころに裁判を闘います。

官憲は学生たちを拷問にかけて、ありもしない事件を「自白」させます。体中のあざや一月で 10kg も体重が減ったことを指摘しても、警察や検察はもとより、裁判官も拷問を認めません。マスコミも政府の発表記事を報道するだけです。

さらに拷問に立ち会った軍医が良心に従って告発した証言も証拠として取り上げられなかった、と映画は描きました。

朴正熙大統領が暗殺（1979 年）され、民主化を求める市民を軍隊が虐殺した光州事件（1980 年）のすぐ後、全斗煥大統領の時代です。

尊厳を踏み潰す

日本国憲法は第 36 条「公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁止する」と謳い、大韓民国憲法も第 12 条「すべての国民は、拷問を受けず、刑事上、自己に不利な陳述を強要されない」となっています。

しかし政府や公務員が、憲法を守らなければ役に立ちません。この映画でも拷問の事実を指摘された公安警察は「北」の脅威を強調し「国を守る」ために必要だと言い放ちます。

拷問は、事実にないことを「自白」をさせるものです。彼らは平然と若者たちの精神と肉体的を痛めつけ、人間の尊厳を潰します。見るのもつらい映像です。

韓国は、この時期を経て紆余曲折はあっても民主化へと歩みを進めています。若き日の盧武鉉は、その先頭に立ちました。

日本ではこんなことは起こらないと言えません。戦後も冤罪は拷問による自白でつくられたと、私は思います。起きていない犯罪を裁く共謀罪法も作られました。

（神戸映画サークル協議会で 2 月 16, 17 日に上映します）

『映画で学ぶ憲法』 映画が描いた憲法の心　　憲法と映画（13）

つだわたる　（美賀多台）

今回は映画ではなく『映画で学ぶ憲法』(編著者志田陽子：法律文化社)という本を紹介します。

この本は、映画評論家ではない十八人の憲法学者が、映画の描いている具体的な内容と、日本国憲法の原則である恒久平和や基本的人権等を結び付けて解説した本です。

一つ一つの評論文は比較的短く、映画の全体的な分析まではいきませんが、そのエキスを掬い取っています。法律や憲法に詳しくない者にもわかりやすく書かれています。

平和主義、立憲主義、基本的人権などテーマごとに 8 部構成 38 編の文章で、邦画洋画約 50 本が取り上げられています。

例えばアパルトヘイトを告発した映画として『遠い夜明け』『ガンジー』『アマンドラ！希望の歌』等を紹介し、それを克服した後の南アフリカの課題を『インビクタス／負けざる者たち』で取り上げています。

冤罪を生む刑事司法

ここでは日本の冤罪事件をとりあげた映画を簡単に紹介します。

『それでもボクはやっていない』(周防正行)は、痴漢冤罪事件とその裁判を告発した「法律家の間でも評価が高い」傑作映画です（写真）。これを見た国連の拷問禁止委員会のメンバーは、日本の刑事司法は「クレイジー」とその異常さに驚くといいます。

袴田事件をもとに作られた『BOX袴田事件　命とは』(高橋伴明)では、冤罪がつくられる構造を警察、検事、裁判官の考え方を明らかにし解き明かします。元プロボクサー袴田巌さんを拷問といえる取り調べで「自供」させた「正義の暴力性」を指摘しています。

専門家から見て警察の実態を現実に近い形で描いているという評価があるのは織田裕二主演の『踊る大捜査線』(本広克行)シリーズです。しかし「『市民に優しくない本店』VS『市民に優しい支店』」(警視庁を本店、所轄署を支店という)の構図は、冤罪が「違法な」捜査と強圧的な取り調べ、という現場の警察により作り出される現実と違う、と批判します。

九条の会にかかわる映画愛好家の皆さんに読んでいただきたい本です。

『肯定と否定』　「もう一つの事実」の流布　　憲法と映画（14）

つだわたる　（美賀多台）

地球は丸い

この映画は、「ホロ・コーストはなかった」という英国人「歴史家」アーヴィングが、彼を「嘘つきだ」と決め付けた、ホロ・コースト研究者のユダヤ系米国人学者リップシュタットを名誉棄損で訴え、裁判で争った 2000 年の実話に基づいています。

アーヴィングは「ユダヤ人を抹殺しろ」というヒトラーの命令書がないから「ユダヤ人の大量虐殺はなかった」と主張しています。

英国の裁判は、訴えられた方が自分の正当性を証明する必要がある、独特のものです。リップシュタットは超 1 流の弁護士チームを雇い闘います。彼らはアーヴィングの日記まで徹底的に調べ、彼の本や論文は、都合の良い誤訳と嘘の引用等、欺瞞だらけと実証します。裁判は勝利しました。

「ユダヤ人の大量虐殺はなかった」という言説を裁判所は支持しません。事実に二通りの見方はない、「地球は丸いし、エルビス・プレスリーは死んでいる」とリップシュタットは強調します。

発言には責任

アーヴィングは反ユダヤの人種差別主義であり女性蔑視もあります。その信条に基づいて事実を歪め、収容所の生き証人の言葉に耳を貸さず、逆に侮辱する人間であることが明らかになります。

しかし裁判の終盤に裁判官から「差別主義者がその信条に基づき発言する自由はないのか」という問いかけがありました。

映画では言論の自由に関する議論はなく、判決は「発言には責任が伴う」と言います。

裁判の後にアーヴィングがテレビの取材を受けて、堂々と自説を論じているシーンが出ます。映画は、この歴史改竄主義者は、事実を究明するのではなく自説を押し通すだけ、と強調して終わります。裁判は「もう一つの事実」を流布するために利用されたのです。

日本でも、嘘だらけのヘイトデマを拡散するメディアがあり、南京大虐殺や慰安婦問題などの戦争犯罪を「なかった」という人々がいます。彼らはアーヴィングと同様に自分の信じたいことだけを信じ、被害者の言葉にはいっさい耳を傾けません。

『デトロイト』　根深い「人種」差別　　憲法と映画（15）

つだわたる　（美賀多台）

白人警官が黒人を虐殺

この映画は、死者 43 人負傷者 1100 人のデトロイト暴動（1967 年）の際にあった、デトロイト市警の白人警官による黒人青年虐殺事件をもとにつくられました。

暴動のさなかに発砲音が聞こえたモーテルに乗り込んだ彼らは、そこに居合わせた黒人青年たち6人と2人の白人娘にたいして、「狙撃犯」と決めつけて、すさまじい暴力を加えて拳銃のありかを吐かそうとします。人権意識のかけらもなく、黒人差別を丸出しで、見ていて気分が悪くなりました。

しかし現場からは拳銃は出てこず、3 人の黒人が殺されました。

一緒にいた州兵たちも止めることなく見て見ぬふりをし、遅れて現場に来たミシガン州警察は「人権問題になる、かかわるな」と早急に引き上げました。一人いた黒人警備員は警官に逆らうことも出来ず見つめ続けます。

警官による殺人として裁判が開かれました。しかし「警官といえども強制による自白は証拠にはならない」という裁判官の判断が示され、白人陪審員たちは「警官の職務は裁けない」と 3 人の警官を無罪にしました。

K・ビグロー監督は、現在も続く白人警官による黒人殺害事件を意識しながらこの映画を作ったといいます。

破たんした街

デトロイト市は、20 世紀初めから自動車産業の都市として発展してきました。しかし 1950, 60 年代をピークに 180 万人いた人口が、現在では 70 万人にまで激減しました。2013 年に財政破たん申請をしています。

公共サービスは切り捨てられ、まちなみは荒廃し、全米 1 危険な街になっています。

その一方で周辺地域を含むデトロイト都市圏は 334 万人（1950 年）から 70 年代に 470 万人へと増え、現在もそれを維持しています。

デトロイト市は、全米平均では 13%しかいない黒人が 8 割を占める都市、貧しい黒人だけが残された都市になったのです。財政破たんの大きな要因は、そこにあります。

映画『デトロイト』は、現代にも通じる黒人差別の怖さを描きましたが、「人種」間の経済格差まで触れません。しかし貧困と差別は結びついています。そこが物足りません。

『ロープ／戦場の生命線』　花はどこへ行った　憲法と映画（16）

つだわたる　（美賀多台）

東西冷戦構造が崩れた 1990 年代、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国（以下「ユーゴ」）で内戦が勃発しました。

ユーゴは第 2 次大戦後、6 つの共和国 2 つの自治州からなる多民族の「モザイク国家」として、チトー大統領の下で独自の社会主義をめざす連邦国家を形つくりました。しかし彼の死後、各共和国に民族主義的な政治リーダーが台頭して、それぞれが独立

し連邦の崩壊へと突き進みます。それが引き金となって民族浄化、宗教の違いなどを口実に、隣人同士が殺し合う悲惨な内戦となりました。。

国連やNATOの介入によって 1995 年に和平協定が結ばれます。映画は、その直後に現場に入ってきた、住民の生活再建を支援するNGO(非政府組織)の活動を描きました。

村の生活を支える井戸に死体が投げ込まれ、井戸を浄化するために死体を引き上げるロープを求めて、3人のNGO職員たちが 1 日中走り回るという話です。。

戦闘は収まっているようですが、あちこちに地雷が仕掛けられています。国連の停戦監視団もいますが、まだ武装民兵の検問もあります。3人はこれまでも戦場を駆け回ってきたベテランで、いっさいの武器を持たず、住民の中に入っていきます。。

村の様子が描かれます。井戸水が汚染されて、さっそく水を売る商人が来ます。雑貨屋はロープがあっても売ってくれません。地雷原を、牛を先に歩かせながら放牧地へ移動する農婦がいます。隣人に両親を殺された子どもがいます。。

やっと得たロープで死体を引き上げますが、そこへ国連軍がやってきて「死体を動かすな」と、元の井戸の中へ死体を戻しました。。

みんなの失意の中で、突然大雨が降り井戸の水があふれ出て、死体も浮かび上がりました。めでたしめでたし・・・。。

このラストシーンに「花はどこへ行った」が流され、しみじみと胸にしみこみます。

人間は何をしているのだろう、と思います。悲惨な戦争を繰り返し、それでもまだ戦争を防ぐために巨大な兵器が必要という神話を信じています。

『ペンダコン・ペーパーズ　最高機密文書』ジャーナリズムの真骨頂　　憲法と映画（17）

つだわたる　（美賀多台）

衆参の圧倒的多数の議席を背景に、わが世の春を謳歌してきた安倍政権が揺らいでいます。首相自身がかかわるモリ・カケ問題に絡む権力の乱用が、新聞のスクープによって明らかになり、内閣支持率が下落しました。

監視役としてのジャーナリズムが権力の犯罪を明らかにし、国民の怒りを呼び起こしました。「報道の自由」が国民主権や民主主義を守ることを、日本で証明しています。

この映画は、米国の新聞の奮闘を描きました。1971 年国防省の最高機密文書が新聞によって次々と報道されるという実話に基づいています。これによってベトナム反戦運動が大きく盛り上がりました。

米国政府が調査研究してきたベトナムに関する 7000 頁に及ぶ調書の一部が、ニューヨーク・タイムズ紙に掲載されます。ニクソン政権はすぐに提訴し地裁は記事の掲載禁止命令を下します。その後、今度はワシントン・ポスト紙がこの文書を手に入れました。

ライバル紙の掲載禁止命令を見て、社主と編集主幹は悩みます。政府を敵に回し、経営の危機を覚悟してでも、この文書を報道するべきか、厳しい選択を迫られます。そして全社を挙げて掲載に踏み切りました。

1番手の新聞が差し止められても、国家権力と正面から闘う覚悟で報道の自由を守るジャーナリズムが次々と現れ、国民の権利を守ります。それはまさに米国社会を形造る真髄です。

映画は、社主一族がこの文書にかかわる政府要人とも近しい関係にあることも描きました。彼らは支配階級の一角を占めています。しかし報道に携わる矜持があり、忖度はありません。

監督S・スピルバーグは、自分に都合の悪い報道を「フェイク」と決めつけ、新聞などを非難する大統領を意識して、大急ぎでこの映画を作りました。無責任なヘイトスピーチ、低俗な下ネタが幅を利かすインターネットと1線を画すジャーナリズムを力強く応援しています。

日本でも、政治経済の荒廃や貧困等、社会の危機と向き合う劇映画がほしいと思います。

『コスタリカの奇跡～積極的平和国家のつくり方～』 民主主義を力に国づくり 憲法と映画(18)

つだわたる （美賀多台）

中米の小国コスタリカ(人口 490 万人)軍隊を捨てた国として有名ですが、このドキュメンタリーは歴史と文化、人々の暮らしぶりを描くことで、コスタリカの人々が「平和」をどのように考えているのか、ということを解き明かしました。

積極的平和主義

コスタリカは、2000 人が死んだ内戦の後 1949 年常備軍を禁止した憲法を制定します。日本の 9 条は交戦権を否定し、戦力の放棄を謳っていますが、そのような条文はなく、臨時的な徴兵等は出来る条文となっています。しかし国民の総意として軍隊を持たずに来ています。

これまでにも隣国の内戦に巻き込まれ、国境線を侵略される危機がありましたが、警察力と米州機構の圧力を利用する等によって、それを解決してきました。

さらにアリアス大統領時代、貧富の差が激しく東西対立の焦点となって内戦と地域紛争が絶えなかった中米 5 か国に働きかけて、コスタリカが中心になって和平合意(1987 年)を結びました。その後国家間のもめごとは話し合いで解決するようになりました。彼はノーベル平和賞を受賞しています。

軍事費を福祉に

コスタリカはもともと貧しい国です。地下資源も少なく、米国に支配されたコーヒーとバナナのモノカルチャ―経済です。工業化も進んできましたが、現在でも一人当たりのGDPは日本の1／3 ぐらいです。経済格差もまだまだ大きいものがあります。

しかし「世界で最も幸せに暮らせる国」という評価です。軍事費を医療、教育に回す国づくりをし、環境政策にも力を入れています。電力の 9 割が自然エネルギー由来といいます。

本来豊かな自然の宝庫でしたが、一時は森林伐採が進みました。1980 年代から国を挙げての復元政策で熱帯雲霧林が戻っています。国土の 1／4を国立公園・自然保護区とし、地球上の5%の生物種が生息しています。大きな観光資源です。

この映画では、色々な人のインタビューで多面的にコスタリカを紹介しています。矛盾も抱えていますが、国づくりの根底には民主主義を大事にしていることがうかがえました。

（神戸映画サークル協議会が 8 月例会で上映します）

『万引き家族』　体を寄せ合って生きる　憲法と映画（19）

つだわたる　（美賀多台）

奇妙な家族

夫婦（リリー・フランキー、安藤サクラ）と子ども達がいて、おばあちゃん（樹木希林）がいる、どこにでもあるような家族の風景が出てきます。それがすぐに父と息子がスーパーマーケットで万引きするシーンになりました。

二人とも全く悪びれた様子もなく戦果を自慢します。家に帰ってきた時に家族から「これじゃあなかったのに」と盗んだシャンプーに文句が出ます。

変な家族だな、万引きで生計を立てている家族かと見ていると、今度は、寒い夜中にアパートの廊下に出されていた、見知らぬ小さな女の子を連れて帰ってきます。

彼女は、知らない人々の間で怖がる様子もなく一緒に夕食を食べます。体中に生傷もあります。虐待か、でも誰も騒ぐことなく、彼女も家族のように溶け込んでいきます。

男は工事現場で働く日雇い労働者ですが、怪我をして失業中です。妻はクリーニング工場のパートですが、リストラされます。一家の主な収入はおばあちゃんの年金のようです。家はビルの谷間にある老朽化した小さな平屋建てですが、小さな庭があります。

近所と付き合いがあるのはおばあちゃんだけのようです。小学生らしい息子は学校に行っていません。彼は「家で勉強できない子が学校に行く」と思い込んでいます。

妹にはさすなよ

女の子も万引きを手伝うようになります。近所の雑貨屋のおじいさん（柄本明）に見つかり、彼は少年にお菓子を渡しながら「妹にはさすなよ」と言いました。

おばあさんが寝ている間に急死し床下に埋められます。そして少年が捕まりました。

警察の調べで、男は前科者で、家族全員が血縁のない、同じ家に暮らす他人であったことが明らかにされます。少年は施設に入り、女の子は家に帰され、妻は死体遺棄で刑務所に入ります。雑貨屋のおじいさんも死にました。

ニセ家族の団欒には品はないが温かみがありました。貧困、児童虐待など社会の断面も見せますが、なつかしさを感じさせる映画です。是枝裕和監督のカンヌ映画祭グランプリ作品です。

『空飛ぶタイヤ』 内部告発する職業的良心　　憲法と映画（20）

つだわたる　（美賀多台）

2002 年にあった三菱自動車、大型トレーラーのタイヤ脱落、人身事故を題材にした映画でした。

理不尽な交通事故で母親を殺された家族があり、その責任をトレーラーの整備不良と決めつける大企業と、自社の社員を信じて欠陥自動車を告発する小さな運送会社社長の闘いです。

社長の地道な調査によって、同様の事故が多数発生していたこと、しかも真相究明に圧力がありました。それを追っていた週刊誌も直前で掲載を見送ります。

苦境の中で運送会社は銀行からも切り捨てられます。一縷の望みを託して、社長は集めた資料を警察と国交省に送りました。

その一方で、大企業内部でも欠陥自動車隠しだと気付き、改善すべきと考える社員がいました。実名で上申書を出す者があり、匿名で外部に情報提供する者もありました。

映画は、両者の動きが呼応して真実が明らかにされる、という大団円となりました。

偽造、改竄の責任

私は内部告発する者の動きに注目しました。クレーム担当の部署は当初「会社の公表通り」で押し通そうとしました。検査、技術部署の多くは欠陥を知っていました。

彼らは会社の利益、自己の利益を考えて黙るものがほとんどです。組織と上司の力が圧倒的に強い職場環境で、自分の意見を言うには、それ相当の覚悟が必要です。労働組合は何の役にも立ちません。

その中で、事実に向き合い、精一杯に抵抗する良心に従って動く人間はいる、そして彼らを潰そうとする組織の責任者もいると描きました。

三菱自動車だけではなく、神戸製鋼が長年にわたる検査データ等の改ざん、東芝の粉飾決算、東洋ゴムのデータ偽造などの大企業の犯罪がありました。そしてモリカケ問題では財務省の公文書改竄、隠蔽、嘘の国会答弁などが明らかです。

『空飛ぶタイヤ』では警察や国交省も動いて、社会的正義はあるという形をとり、内部告発した者は左遷で終わりました。しかしモリカケ問題では関係者の自死があっても、検察は財務省を起訴しませんでした。原作は池井戸潤です。

『ゲッペルスと私』　人生を問い直さない人間　　憲法と映画（21）

つだわたる　（美賀多台）

　ヒトラー政権の宣伝相であったゲッペルスの秘書を 1942 年から敗戦まで務めたブルンヒルデ・ポムゼル 103 歳の時のインタビューと、戦時中の実写フィルム等を組み合わせたドキュメンタリー映画です。

　深いしわが刻みこまれた顔がアップで映し出され、彼女はしっかりとした口調で、その当時の思い出をあれこれ語ります。

　非常に高給の職場で、ゲッペルスは上品な紳士だったそうです。しかしスターリングラードの敗戦後、雰囲気が変わったといいます。

　彼女は、政権中枢で働いていましたが、ナチスの残虐な犯罪をほとんど「知らなかった」、「プロイセン的義務感」という言葉で自身の勤勉さを強調し、上司に仕事を認めてもらうために懸命に働いただけ、といいます。ナチスの一員であった反省はありません。

無神経

　最も驚いたのはユダヤ人の友人エヴァについて語る時です。

　ポムゼルが、よい就職先を得るためにナチスに入党する時に、彼女に申込会場の前まで付いてきてもらった、というエピソードを紹介します。そして経済的に厳しくなってきた彼女を援助した、一家はいつの間にか郊外に出て行った、といいます。

　この言葉の後に、骸骨のようにがりがりに痩せ細ったたくさんの死体が荷車で運ばれ、大きな穴に次々に投げ込まれる実写映像があります。

　エヴァは絶滅収容所で殺されていました。ポムゼルは彼女やユダヤ人たちに何が起きているか、その当時は知らなかった、といいます。

無関心

　ポムゼルは自分が働いている政権や社会に対して関心を持たずに働いてきました。その言葉に嘘はないと思います。しかし戦後 70 年を経てナチスの時代に何があったかを知ったはずです。にもかかわらず「ドイツ国民が選択した政権」と言い放ち、彼女自身の罪など思いもよらない、という態度です。

　彼女は普通のドイツ女性ですが凡庸ではありません。そして日本と違ってドイツ社会はナチスの犯罪を裁いてきました。

　100 歳を超えた彼女が自身と社会の関係をいっさい顧みない態度は、驚きです。

『ナチュラルウーマン』　静かな歌声が心に響く　　憲法と映画（22）

つだわたる　（美賀多台）

国際社会全体は、すべての人に生まれながらの基本的人権を認め、差別のない社会をつくる方向に進んでいます。しかし現実にはさまざまな差別があります。国籍や肌の色、宗教等で暴力的な差別もありますし、イスラエルの「ユダヤ人国家」制定のように逆方向の動きもあります。

日本でもヘイトスピーチを禁止する法律が出来ましたが、ヘイトスピーチがなくなったわけではありません。

根強い差別の一つに同性愛者や性的マイノリティを嫌悪し排除するものがあります。最近では無知と誤解に満ちた差別的論考を、厚顔無恥な政権与党の国会議員が大手出版社の月刊誌に載せました。

日本も酷い現状ですが、チリを舞台とする、この映画もトランスジェンダー（体と心の性が違う人）を病的に嫌悪し差別する人々の醜さ、理不尽さを描きました。

昼はウェートレス、夜はクラブの歌手として暮らしているマリーナは、突発的な病気で最愛の恋人を失います。すると彼女の前に彼女がトランス女性（体は男性、心は女性）であることから、様々な障害が立ちはだかります。

警察官は彼の病死を疑い、二人の関係を疑います。彼の離婚した妻や息子たちは、彼女を汚い言葉で侮辱し、教会からも暴力的に排除します。二人が住んでいた住居からも追い出します。

しかし彼女は彼らに逆らうことはしません。毅然と前を向いて、自分の人生を生きようとするだけです。でも愛した人のものを一つ手元に置きたいという願いを、最後には貫きました。

『ナチュラルウーマン』は劇的な展開のない静かな映画です。マリーナの生き方と彼女のような性的マイノリティを排除しようとする人々の醜さを対比的に描きました。 ヒロインを演じたダニエラ・ヴェガは自身もトランス女性で、歌手や女優として活躍しています。そしてこの映画は米国アカデミー外国語映画賞に輝きました。

これは神戸映画サークル協議会が 11 月 16 日 17 日にKAVCホールで上映します。

『沖縄スパイ戦史』　軍隊の本質を暴いた映画　　憲法と映画（23）

つだわたる　（美賀多台）

アジア太平洋戦争の末期、最後の戦場となった沖縄で、日本軍は住民をどのように戦争に巻き込んだのか、新たな資料と取材に基づくドキュメンタリーです。

「本土決戦」に備え、沖縄は捨て石にされました。国体護持のために、あるいは天皇が言った「今一度戦果をあげなければ」のために、国民は犠牲にされました。

これまで『ひめゆりの塔』等映画も見てきましたが、ここで描かれた沖縄の戦争を私は全く知りませんでした。

共同監督の三上智恵、大矢英代（ともに元琉球朝日放送）は、これまで明らかにされることのなかった「裏の戦争」を描きます。

そして沖縄に犠牲を強いる、それが現在まで続いていることを告発しました。 住民を騙し、犠牲をしいた。

戦後 73 年を経て実際の戦争を体験した人が亡くなり、多くのことが忘れ去られようとしています。隠されたままのこともあります。

それをこの映画は暴きました。

陸軍中野学校を出た将校 42 人が沖縄にきて、上陸してきた米軍に対し民間人を使ったゲリラ戦を仕掛けました。

その一つに 10 代半ばの少年たちを組織した「護郷隊」（約 1000 人）があります。彼らは山中に潜み、深夜に米軍に爆弾を投げ込み、あるいは普通の子どもを装って米軍に近づき情報収集しました。

そして戦闘だけでなく、足手まといになる傷病者、スパイ容疑等でも殺されています。約 160 人が死にました。

驚いたことは、護郷隊の責任者であった将校と生き残った少年たちは、戦後も長く交流していたことです。

波照間島では、教師に扮してやって来た将校が、嫌がる島民を無理やりマラリアが蔓延する西表島に移住させました。村民 1600 人ほぼ全員が罹患し3割が死亡しました。島民が残していった山羊や牛を、日本軍は食料として持ち去りました。

波照間島の人々はこの怨みを石碑に書き留めています。

そして現在、米軍基地の負担だけではなく、利権をぶら下げ、住民の反対を押し切り自衛隊のミサイル基地が配備されようとしています。「軍隊は住民を守らない」と告発しました。

『1987、ある闘いの真実』 歴史を動かす人々の力　　憲法と映画（24）

つだわたる　（美賀多台）

朝鮮半島と日本は、太古から歴史的文化的に深い関係を持っています。近現代史的には、明治時代に日本が植民地とし、その敗戦後に、南北に分断された国家となりました。

この映画は、韓国の人々が、戦後に作られた軍事独裁政権を市民の怒りと団結の力で倒していく、まさに歴史を動かした闘いを描きました。

1987 年、韓国は軍事クーデターで実権を握った全斗煥大統領に対し言論の自由、民主化を要求する市民や学生の運動が強くなっていました。政府はそれを拒否し、彼らに対し苛烈な弾圧を加えていました。

ソウル大学生が拷問によって死亡する事件が発生します。警察は必死に隠蔽しようとしましたが、それを知った検察や医師が新聞にリークします。拷問死が国民的に明らかになると、怒りのデモは全国に広がりました。

映画では、刑務官や新聞記者、平凡な学生など多くの人々が、勇気をもって行動する姿が描かれます。そして拷問死した学生の追悼集会に、町中を埋め尽くす市民が集まるシーンは感動的です。

80 年代から現代へ

最近、韓国では民主化への歩み、独裁政権の弾圧を描いた映画が作られています。

後に大統領になる盧武鉉の若き弁護士時代を描く、81 年「釜林事件」（社会研究会の大学生をスパイ容疑で逮捕し、拷問で「自供」させた）を扱った映画『弁護人』(2013 年)、80 年光州事件（民主化を要求する市民のデモに対して軍隊が銃口を向け、多数の死傷者を出した）を描く『タクシードライバー』(2017 年)があります。

この時期は、警察の弾圧に対して、ジャーナリズムや全国的な世論は動きません。弁護士は孤軍奮闘で、裁判官や検察は冤罪に加担しました。

それから 7 年後、この映画では市民の意識は確実に変わっていると感じます。政府の弾圧に対して、市民や新聞などは連帯して抵抗し、権力内部からも告発がありました。

そして現代、この映画をつくるエネルギーは、保守反動の朴槿恵大統領を罷免に追い込んだ 2016 年の「ろうそく集会」等、市民の闘いだと思いました。

『ザ・ウォーター・ウォー』 植民地と新自由主義　　憲法と映画（25）

つだわたる　（美賀多台）

2018 年の国会で水道事業の民営化に道を開く法「改正」が通りました。アベ政権がいつものように将来に禍根を残す法律を、十分な審議もせずに強行採決しました。

水道事業は急激な人口減少と施設の老朽化が進む中、地方の市町村では経営が厳しくなっています。「命の水」を国全体で支えるためにどうするのか、真剣な議論が必要です。それは多国籍企業に事業を丸投げする民営化や、自然的社会的条件を無視した広域化では解決しません。

国際的な状況を見ると、水道事業を一度民営化した都市でも 21 世紀以後で約 270 地域が再公営化しています。

パリは 1985 年に民営化されましたが、水道料金の高騰と経営の不透明さから、2010 年に公営化に戻しています。事業の市民参加型経営により、料金を値下げしながら環境保全などの公共政策も前進させています。

コチャバンバの「水戦争」

『ザ・ウォーター・ウォー』は、2000 年にボリビアのコチャバンバであった「水戦争」と呼ばれる、多国籍企業に売られた水道事業を市民の手に取り戻した大闘争を背景としてつくられた映画です。

物価、労賃が安いことを当て込んで、コロンブスの「新大陸発見」とそれに続く残酷な植民地支配を描く映画のロケ隊がやってきます。原住民役で多くのエキストラが 1 日 2 ドルで雇われますが、その一人が精悍な顔立ちから酋長役に抜擢されます。

彼は現実社会では「水戦争」のリーダーでした。

映画の撮影と並行して、水道料金高騰に対する市民の怒りは大きく、反対運動は広がり、都市部では暴動まで引き起します。軍隊が出動して死者まで出しました。

暴動は、政府が水道を公営化に戻すことを約束して鎮静化します。

この映画では、15 世紀末から始まった新大陸の金と富を収奪する植民地支配と現代のグローバリズム、新自由主義を重ね合わすように描きました。

現代では、映画プロデューサーと酋長役、反対運動のリーダーがお互いを理解する、というラストシーンをつくっています。

敵は資本家と多国籍企業だと描きました。

『ザ・ウォーター・ウォー』は 2 月 15 日 16 日神戸映画サークル協議会が上映します。

『天命の城』 現代に「天命」を問う　　憲法と映画（26）

つだわたる　（美賀多台）

17 世紀前後

清から侵略を受けた 1639～40 年の丙子の役を朝鮮王朝の側から描いた映画です。現代に通じる国家と国民、戦争と平和が描かれました。

邦題の「天命」は映画からの問いかけです。

日本では江戸時代の初期です。鎖国の時代ですが日本、中国、朝鮮がそれぞれ密接に関係していることを知りました。

満州で起こった清が明に攻め込み、中原の覇を争っていました。皇帝ホンタイジは朝鮮王朝が明に従う政策を取り続けることに怒り、朝鮮を属国とすべく攻撃してきました。

朝鮮は、日本に侵略された文禄・慶長の役（1592～98 年）の際、明に助けてもらったことを恩義に感じ、明を支持し清を蛮族と呼び臣下になることを拒んでいました。

明も朝鮮も日本との戦いで国力が疲弊したことから、この状況が生まれました。

戦争か降伏か

圧倒的な武力を持つ清に対して、朝鮮王は南漢山城で籠城します。朝廷では徹底抗戦を主張する主流派と、生き抜くことが大事という講和派が王の前で激論を交わしていました。

城内では厳冬のために兵士は凍傷にかかり、食料もなく馬を殺して食べるありさまです。城を取り囲む清と小競り合いをしても勝機はありません。援軍も近づくことすらできません。

映画は壮絶な戦闘シーンも描きますが、王や大臣から下級兵士まで、さまざまな人々の思いを描きます。

清の侵略に対し、兵士として働かされる下層の民は「明だろうが清だろうが関係ない」望みは平和な暮らしだと言い、清の通詞として働く朝鮮人は「奴婢の生まれで人間以下の扱いだった」と怒ります。

そして朝廷や軍の高官の多くは、現実や民の姿を見ようとせずに、王の機嫌を伺い保身に走ります。最後には朝鮮王は生きることを選び、皇帝の下に三跪九叩頭の礼により許しを請いました。

終戦の後、忠義の大臣二人の対話で新しい政治は「王と民がともに歩む」のではなく「我々も我々が建てた王もいらない」といわせます。

映画は共和制や民主主義が未来への道だと示唆し、現代韓国が反映されています。

『こんな夜更けにバナナかよ　愛しき実話』　感動だけではない　　憲法と映画（27）

つだわたる　（美賀多台）

筋ジストロフィー患者、鹿野靖明さんと彼の周りに集まるボランティアたちを描く映画です。

彼は 11 歳で発病し 42 歳まで生きました。23 歳の時に「自立した生き方」をめざして病院を出てアパートで暮らします。生活すべてを多くのボランティアに支えてもらい、結婚も離婚も経験しました。

両親は健在ですが、彼らから世話を受けることを拒否し、母親には「ババア来るな」と罵声を浴びせます。

映画は首から上と手しか動かせない重症になった晩年を描きます。24 時間の介助が必要で夜中でも床ずれ防止のために体位を変えなければなりません。

しかし眠れない夜中に「バナナを買ってこい」という要求をしています。心の内では感謝しつつも、健常者が普通にしたいことは言いたい、と頑張ります。彼の夢は英検２級をとって米国に行くことでした。

誰が人権を保障する

生きるとは何か、なぜボランティアは自分の時間を費やして障がい者の世話をするのか、そして人間らしい生き方を憲法は保障していますが、誰がそれを実現するのか、考えらされました。

人の世話にならない生き方が美徳、人間に「生産性」、生活保護は恥、空気が読めず自己主張する人は嫌う等は、日本社会の悪癖だと思います。

それに鹿野さんは挑むように生きました。

ボランティアに対し「介護の仕方を教えている」と決して遠慮せず卑屈になりません。もちろん喧嘩別れするボランティアもいます。

全介護の必然性から、彼自身のすべて、人間の根源的だが恥ずかしい姿も性欲もさらけ出します。

夜中にバナナを食べたいささやかな我儘は、一方的に「世話を受ける」がお互い友だちだ、という関係を確認する行為と思いました。

その一方で「こんな体に産んでごめんね」とすべてを犠牲にしようとする母親に「自分の人生を生きてくれ」という思いを持ち続けています。

「生きる」もっと根源的な人権を保障するのは国家です。その上で人間らしく生きることを支えるのは人間関係です。大泉洋が魅力ある鹿野さんを好演しています。

『ブラック・クランズマン』　誰が憎悪犯罪を煽るのか　　憲法と映画（28）

つだわたる　（美賀多台）

平和な移民の国ニュージーランドでも白人至上主義の男がイスラム教の礼拝堂で銃を乱射して多数の死者、負傷者を出す事件が発生ました。

異文化異民族を憎悪し差別、排除する者達の犯罪が世界中に広がっています。

この映画は差別主義者たちの愚かさと危険性を描きました。 黒人とユダヤ人、二人の刑事がコンビを組んで、白人至上主義を掲げる過激派組織KKK（クー・クラックス・クラン）に潜入捜査をする、という実話をもとにしたものです。

脚本、監督はこれまでも黒人差別を告発する映画をつくってきたスパイク・リーです。人種差別を背景としていますが、シリアスな潜入捜査を緊迫した映像で描く上質のミステリー映画に仕上げています。

白人至上主義の狂信

1979 年西部の街コロラド州コロラドスプリングス警察署に始めて黒人刑事として雇われたロン・ストールワースは、新聞に出ていたKKKの募集広告を見て、会員になりたいと申し込みます。

電話での連絡はロンが担当し、実際に会うのは白人刑事のフリップ・ジマーマンです。二人は役割分担して潜入捜査を開始します。

KKKに集まる白人はどのような人間か。いずれもが凡庸で差別言葉を吐き、銃が好きです。自らが属するWASP(白人、アングロサクソン、プロテスタント)が最高の人種と信じ込み「ホロコーストはでっち上げ」と断言する男もいます。また最高幹部はロンを白人と信じ込み、電話で「黒人は独特の発音ですぐわかる」とうそぶきます。

彼らは白人の国アメリカ・ファーストを連呼します。

新入会者を迎え入れる儀式は、普通のホテルで開催しますが、レセプションで給仕をするのは黒人です。その無神経さにも驚きます。

映画は黒人指導者への爆弾テロを未然に防いで終わります。その後に、現在の実写映像が流されました。

差別の象徴、南軍旗や鉤十字がはためき、ヘイト反対デモ隊に突っ込む自動車そして悲鳴が響きます。そののちトランプ大統領の記者会見「どっちもどっち」を流しました。

事実の捏造と報道記者たち　『衝撃と畏怖の真実』『バイス』　　憲法と映画(29)

つだわたる　（美賀多台）

戦争と嘘

イラク戦争は 600 以上の都市で 1300 万人以上の人々(ローマ 300 万人、マドリード 200 万人、ロンドン 200 万人、米国でもニューヨーク 50 万人、サンフランシスコ 30 万人・・・)が、デモや集会などで反対を意思表示しました。

米国の同盟国でも英国は加担しましたが、フランスやドイツは反対しています。日本は小泉政権が無条件に賛成しています。

イラク戦争は、開戦時に世界の世論が反対した最初の戦争と言われています。そして「戦争の最初の犠牲者は真実」を実証しました。

現在では、米国がイラクを攻撃した大義名分「大量破壊兵器を持っている」は、全くの嘘であったことがはっきりしています。

しかし開戦前、米国の多くの新聞、マス・メディアは政府が垂れ流す虚偽の情報を無批判に流し戦争世論をつくってきました。その中で、唯一ナイト・リッダー社だけが「大量破壊兵器はない」という論陣を張りました。

『記者たち　衝撃と畏怖の真実』は、彼らがどのように事実を追い、報道してきたか、を明らかにしました。

情報をどのように見るか

記者たちが事実に迫る方法は現地を見ることと関係者の証言を集めて回ることです。彼らは執拗に、政府筋からコメントを取ろうとし、そして一つの証言だけでなく裏をとって事実確認をします。そういう取材方法は誤報を報じた新聞社も同じことです。

しかし同じ情報を得ても報道する姿勢によって料理の仕方が違います。ナイト・リッダー社の編集長は「兵士を送り出す」国民の立場での報道を強調しました。

これは『バイス』を見るとよくわかります。『バイス』はイラク戦争時の米国副大統領チェイニーの自伝的映画です。

彼はイラクの石油を狙っていました。2001 年 9 月 11 日同時多発テロの後、イラク侵略に向けて色々な仕掛けを作っていきます。その一つが「テロ組織とフセイン大統領は密接な関係」「イラクは核兵器、化学兵器等を製造、隠匿している」という情報の捏造です。

虚実ないまぜにした情報が関係者にばら撒かれました。それを多くのマス・メディアが信じこんだのです。

ジャーナリズムには多様な情報収集と真実を構成する洞察力、孤立を恐れない勇気も必要です。

そして国際紛争の解決に武力を用いない、という9条の精神の普遍化が求められます。

『グリーン・ブック』 人種差別と友情　　憲法と映画(30)

つだわたる　（美賀多台）

「上手に作っている」と思いますが、引っ掛かるものがありました。

1962 年の米国、高名な天才的ピアニスト、ドクター・シャーリー(ドク)は、コンサート・ツアーのために運転手兼ボディーガードとしてトニー・バレロンガ(トニー)を雇います。黒人のドクを乗せた車を白人のトニーが運転して、黒人差別が根強い南部諸州を旅行する、という実際にあった話をもとに作られた映画です。

映画の最初に、家の修理に来た黒人労働者が使ったコップを、トニーが捨てるシーンを入れています。そして色々なことがあった南部の旅行が終わった時、二人はお互いを尊重する感情を持ちます。ラストシーンでトニー家のクリスマスパーティに孤独なドクが呼ばれました。

コメディ調の感動作品で、2018 年米国アカデミー作品賞を取りました。

醜い人種差別

タイトルの『グリーン・ブック』は、黒人が利用できる南部諸州のホテル、レストラン等を紹介した旅行ガイドです。便利ですが残酷な本です。

映画は人種差別がどれほど醜いかを描きました。

ドクはピアニストとして成功しカーネギーホール上層の高級マンションに一人住まい、高学歴でお金持ちです。トニーはキャバレーのボーイ兼用心棒、市のごみ収集もした低学歴低所得のイタリア移民です。家族思いですが粗暴で、裏社会にも通じています。

南部ではドクは黒人用の薄汚いモーテルに泊まります。コンサート会場であるホテルのレストランは利用できません。3 人のトリオにもかかわらず 2 人の白人の控室はホテルの部屋ですがドクは物置です。トイレも外の汚い小屋です。

夜間外出禁止令に引っ掛かり留置所に入れられたときは、さすが我慢が出来ずドクは弁護士を通じてロバート・ケネディ司法長官を動かしました。

何が引っ掛かったのかと考えると、白人が世間知らずの黒人を助けるという構図が不快なのと、困難を承知で南部に向かったドクの目的が分からないことです。

二人に友情が芽生えたとしても人種差別は揺がないと思いました。

『12 か月の未来図』 未来をつくる教育　　憲法と映画(31)

つだわたる　（美賀多台）

未来に希望を託す子供たちを健やかに育てるには、教育がいかに大事か、それを強調するフランスの映画です。

パリのエリート名門高校で国語教師を務め、親も著名な文化人である、これまで上流階級社会で生きていたフーコー先生が、フランス社会の最底辺で生きる人々の子ども達が通う中学校に1年間派遣されます。

生徒たちが荒れている郊外の教育困難中学校にやって来た、ちょっと見はさえない中年の高校教師が、困難に直面しても投げ出すことなく教師のプライドをかけて奮闘します。そして生徒たちの瞳にも希望の輝きが現れてくる映画です。

厳しい現実を写し取っていますが、ほんわかとユーモアもあわせもつ、私の好きな映画です。

子どもたちを信じ

最初、高校の授業風景が出ます。ほぼ白人ばかりの静かな教室でフーコー先生の皮肉な口調が流れています。

そして中学校の授業風景では、一目で白人系よりも黒人系や移民の子どもたちが多いことがわかります。平気で雑談をして授業に集中できません。

また教師たちも子どもたちを掴めず「問題児は退学させればいい」という声が、普通の意見として出ます。そんな中でフーコー先生は、担任する子どもたちの名前をすべて覚え、授業も子どもたちの関心と理解を得られるように工夫を凝らしていきます。

しかめ面のフーコー先生自身が変わり、そして子どもたちも学ぶ楽しみを知るようになります。「レ・ミゼラブル」を読む授業では、見事に彼らの表情が活気づき、教室の空気が楽しいものに変わる映像表現があります。

映画では、ある事件が起きて、決定的な場面でフーコー先生が子どもの未来をかけて奮闘するという痛快なラストシーンを持ってきました。

この映画は、子どもと教師を中心に描き、子どもたちに学ぶ喜びが伝われば彼らは変わる、と描きます。そのためには教師を支援することも重要だと示唆します。日本では教師があまりにも多忙です。人間を貧困と無知のままにおいてはならない。教育が大事です。

（つだわたるさんは、ご自身のブログ・半睡半醒日誌　でも楽しい記事を書いておられます。編集委員）

『ニューヨーク公共図書館』公共性と民主主義　　憲法と映画(32)

つだわたる　（美賀多台）

公立ではない公共です。ニューヨーク市にある私立の世界有数の巨大な図書館群(4 つの研究図書館と地域の 88 分館)をNPO法人が運営しています。職員は約 3000 人規模。

舞台裏も含めてその姿を丹念に映し出すことで、現代社会における図書館の役割を饒舌に語りました。

205 分という長尺のドキュメンタリーですから前後編(110 分、95 分)と分けて上映がありました。

前半はちょっと退屈です。各レベルでの会議が写されます。運営資金をどう集めるか、予算配分と補助金申請の重点、職員の意識改革等、図書館内部の運営の素顔を見せています。重要ですが、見る方としてはちょっとつらい時間です。

行政が求める「成果」、利用者の要望傾向、図書館が果たすべき役割をスタッフが繰り返し議論し学びなおしています。

民主主義の柱

図書館の各部門の具体的な取り組みを紹介する後半はがぜん面白くなります。ここの核心の考え方「図書館は民主主義の柱」がよくわかります。

世界中で生み出される知識を集積し、それを誰もが利用できるようにすることを基本的な役割とし、それを実質的なシステムとして作り上げるために不断の努力をしている姿勢が窺えます。

図書の貸出件数や来場者数を増やすことだけではなく、「知識の砦」として後年に必要となる本を選択し購入する「予算の配分」を行っています。

購入対象は従来の紙の本だけではなく電子図書、DVDと広がっていますし、インターネットを普及させる取り組みもしています。

そして著名人を招いた定期的な講演会や地域の分館では住民と密接にかかわって、教育相談、就職面談の訓練から手話の教室へと広がっています。

誰もが知識に接近できる環境整備をしています。
そして黒人は「アフリカから労働者としてやってきた移民」と書かれた教科書がテキサス州で使われている、という紹介がありました。民主主義とはこういう歴史の改ざんに「中立」ではなく、と闘うと強調しています。
日本の図書館は公共性と民主主義をどう考えているのでしょうか。

『工作／黒金星(ﾌﾞﾗｯｸ･ﾋﾞｰﾅｽ)と呼ばれた男』 見事に政治と人間を描いた　憲法と映画(33)

つだわたる　（美賀多台）

韓国映画は文在寅大統領の誕生以降、ますます元気です。独裁政権下における国民的な民主化闘争『1987、ある闘いの真実』や朴槿恵政権下のメディア弾圧『共犯者』等、韓国現代史の暗部を描く社会派映画が次々に作られています。
しかも興行的にも成功しています。
この『工作／黒金星(ブラック・ビーナス)と呼ばれた男』も、1990 年代に北朝鮮に送り込まれたコードネーム黒金星と呼ばれる実在したスパイを主人公に、韓国と北朝鮮の政権の闇を描いた「フィクション」です。
新聞報道等で知らされている事象の裏側では「こういうことがあった」と思わせるよう、映画的に描いています。
独裁政権と現在でも生き続ける後継者たちの謀略を暴く映画です。

心つなぐ民族の悲願

北朝鮮の核疑惑を調査するために、韓国は北朝鮮にスパイを送り込みました。前歴を巧みに偽装して実業家に扮した元陸軍将校、黒金星は、北京で北朝鮮の経済官僚に接触を持ちます。リベートをばら撒き、豊富な資金等をチラつかせ、あるいは軍事機密を漏らしながら、彼らの信頼を得ていきます。そして最高権力者、金正日と面会するまでになりました。
核疑惑の核心を掴むために、核開発地に近いところにある北朝鮮の観光地で、韓国スタッフによる北朝鮮の宣伝映画をつくろうと持ちかけます。映画は、その現場付近の住民の悲惨な状態を描きました。
黒金星が北朝鮮の政権の中枢に食い込んだとき、思いがけないものを見ます。韓国の保守政党の幹部と北朝鮮の軍部の会談です。打倒北朝鮮を叫んでいる反共政党幹部が軍幹部に「いつものように軍事的挑発」を依頼したのです。
1997 年韓国では大統領選挙が争われ、革新派の金大中の優勢が伝えられている時期です。
映画は、主要な登場人物が、北も南も上官の命令、国の利益に沿って騙し合いの駆け引きをしますが、いつしかお互いの人間性を見つめるようになったと描きます。そこに家族を大事にし、民族の和解を進めたい、という心情のつながりを感じさせました。

『あなたの名前を呼べたなら』インドの一つの変化　　憲法と映画(34)

つだわたる　（美賀多台）

現代インドの矛盾を描く良心的なインド映画です。

インドは 13 億人を超える人口と多民族多言語の国であり、それぞれに対応した映画、約 2000 本を作り、年間映画人口約 20 億人という世界一の映画大国です。その中心地ムンバイ（旧ボンベイ）はハリウッドになぞらえてボリウッドと言われています。

インド映画の特徴は、ミュージカル仕立てで気持ちの変化を歌と踊りで表す娯楽的な映画が多いということです。ところがこの映画は心優しい恋愛映画ですが、歌も踊りもありません。

インドは 21 世紀に入って飛躍的な経済成長を続け、国民総生産は世界 7 位になっています。しかし一人当たりに換算すると 162 位と低く、極端な貧困層が大きく存在しています。しかも民主国家と言いながら宗教による社会の分断、カーストなどの身分制度、非人間的な因習も残っています。

この映画はそれらをよく反映しています。

悲恋で終わらない

若くして未亡人になったラトナは、田舎から大都市ムンバイに出てきて、大金持ちの家でメイドをしています。

彼女の村では女は嫁いだ家に一生縛られて、再婚も出来ない習慣がありました。彼女はそれを嫌って、妹の学費を稼ぐためと服飾デザイナーになりたいという夢を持ってムンバイにやってきました。

豪華高層マンションに住む「ご主人さま」アシュヴィンは新婚でありながら妻の浮気を発見し、彼女を追い出して失意の日々を送っていました。ラトナは家事いっさいの世話をし、アシュヴィンの了解の下で裁縫を習い始めます。

二人の身分の違いは「ご主人さま」たちのホームパーティで表現されます。豪華なドレスを着て、お酒や料理を楽しむ上流階級の人たちがいて、その世話をするメイドたちは台所の床に座って食事をするシーンを見せます。

そんな二人の心がいつしか通い合います。

けれども親兄弟、友人など周囲から強い反対を受け、アシュヴィンは独身時代に過ごした米国へと旅立ちました。

どちらもつらい身分違いの悲恋です。その壁は厚いのですが、ラストに希望が灯ります。

『空母いぶき』　9条を踏まえた架空の戦闘　　憲法と映画(35)

つだわたる　（美賀多台）

「きれいな」戦闘

架空の国家、東亜連邦が太平洋上にある日本の小島を突如として占拠したことで、自衛隊の空母いぶきを旗艦とする機動部隊が奪還に向かい、そして敵の機動部隊と戦闘するという映画です。

戦闘シーンはCGを活用したものですが、戦闘行為全体が、軍艦と戦闘機にある計器が相手をとらえて、それが映し出されるパソコンの画面を見ての戦いです。ミサイルをミサイルで撃ち落とすのですから、ゲーム感覚です。太平洋上の戦闘では、これが現実かもしれません。死者は出ますが手足が飛び散る映像はありません。

しかし状況判断し決断するのは人間です。そこは変わりありません。

映画の見所は総理大臣を筆頭とする内閣、現地の自衛官がどう決断し行動するかです。彼らは 9 条と専守防衛、自衛権発動を真面目に考えます。

「9 条を護れ」という我々に「この事態をどう考える」と問いかける映画です。

現実的な設定といえないが

東亜連邦は太平洋の島嶼国家で、日本と国交もなく国際法も守らない、最近つくられた国という設定です。日本の領土である太平洋上の島々を「自国の領土」と主張して、突然に軍事行動を起こしたものです。

相手国、国民もほとんど出てきません。ですから国と国との戦争ではなくて、IS(イスラム国)のような大規模なテロ組織を相手にしているかのようです。武力でしか対応できない設定です。

総理大臣(佐藤浩市)は慎重です。好戦的な外務大臣を抑え、最前線の自衛官にも自制を求めます。米国頼み、日米安保の発動ではなく国連を活用します。主要国や周辺国に東亜連邦との仲介を求める外交を展開します。集団的自衛権は考えに入っていません。

最前線では必要とあらば戦闘も辞さずという艦長と「戦死者を出してこなかった自衛隊」を守りたい副艦長の葛藤があります。しかし敵は躊躇なく潜水艦や戦闘機から魚雷、ミサイルを撃ち込んできました。

自衛隊は、それらすべて撃ち落し、しかも相手戦艦を撃沈せずに「無力化する」という最新式兵器イージス艦の威力を示しました。

ラストは常任理事国5大国の潜水艦が間に入って、戦闘は終結し戦争は回避されました。不意の武力行使に対して、現実の内閣や自衛隊もこうあってほしいという対応です。

マスコミの対応や国民の反応の描き方についても書きたいのですが、長くなりますから今回は割愛します。

（原作を漫画「空母いぶき」(かわぐちかいじ)と表示されていましたが、別だと考えるべきです）

『ザ・ネゴシエーション』　誰を巨悪にするか　　憲法と映画(36)

つだわたる　（美賀多台）

最近の韓国映画は、政治家や政権の中枢部、財界トップを悪役とする映画や史実に基づく独裁政権下の権力犯罪を暴く娯楽映画を多く作っています。

『ザ・ネゴシエーション』も巨悪の設定が痛快です。

人質の命と交換で要求を通そうとする犯人と交渉する警官が映画の始まりです。パソコン画面での交渉を、緊張感を持って描きました。さらに事件の黒幕として不正な金儲けをしている巨悪(高級官僚、財界と軍部のトップ)を設定しました。

バンコクで韓国の新聞記者と警官が、武器を密輸する犯罪組織に拉致されます。そのボスが、ある目的でソウル市警に交渉を持ちかけます。彼が指名したのは、少し前の事件で交渉に失敗して人質を殺された女性交渉人でした。それが伏線です。

彼女は事件の経緯も知らされず、犯人とネットで繋がったパソコンの前に座らされます。一方で空軍の特殊部隊が、組織の根拠地であるタイの孤島へ向かいます。

まず新聞記者の社長が呼ばれて、記者が諜報部員であることが暴かれます。次にボスのかつての上司だった大企業の会長が指名されます。だんだんと事件の真相が明らかになってきました。

そしてついに巨悪の中心人物、大統領府安保室長までも引きずり出そうとします。しかし「来なければ人質を殺す」という脅しは彼には通じません。軍の特殊部隊を使って犯人、人質すべてを葬り去ろうとします

事件の真相と構図

犯人は養護院で育ち、貧しさから犯罪組織に入り出世した男です。妹を殺され、復讐を狙って事件を起こします。政権の中枢部にいる高級官僚、大企業のトップ、軍部などの巨悪を引きずり出そうとします。彼らは地位と権力を利用して大金を得る仕組みを作り、軍隊と警察を手足のように使っていました。

日本ではこういう巨悪は描かれません。権力と財力、合法的な暴力組織が結びつくと考えないのか、もしくは忖度なのかわかりません。

どのような巨悪を想定するのか、社会の自由度とかかわる、と私は考えます。

『家族を想うとき』　「自由な働き方」の現実　　憲法と映画(37)

つだわたる　（美賀多台）

　ケン・ローチ監督の怒りと悲しみがひしひしと伝わってくる映画でした。

　一度は引退を公言した監督は 83 歳、前作『わたしは、ダニエル・ブレイク』に続いて英国の労働者とその家族の現状に焦点を当てた映画を撮りました。

　日本でも、よく見かける宅配業者、彼らのささやかな夢、過酷な働き方等が描かれます。

　建設労働者として限界を感じたリッキーは、友人の話を聞いて個人営業の宅配業をすることを決意します。荷物を運ぶバンは、パートの訪問介護士として働く妻の車を売り、借金して用意します。大手企業とフランチャイズ契約を交わした自営業であり、雇用された労働者ではありません。

　「自由」に働いて「週 6 日、1 日 14 時間働けば、2 年もすれば借金も返せて家が持てる」と夢を見ました。

すべての責任を負って

　発送の拠点に集まる個人宅配業者たちは、地域を割り当てられ配達日時の指定された荷物を配達していきます。遅れることは許されません。

　トイレに行く暇もなく働きます。勤務状況は彼らにあてがわれた「スキャナー」ですべて管理されています。事故など様々なトラブルは自己責任で処理することが求められ、自己都合や病気などで休む時は、代わりに配達してくれる人を、自分で探さなければなりません。

　リッキーは妻と子供二人の 4 人暮らしです。妻は高齢者の家を訪ねて日常生活の手伝いをしています。車がなくなったのでバスで行動しています。高校生の長男は学校から呼び出しされるような問題を抱えています。

　早朝から深夜まで働くリッキーのストレスが家族に広がっていくのがスクリーンから見えます。家庭は荒れます。

　そしてリッキーは仕事中、強盗に襲われ重傷を負いました。委託企業はねぎらうどころかペナルティを口にします。

　一夜明け、怪我をおして、家族が止めるのも聞かず、狂ったように仕事に向かうリッキーを描いて映画は終わりました。先が見えません。

　この映画の秀逸なところは、敢えて周囲の人々や友人とのふれあいを描かなかったことです。

『パラサイト　半地下の家族』平凡な人々の惨劇　　憲法と映画(38)

つだわたる　（美賀多台）

カンヌ映画祭は『私はダニエル・グレイブ』『万引き家族』に続いて、貧困を描く映画をグランプリとしました。韓国映画界初の受賞です。

経済格差が大きい現代韓国の悲惨な現状をコメディタッチで描きました。

キム一家は家族4人父と母、大学浪人中の息子と娘、全員が失業者です。心身ともに健康で働く意欲もありますが、仕事がなく、母の内職だけが頼りで、その日の食事も事欠く有様です。

彼らはスラム街の半地下住宅に住んでいます。床が道路の下水管よりも低いので、トイレは天井すれすれ、部屋の一番高いところにあります。日当たりも悪く部屋は湿気ています。窓は路面と同じ高さで、足ばかり見え、時折、酔っ払いが立小便をします

この家族が、高台にある高級住宅街の豪邸に住むパク一家に取り入り「寄生」していきます。まず長男が英語の家庭教師、長女が美術の家庭教師になり、巧妙に前任の運転手と家政婦を追い出して、父と母が入り込みました。全員、他人のふりをしています。

格差を自覚した時

ある日パク家全員が泊りがけのキャンプに出ていくことになり、キム一家は豪華な居間でのびのびと宴会を始めました。そこへ追い出した家政婦がやってきます。

この豪邸に秘密の地下室があり、彼女の亭主が住んでいることが発覚しました。キム一家の秘密も知られてしまいます。

そして大雨が降り続くために、パク一家が急に帰ってきました。大慌てで、すべてを隠す必死のドタバタ悲喜劇が展開します。

翌朝、記録的な大雨でスラム街は水没しました。しかし高台の家ではそんなこととは無関係に息子の誕生パーティーが開かれます。経済格差が如実に現れる、そこで惨劇が生じました。

明るく清潔な豪邸に対比する不潔な半地下の家、日のささない地下室は、分断された社会を暗喩し、平凡な人々が殺しあう辛辣なブラックコメディを生みました。

大事件の後、豪邸の持ち主は変わり地下室の住人も変わります。でも世間は何も知らず変わらないままでした。

『コンプリシティ／優しい共犯』　生きづらい日々だけど　　憲法と映画(39)

つだわたる　（美賀多台）

　不法滞在者となった中国人の青年（ルー・ユーライ）と年老いたそば打ち職人（藤竜也）の心の交流と厳しい現実を描いた映画です。

　技能実習生として来日したチェン・リャンは、予想以上に厳しい労働環境から、その企業から逃げ出します。しかし祖母や母の期待を背負った青年は中国に帰れなかったのです。そのため他人の身分証明書を買いました。

　彼は、名前を偽ってそば打ち職人の見習いとして住み込みで働き始めます。その店は老人とその娘が経営していますが、なかなか繁盛しています。しかし息子とは折り合いが悪く、後継者がいません。

　チャンは他人に成りすまして働き、人当たりも良い彼は周りの人たちとうまく付き合います。淡い恋愛感情も味わいました。

　そこへ警察がやってきました。彼は逃げ出しますが、行くところがありません。

希望をどこに見るのか

　この映画は中国からきた労働者を扱っていますが、技能実習生の労働実態を鋭く追及した映画ではありません。最初にチェンが働いたであろう企業さえも出てきません。

　彼が、生活費を稼ぐために戸外の給湯器を盗むところから映画は始まります。そして同じような若者たちが大勢いるという映像が挿入されるだけです。彼らの具体的な生活はほとんどなく、「日本には希望がない」というセリフだけが記憶に残っています。

　そしてチェンと母親、祖母とのやり取りもカットバックで出てきます。中国の暮らしに絶望している彼の気持ちや状況が説明されます。

　一方で老そば打ち職人は実の息子とはうまくいかず、時間を浪費するような味気ない日常生活でした。それがチェンを１人前にする楽しみを見つけます。

　二人とも将来のことには不安を抱えているけれども、日々の暮らしは楽しいものでした。誰にも打ち明けることのできない孤独と心の闇でつながっています。

　生まれも育ちも世代も違っても、よりそって心は通じあうと描きます。ですがこの平穏な日々は続けらず、厳しい現実はやってきました。ただ余韻が残ります。

『黒い司法　0%からの奇跡』米国の根強い黒人差別　　憲法と映画(40)

つだわたる　（美賀多台）

米国南部の黒人差別と冤罪づくりの実態を暴く、1980 年代に実際にあった事件に基づく映画です。原題は「Just mercy」で「正しい慈悲」とでも訳せばいいのか、邦題とはかなり違います。

ハーバード大学を出た黒人弁護士ブライアンは、アラバマ州で受刑者の人権擁護活動に取り組みます。

彼は、白人の少女を殺した犯人として死刑判決を受けた黒人ウォルターの事件を知ります。調べてみると全く物証がなく、白人受刑者の「ウォルターが殺人現場にいた」という証言だけで犯人にされたことがわかります。明らかに偽証です。

そして調書が現場とは全く合わない杜撰であること、ウォルターの家族や周辺の人々に会い、彼の無罪を証言する人も見つけます。

その一方で警察、検察から圧力がかかります。しかし「嘘の証言」をした白人受刑者からも「ホントのことをいう」という確証を得ます。さらに事件当初に担当していた警官の話も聞き、無罪を確信します。

再審請求に漕ぎつけ、法廷でウォルターが無罪であると証拠等を示します。冤罪は明らかです。しかし地元の裁判所は再審を認めませんでした。

ブライアンはあきらめることなく CBS ニュースの「60 ミニッツ」に出て冤罪を訴えました。これが事態を動かします。高等裁判所の審議が行われて、ウォルターは無罪を勝ち取りました。

冤罪の構図

根底には黒人差別があります。弁護士が黒人であることや黒人受刑者の人権を擁護する活動に対して、警察や検察が有形無形の圧力、嫌がらせを行います。

アラバマでは「黒人は生まれた時から有罪」と受刑者は絶望感を持っています。 そして冤罪を生み出す手法は日本と同様です。捜査当局の証拠と証言の捏造、無罪証拠等の隠蔽、そして裁判所と陪審員の偏見がありました。

この事件が 1980 年代後半であるということに驚きました。根強い差別があります。

しかし希望もあります。この事件が全国に報道されると事態が動いたということと、刑務官のブライアンに対する態度が少しずつ変わっていくと描かれました。

『ｉ －新聞記者ドキュメント－』誰が権力を監視するか　　憲法と映画(41)

つだわたる　（美賀多台）

東京新聞の記者、望月依塑子さんを追いかけるドキュメンタリーです。

彼女が取材に全国を駆け巡ります。まず辺野古新基地埋め立て現場、森友学園事件で近畿財務局OB、籠池夫妻のインタビュー。伊藤詩織さん事件、前川喜平さん、沖縄県宮古島の自衛隊基地などで、それぞれ短い紹介もあります。

それらは安倍政権の本質が見える事案です。法的論理的におかしいと思う問題がありますが、安倍政権はうやむやで押し通しています。

その問題を菅官房長官に記者会見で望月記者が質問します。彼はまともに答えず「適法に処理している」「あなたに答える必要はない」と言い切ります。

そこでこの映画のもう一つのテーマである報道の自由、国民の知る権利を制約する「記者クラブ」制度の壁がクローズアップされます。

森達也監督はフリージャーナリストで、記者会見会場に入ることができません。官邸広報担当に所定の書式で申請しても前例がないと断られます。

ジャーナリストの責任

しかし記者会見は官邸「記者クラブ」主催であることがはっきりします。望月さんの質問に制約をかけるような運営に対する質問に、官房長官は「記者クラブに言え」と答弁しました。

記者クラブと官邸側が協議してルールを決めているようです。その結果として運営を官邸側にまかせ、広報室長が司会を担当しています。参加者を認めるのもルールがあり、海外の報道機関は会見場に入れるが質問ができません。フリージャーナリストも「30 年闘ってきた」が質問をする権利を得ていないと言います。

ルールを変えるには記者クラブ「加盟全社の同意」という高い壁があります。

映画を見ていると望月さんは不器用だなと思います。取材でかかわった人たちを代弁して政府に回答を求めますが、適当にあしらわれ歯がゆく感じます。彼女を応援する他社記者もいないようで、そこでは孤立しています。

望月さんのスタイルは、それでも怯まないことです。

※1　タイトルの「ｉ」は一人称、主語を明確にして取材し記事を書くことがジャーナリズムには必要だという森監督の主張が込められています。

※2　この映画は神戸映画サークル協議会5月例会として 5 月 29 日 30 日(予定)にKAVCホールで上映します。

DVD『百年の恋』他　生きることを問う映画たちです　　憲法と映画(42)

つだわたる　（美賀多台）

　コロナ禍で 4 月半ば以降、映画館が閉まり、映画のない生活に耐えきれず、日頃は見ない DVD の、邦画の中で名作といわれるもので未見のものを見ていました。

　その中から 4 本『飢餓海峡』『張込み』『拝啓天皇陛下様』『百円の恋』を簡単に紹介します。でも家で見ると集中力が弱いので映画の良さを十分くみ取ることができません。

　『飢餓海峡』は 1965 年公開。水上勉原作で、内田吐夢監督の戦後の最高傑作と言われています。主演は三國廉太郎で伴淳三郎がベテラン刑事、左幸子が薄幸の娼婦として脇を固めています。それぞれの役柄も物語の展開も濃密な映画でした。

　敗戦直後の混乱期に、強盗殺人によって大金を手に入れた男が、戸籍を変えて別人になりすまし、事業に成功します。しかし 10 年後、篤志家として新聞に載った小さな写真のためにすべてが崩れていくという話です。

　主要な登場人物が、戦後の 10 年を様々な思いをもって懸命に生きている、それを感じさせました。特に三國は、極貧の生まれで犯罪者から会社社長となる男を演じて、迫力がありました。

　『張込み』は 1958 年公開。松本清張の初期の短編を原作とし、脚本が橋本忍、監督に野村芳太郎という、あの『砂の器』(1974 年)のトリオです。犯人を捜すミステリーではありません

　強盗殺人事件の共犯者が現れると見込み、佐賀に住む昔の恋人を、警視庁の二人の刑事が見張るという映画です。子連れの年の離れた銀行員の後妻に収まっている女の日常は、決まりきったもので退屈です。結婚を考えている若い刑事は生活に疲れた女の表情をじっと見ています。 しかし元恋人が現れると、彼女は驚愕の変身を見せました。輝くような生気を取り戻し、すべてを捨てて逃げようとします。

　元恋人を演じた高峰秀子が秀逸でした。

拝啓天皇陛下様

　『拝啓天皇陛下様』は 1963 年の公開です。野村芳太郎監督、渥美清主演の喜劇で、食うや食わずの貧農で読み書きも満足にできない男、正助が戦前戦中戦後を生きる姿をコミカルに描きます。彼が徴兵されて行くのは中国戦線ですが、戦争や軍隊の非人間性を描写するシーンはあまりありません。古年兵に理不尽に殴られ、いじめられる程度です。

　普通はつらいはずの軍隊ですが、正助には、衣食住が支給され読み書きも教えてくれた、今までで一番人間らしく生活できた所です。彼は天皇陛下を敬愛し感謝して生きます。

　戦前から戦後へ、社会の底辺で生きていく人間を「天皇陛下」に結びつける皮肉ですが、今、こんな題名がつけられるでしょうか。

『百円の恋』は 2014 年公開です。『万引き家族』(2018 年)で世界的な注目を集めた安藤サクラが主演です。

30 才を過ぎて、働きもせず自堕落な生活を送る女が、家を出て 100 円ショップの店員になります。近所の男に恋をして、近づくために女子ボクシングを始めます。

さわやかな青春映画ではなく、いじましい人間ばかりが出てきます。彼女がこのような人々と交わりながら、少しずつ変わっていく様子がよく描かれます。

生きることは素晴らしい、と感じました。

この 4 本の映画は舞台となった時代の雰囲気を的確に描き、公開された年代とあわせてみると、「映画は社会を映す鏡」であると実感しました。

『ルース・エドガー』 人権とアイデンティティ　　憲法と映画(43)

つだわたる　（美賀多台）

すっきりしないままで終わった映画でした。主人公の気持ちがわからないままで、複雑な人間感情だけが残りました。

主人公ルース・エドガーは、アフリカの紛争地で子ども兵士として育ち、米国の白人夫婦の養子となりました。10 年が経ち、彼は地元の高校生として学力も運動にも優れ、明るくリーダーシップを持った存在として、みんなに称賛され期待されていました。

ところが「対立があったときには銃で解決する」と論文に書き、ロッカーに違法な「花火」を隠し持っていたことから、アフリカ系米国人のウィリアム先生から注意を受けます。　彼女は米国の黒人や有色人種に対する差別をよく知っており「身を守るために、白人以上に秩序を守ることや自制心が必要」と考えています。生徒たちにもそれを求めて厳しい態度で接していました。　ルースの「危険思想」を知った彼女は、父母も含めて注意を促します。

映画はルースと彼女の対立を盛り上げ、最後はルースの罠によって、彼女が「嘘をついた」と決めつけられて、教師の職も奪われます。彼女の絶望と、ルース・エドガーの栄光は続く、と終わりました。

ルースの秘められた感情

今、米国をはじめとして世界中で人種差別に対する批判が大きくなっています。命も含めてすべての人間の人権は大事だという当然の声です。

ウィリアム先生は「優秀な」ルースを評価する一方で、自堕落な黒人の生徒を排除しました。良識と秩序を守る、それが黒人の処世術だと確信し「良い黒人」であること求めます。　ルースは優等生を演じながら、悪魔のような罠を仕掛け、彼女を破滅させます。しかし彼女の何が、ルースの怒りを誘ったのか、そこが明確ではありません。

ウィリアム先生が排除した生徒たちの復讐なのか、彼の本質的な「危険思想」を彼女が問題にしたからか、わかりません。

ルースという名前は米国でつけられました。アイデンティティを否定した「米国流」に彼の潜在意識が反発したという気がします。

『テルアビブ・オン・ファイア』　イスラエルの日常的な悲劇　　憲法と映画(44)

つだわたる　（美賀多台）

パレスチナ、イスラエルの現在の市民感情や生活を上手に描いたコメディ映画です。

「テルアビブ・オン・ファイア」は、ヨルダン川西岸パレスチナ自治区でつくる「反イスラエル」色の強いテレビドラマです。

1967 年第 3 次中東戦争前夜、イスラエル軍の軍事計画を探るために、パレスチナの女性レジスタンスがスパイとなって将軍を篭絡しようと近づきます。しかし二人の関係は禁断の恋に近づくというロマンチックサスペンスです。

このドラマの脚本家見習いサラームはエルサレムに住み、テレビ局があるパレスチナ自治区に通っています。ある日、このドラマの関係者だと検問所の所長に知られたことから、ドタバタの悲喜劇が始まりました。

所長はサラームのIDカードを取り上げて将軍とスパイが結婚するストーリーにしろ、と脅迫します。サラームは脅されていることを秘密にして、制作スタッフにあれこれ理屈をつけてストーリー変更を企てて、ドラマ制作現場は大混乱です。

お互いに身近だが

パレスチナ人が作るテレビドラマ、6 日戦争といわれるイスラエルの完勝だった第 3 次中東戦争の時代を描くとは言え、反イスラエルであることがわかっているのに、イスラエル人、それも軍高官の家族が喜んでみているのに驚きました。

お互いに身近な存在であるようです。

イスラエル軍が銃を構えて自治区をうろつき、喫茶店にも平気で入ってきます。またサラームを有無を言わさず検問所に連行するシーンもあります。

パレスチナ人の日常生活を分断、邪魔をする巨大な壁が街を威圧的に見下ろしています。軍が銃をかざして通行を管理する検問所は弾圧の象徴です。

映画は平穏な日常生活を描くのですが、これらはパレスチナがイスラエルの占領下にあることを意識させます。基本法(憲法)で「ユダヤ人の国家」と定める人種主義国家の日常的は、パレスチナ人の憎悪を再生産していると思いました。

『娘は戦場で生まれた』私たちの知らないところで　　憲法と映画(45)

つだわたる　（美賀多台）

2011 年頃マグレブから起きた「アラブの春」はシリアにも波及しました。独裁政権を打倒して民主的な自由を得るために多く市民がデモやストで立ち上がります。しかしアサド政権の武力弾圧によって、それは多くの難民を生み出す悲惨な内戦となりました。

反政府組織はアレッポを拠点として抵抗します。アレッポは紀元前 1800 年に誕生した、内戦前には 160 万人が住むシリア最大の歴史ある美しい都市でした。

2016 年シリア政府軍を支援するロシア空軍は無差別爆撃を加え、徹底的に破壊します。そしてアレッポはシリア政府軍に支配されました。

この映画は、「アラブの春」から陥落まで、アレッポにいたジャーナリストを志す女学生が映したドキュメンタリーです。

彼女は民主化をめざし仲間とともに戦い、生活し結婚します。そして女児を出産してもアレッポにとどまり、医師である夫とともに病院で生活しました。

無差別爆撃によって負傷した市民、子どもたちが次々に運び込ます。血だらけの顔、手当てを受けながらも死んでいく姿が映し出されます。そして病院までも標的とされました。

彼女は世界に向けて「アレッポを助けて」と、この映像を発信し続けました。

もっと関心があれば

内戦に米国やロシア、イラン、トルコ、イスラエル等が介入し、ISも台頭します。戦場となった生活空間は悲惨を極めました。シリアでは国民の半数にあたる 1200 万人以上が家を追われ、周辺の国々に逃れた 560 万人が難民生活を続けています。

どうすればこの内戦を止められるか、わかりません。しかし「コロナ」報道のようにすればどうだろと思います。

連日、新聞やテレビではコロナに感染した人数、死亡人数を報道します。世界の主な国の動向も知らされます。人々にコロナの恐怖感を与える効果は大きく、政府の怠慢にも敏感になりました。

もしテレビ等が世界各地の紛争地の死者や負傷者を連日報道すれば、国際世論は関心を高め、戦争をやめろと、盛り上がると思いました。

『コリーニ事件』ドイツは過去に目を閉ざさない　　憲法と映画(46)

つだわたる　（美賀多台）

原作の小説が出版された時、法の欠陥を知ったドイツ政府は「ナチスの過去再検討委員会」を設置しています。現実を動かしたミステリーの映画化です。

白昼、豪華なホテルで穏健な財界人マイヤーが殺害されます。犯人コリーニはすぐに逮捕されました。しかし彼は黙秘を続け、会長との関係や動機がわかりません。

被告の弁護士になったのはトルコ系の新米弁護士カスパーです。移民の子孫である彼は幼い頃からマイヤーに支援を受けていました。マイヤーの遺族に遠慮しながらも、地道な調査を続けて、わずかな手がかりから一歩一歩事実を積み上げて過去へ遡ります。とうとうコリーニとマイヤーの関係にたどり着きました。

戦時中、マイヤーはナチスの将校として、連合軍に降伏したイタリアに進軍しました。その地で市民を虐殺したのです。その時、目の前で父親を殺された子どもがコリーニでした。

過去に、彼とその姉がナチスの戦争犯罪としてマイヤーを告訴し、却下されていたことも明らかになりました。それは 1968 年「ドレーアー法」と呼ばれる、ナチスの「命令に従った」人々を、巧妙に救済する法律が作られていたためです。

その中心人物はナチスの下で検事として辣腕を振るっていたエディアルト・ドレーアーでした。チスを許さないドイツ

フィクションですが、ナチスの戦争犯罪を巧妙に時効に導く法制度を告発しました。ナチスの中心的な人物は、その責任を追及されました。しかしその当時の法律や命令のもとで残虐行為を働いた軍人や官僚は追及を免れています。

ドイツ政府は、ナチスの戦争犯罪を許さないという意思を示しました。 原作者のF・フォン・シーラッハはドイツの刑事専門の弁護士で小説家ですが、驚くべきことは彼の祖父はナチスの高級幹部でした。

コリーニを演じるのはマカロニ・ウエスタンの名優フランコ・ネロです。ごつい顔の老人でいい味を出しています。しかし少年時代の子役とちょっと変わりすぎの感じが、ご愛敬でした。

『パパは奮闘中！』あるフランス男の間違い　　憲法と映画(47)

つだわたる　（美賀多台）

映画サークルの 10 月例会で上映しました。これまでのフランス映画とは違うフランスの労働現場、子育て、男女の意識の差等を見せました。

通販会社の巨大な配送工場で働くオリビィエは、仕事ではチームリーダーという役職、もう一つは労働組合の活動家という両面を持ち忙しい毎日を過ごしていました。ある日、妻のローラが二人の小さな子どもを残して家出をします。彼はなぜ妻が出ていったのか、その理由が全く分かりません。

家事、育児すべてを妻に任せきりだったオリビィエは、日々の生活にたちまち困りますが、母親や妹が手助けに来てくれました。彼女たちは、ローラを非難することなく、家庭を顧みなかったオリビィエが悪い、と思っています。

映画は、家出の前にローラが職場で倒れ心身ともに疲れていること、それをオリビィエに言わないことで、二人の距離感を描きます。そして最後まで家出の原因を明示しません。

一方、配送工場では頻繁に労働者の解雇（おそらく契約社員の雇止め）があり、労働組合の活動も芳しくありません。オリビィエも心身とも疲れています。

男は旧態依然

フランスは国全体で子育て支援に力を入れています。男の出産休暇をつくったように、子育ては夫婦でするもの、そのための制度をつくり意識を醸成しています。『パリの家族たち』では、出産したばかりの女性大統領よりも、夫が上手におむつを替えるシーンがありました。

また社会保障、教育等も日本よりも手厚いと思います。その一方で移民問題などを抱え、経済格差も大きくなっています。厳しい職場環境が描かれます。

平凡で人のいい男が懸命に働き、労働組合運動も頑張ってはいるけれども、家事育児は妻まかせ、家庭の内外では顔が違うという日本にも少なからずいるリベラルな男です。

1970 年代まで、フランスはクリスチャンの戒律を尊ぶ国でしたが、20 世紀末からその縛りを解く法制度改正へ踏み込みました。でもまだ労組の活動家でも意識は変わっていない、と批判が聞こえます。

『芳華』検閲のもとで何を表現したか　　憲法と映画(48)

つだわたる　（美賀多台）

この映画は 2017 年に製作、公開されて、中国全土で大ヒットしました。主人公たちと同世代、人生の黄昏を迎えている世代が、共感をもって見たと言われています。

時代は文化大革命の末期から現代まで、人民解放軍の文芸工作団(前線の兵士の慰問等で、音楽や踊りを披露する専属の芸能集団、以下「文工団」)で活躍した男女を主人公にしています。

前半は若い男女が集団生活する中で、恋もあれば嫉妬、出世争い、懸命の稽古などを描く青春ドラマとなっています。

若々しい肢体が舞い踊る、美しい映像が画面いっぱいに広がり華やかな映像です。夜中にこっそりとテレサ・テンの歌を聴くシーンもありました。

それが一変するのは中越戦争(1979 年)です。後半は、中越戦争の凄まじい戦闘シーンから始まります。前半とは対比的に血しぶきが上がり、腕が吹き飛ぶ戦場がこれでもかと描かれます。

わずか 1 月にも満たない戦争でしたが、主人公たちの心身を大きく傷つけ、人生に影を落とします。

この戦争の後、中国は鄧小平の指導の下に改革開放政策をとります。文工団も不要ということで解散しました。

経済成長の影

現在の香港問題で露骨に出ましたが、中国は政府批判を許さず、思想・言論の自由を制限しています。当然、この映画にも検閲がかかっていますが、はっきりとはわかりません。

映画では中越戦争の原因や経緯の詳細は見せず、中国側のいう懲罰的自衛戦争だったといいます。しかしそこで戦った兵士の大きな傷だけはしっかりと見せました。

文工団の解散後、団員それぞれの人生は大きく分かれていきます。国全体の経済成長とともに成功した人生を送る者と、経済成長から排除され、苦しい人生を送る者もいました。

中越戦争で片腕をなくした男は、底辺で生きていました。現代中国は彼にやさしくないと映画は描きます。

原作は文工団に所属した、現在、米国で活動する作家です。監督は国際映画祭で高く評価される中国映画界の巨匠です。彼らに露骨な検閲は出来なかったようです。

『サイレント・トーキョー』 迫力ある映像だが　　憲法と映画(49)

つだわたる　(美賀多台)

クリスマスの前日、煌びやかな東京の街に爆弾が仕掛けられます。犯人は「日本を戦争ができる国にする」と公言する首相との対談を、マスコミを通じて要求しました。しかし首相は「テロに屈しない」といって、話し合うこと自体を拒否します。犯人は大群衆の中で爆弾を破裂させました。

前半は、警察内部も含めて、爆弾騒動に絡む様々な人間が錯綜する群像劇です。後半は容疑

者が浮かび上がってきて、犯行動機が明らかにされます。それが単純なので、映画の面白さには欠けますが、主張はストレイトです。

戦争ができる国

　犯人は、アジアの戦場に派遣されていた自衛官の妻でした。夫は爆弾処理の専門家で、帰国後、戦争の悲惨な実態を見て心の病に罹り、自殺していました。

　戦場のトラウマで苦しむ夫を見ていた妻は、軽々しく「戦争ができる国にする」という首相、それを容認する「平和ボケ」の国民に心底から腹を立てます。

　最初は音と光だけの爆弾をショッピングセンターで破裂させ、警告します。しかし一般市民も警察も本気にしません。次の標的になった渋谷駅前スクランブル交差点には、若者等が怖いもの見たさで集まってきました。

　クライマックス、大群衆の狂気が膨れ上がった時に、強烈な爆弾が破裂、阿鼻叫喚、蠢く犠牲者、リアルで迫力ある映像がつくられています。

　そして次の標的は東京タワーです。

　最後は、夫の元上司であった男の説得に応じて、二人一緒にレインボーブリッジから海へ飛び込んで終幕となりました。

むなしい怒りと悲しみ

　世界中には戦争や内戦、武力による弾圧などで苦しむ人々は多くいます。日常に持ち込まれた爆弾テロの犠牲者もいます。それを知ろうとせずに「戦争ができる国」「テロに屈しない」は愚劣です。

　佐藤浩市や西島秀俊、石田ゆり子などの熱演で迫力ある映画に仕上がっています。しかしこんな世の中を変えるには爆弾は無力であること、大勢の犠牲者を出しても、彼女の怒りと悲しみは誰の心にも届かなかった、それが伝わってきました。

　だったらどうしたらいいのか、そこがすっぽりと抜けています。

『シカゴ7裁判』 現代の米国に通じる　　憲法と映画(50)

つだわたる　（美賀多台）

　実話に基づく映画です。

　ジョンソン大統領の時代、キング牧師が暗殺されベトナム戦争が拡大する情勢の1968年8月、大統領候補を選出する民主党大会がシカゴで開催されます。そこへ戦争に反対する多くの団体や個人が集まり、市内でデモと集会が持たれました。その時に一部が暴走して警官隊とぶつかり、双方に多数の負傷者が出ます。

　その6か月後、選挙で勝利した共和党ニクソン政権は、戦争に反対し政府に批判的な主だった団体の8人（ブラックパンサー党ボブ・シールは、途中で別の裁判に移されて7人になる）を、暴動を扇動した共謀罪で起訴します。

裁判は全米が注目する中で行われました。裁判所を大群衆が取り囲み、州兵が警護する状況です。映画は、この裁判が政治主導であり、裁判長が露骨な人種差別主義者で頑迷な権力擁護であると描きました。

不公平な裁判、露骨な人種差別

司法長官の命令で、民主社会学生同盟、青年国際党、ベトナム戦争終結運動そしてブラックパンサー党の責任者が起訴されました。彼らは、面識はあったとしても共謀する関係ではありません。

裁判長は最初から彼らを有罪と決めつけていました。しかも黒人のボブ・シールを露骨に差別しました。その酷さに、担当検事さえも彼を別の裁判にすることを求めます。

検察側証人として、デモ隊に潜入していたFBI職員も出てきます。銃を構えた警官の映像、警棒が無防備な若者たちの頭に振り下ろされる映像も出ます。

前司法長官が出廷します。裁判長は、陪審員を退席させ、彼の「暴動の原因がシカゴ市警側にあったことが判明したので、起訴しなかった」という証言も証拠として取り上げません。

検察側から被告の一人が「町中に血を流せ」と言うテープが提出されて、被告は有罪となりました。

ラストシーン、被告代表は、この裁判中にベトナム戦争で死んだ米国兵士の名前を延々と朗読しました。被告全員、弁護士、傍聴、陪審員、そして担当検事と次々に起立しました。裁判長は怒って退席します。彼らはシカゴ7と呼ばれ、後には全員無罪となりました。

大統領選挙にあわせて、この映画をつくった米国映画人を称賛します。

『すばらしき世界』生きていく力の源　　憲法と映画(51)

つだわたる　（美賀多台）

現代日本映画界の屈指の監督である西川美和さんが脚本、監督した『すばらしき世界』は30年前に書かれた「身分帳／佐木隆三」を現代に置き換えて、社会の底辺に生きる人々を見事に描きました。

少年時代から犯罪を重ね、人生の大半を刑務所ですごした三上正夫(役所広司)は、殺人による懲役13年の刑期を終えて出所しました。まだ40代、今度こそ暴力団の仲間内に戻るのではなく、堅気に生きようとします。

その姿をテレビ番組に仕立てようと、若いフリーディレクター津乃田(仲野太賀)が密着取材します。

持病を抱え、すぐに働くことのできない三上は、後見人の弁護士と一緒に生活保護の申請に行きます。古いアパートに入ることも出来ました。

仲間がいて

一人暮らしの三上は、周囲の人々と摩擦を起こしました。夜中まで騒いでいた階下の外国人労働者のグループに怒鳴り込みます。ある時は彼の前歴を知っていたスーパーの店長に万引き犯と間違われます。

生活保護を受けることを潔しとしない三上は、職を探し、服役中に失効した運転免許を得るために、教習所の費用を出せと福祉事務所にねじ込みます。

街角で、サラリーマンを恐喝している二人組の与太者を、三上は半殺しにします。切れやすい粗暴な面が表面化しました。

すべてうまくいかない状況で、三上はこっそりと暴力団時代の兄弟分に連絡を取り、遊びに行きます。そこで見たのは華美な外見の一方で、暴対法で潰されそうになっている組の現実でした。

再び真面目に生きようと戻った三上は、老人介護施設に職を見つけます。その夜、彼の部屋で弁護士夫妻、スーパーの店長、津乃田が集まって、ささやかな祝宴がありました。

しかしそれですべて上手くいくほど、この世は甘くありませんでした。

三上の周りに集まる人々は、彼が堅気で暮らすのを期待し応援します。ケースワーカーも気にかけてくれます。新しい職場の人々は彼の前歴を知らず、普通に接します。平凡な善意と悪意が混ざり合う人生です。

ここで生きる三上の懸命さに、見ている私が辛さを感じます。しかしその「普通の人生」の辛さは、一人ではないと感じた時に乗り越えていけます。

若い津乃田が、悪戦苦闘する三上に惹かれていくことに共感を覚えました。

『花束みたいな恋をした』 なぜ一緒に暮らすのか　　憲法と映画(52)

つだわたる　（美賀多台）

初めて、このコーナーで恋愛映画を取り上げます。脚本の坂元裕二はテレビドラマ『それでも、生きてゆく』(2011 年) から気にかけていましたし、その上、この映画の主人公が書くイラストに、映画サークルの表紙を書いていただいている朝野ペコさんのものがつかわれている、そんな理由で、普段はあまり見ない甘い恋愛映画を見に行きました。

雑誌、ゲーム、映画、芝居、音楽、展覧会等の好みが一致した大学生の麦(菅田将暉)と絹(有村架純)が、5 年ほど一緒に暮らし、そして心が離れて、別れるという映画でした。

大学生そしてフリーターであった時、二人はとてもお互いを理解し合い、楽しい同棲生活でした。しかし企業の中で働き始めて、二人の心がすれ違います。

大学を卒業した時点では麦はイラストレーターをめざし、絹はアルバイトで働きます。すぐに限界を感じて、麦は通販の会社に入り営業職に就きます。絹も簿記の資格を取って正規職員として働き始めます。

そして現実と未来を見て、麦は「仕事は遊びではない」と仕事第 1 になり、絹はやりたいことをするために転職しました。

「昔のようにはいかない」ことをお互いに認め合って、男は結婚を望みますが、女は別れを選択するという映画です。

会うは別れの始まり

恋愛感情など二人の変化が中心的ですが、彼らを取りまく人間関係、そして働く企業の状況も挿入されます。それらに影響されながら二人が変わっていく姿が描かれます。どちらが悪いというわけではありません。

この映画が現在の若い人の恋愛観や結婚観あるいは生き方をリアルに描いているかどうかわかりません。坂元裕二は 10 歳若い世代ですが、私の理解できる人間像にはなっています。

結婚して家庭を作るという社会的慣習に縛られない、楽しく一緒に暮らす、魅かれあうものが無くなれば、「花束」のような美しい思い出を持って別れる、そんな人生です。

落語で、亭主の不満を言いながら別れない女房に、理由を問えば「だって寒いんだもん」という落ちがありました。人生観がまったく違います。

『生きろ　島田叡　戦中最後の沖縄県知事』　特異な官選知事の生きざま　　憲法と映画(53)

つだわたる　（美賀多台）

須磨区で生まれ、アジア太平洋戦争の敗戦間際の沖縄県知事として赴任した島田叡を焦点に、元知事の大田昌秀さん等、生き残った人々のインタビューと映像で壮絶な沖縄戦を描くドキュメンタリーです。

前任知事が本土に逃げ帰ったあと、大阪府の幹部であった島田叡が沖縄県知事に任命されます。家族等の強い反対があったものの、誰か代わりに「行って死んでくれとは、よう言わん」といって 1945 年1月 31 日、彼は沖縄県に降り立ちました。

戦前の政府高官の多くは、国民を戦地に送っても、自分が行くことは避けたようです。その中で島田叡は潔く、死をも覚悟して沖縄に赴きます。

すでに那覇市街は大空襲を受けて、焼け野原になっていました。島田知事は県民の命と生活を援けるために奮闘します。老人子供の疎開を促し、食料確保のために危険を冒して自ら台湾にも飛びました。

鉄の暴風の中で

沖縄守備隊は、沖縄を守るためではなく、本土決戦のための時間稼ぎを命じられていました。この映画でも、牛島満司令官の孫、牛島貞満さんが「最後まで戦え」と命令して自決した祖父の無責任さが、犠牲を大きくしたときっぱり指摘していました。

「軍民一体の戦闘協力」に従い、少年少女を召集した鉄血勤皇隊、ひめゆり部隊等も作られます。鉄血勤皇隊であった大田元知事は「知事としては軍の要請を拒否できない。軍が県民も一緒に玉砕すると公然と言う中で、何とか住民の命を守ろうとした。単純に軍隊と一体化して生徒を動員したなんて言えない」といいます。

米軍が沖縄本島に上陸した4月1日からは、民間人を巻き込んだ地上戦になりました。とりわけ5月末に軍司令部が、県民が多く避難している南部に撤退して持久戦を展開したために、多くの犠牲者が出ました。島田知事もここで殉職しています。

沖縄戦の日本側死者 188 千人のうち、民間人死者は 94 千人です。その中には、軍が住民を壕から追い出し、あるいは米軍のスパイとして処刑した事例もありました。

島田知事の懸命の配慮はあっても、国体護持に拘った政府と軍の方針で、沖縄は大きな犠牲を強いられました。大田実海軍陸戦隊司令官は、県民の奮闘を見て、自決の前に「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ 」と大本営に打電します。

しかし戦後においても沖縄を米軍の占領に差し出し、現在も県民の声を聞かず基地建設を強行しています。

『薬の神じゃない』 社会を変える力　　憲法と映画(54)

つだわたる　（美賀多台）

コロナ対策で、中国は病院を 2 つ建ててしまいました。日本は医療崩壊と言いながら、病床削減をすすめる「改正医療法」をあっさり可決しました。

中国がコロナに迅速に対応したのは、もしかしたらこの映画の基になった「ニセ薬」事件（2014 年）に学び、そしてこの映画の影響を受けたかも、と思いました。

これは 2018 年に中国で興収 500 億円の大ヒットした映画です。

上海の下町で怪しげなインドの強壮剤を売っていたチョン・ヨンに慢性骨髄性白血病の薬を密輸入してくれという話が舞い込みます。その当時、中国で認可されていたスイス製の薬は非常に高くて庶民には手が出ません。インドで作られたジェネリック薬品は、安価で同様の効果があるが、認可されていません。

「ニセ薬」販売は重罰に処されることから、チョンは断りますが、金に困ってインドに跳びました。仲間を募って組織的に密輸し販売を始めると、爆発的に売れます。薬はよく効き、多くの患者と家族に喜ばれ、しかもどんどん儲かりました。

しかし警察への密告が始まります。身の危険を感じたチョンはグループを解散し、薬の販売をやめてしまいました。困った患者たちの悲鳴が聞こえ、罹病していた仲間が絶望して自殺しました。

チョンは身の危険をも顧みず密輸入を再開しますが、とうとう警察に捕まります。その時、多くの患者たちが声を上げたので、彼の罪は軽くなりました。

共産党独裁のもとで

映画はここまでですが、その後、患者の切実な声を聴いた司法も行政機関も動き、これを契機に中国の医療制度は見直されてジェネリック薬品を認可しました。

高額な医薬品を庶民は買うことができず「死ぬしかない」、買えても家族を含めて破産する。国はジェネリック薬品を認めず、警察は治安を守るために「ニセ薬」を取り締まる、そんな状況を、患者の声が変えました。

チョンたちは、患者仲間のインターネット掲示板を使って、密かに販売網を広げていきます。それは自らの命を守る庶民の戦いでした。

検閲がある強権的な政治のもとであっても、力を合わせれば社会は変えられるという映画をつくりました。

『一人になる』 コロナ禍の今も　　憲法と映画(55)

つだわたる　（美賀多台）

ハンセン病の治療に生涯をかけ、患者に深く寄り添った医師、小笠原登を紹介したドキュメンタリーです。

この映画で、ハンセン病の実像と国のハンセン病対策の恐ろしさを知りました。ハンセン病は末梢神経の麻痺、皮膚の病変を起こす伝染病ですが、伝染力が非常に弱く、感染しても普通の体力であれば発病しない病気です。薬で完治し、現在の日本では新規患者はほとんどいません。

しかし「恐ろしい病気」という偏見が、今でも根強く残っています。それは国の政策によって国民に刷り込まれました。

1931 年「らい予防法」が作られ、療養所への患者の強制的な隔離が進められます。患者は国家の恥、地域や一族の恥と隠ぺいされました。戦後、同法は 53 年に「改正」されますが、強制的な収容は続き、家族から切り離され、強制労働や断種等の人権を無視した政策が進められます。皇室をも持ち出す「無らい県」運動は、住民に患者の告発を競わせました。死んでも骨さえ家族の元へは返されません。

ハンセン病を知る多くの医師は、感染力が弱い病気なので隔離が必要ないと思っていましたが、国の方針に異を唱える者はいません。

新憲法下でも多くが沈黙

医学的根拠がないのに患者の人権を踏みにじる強制隔離が、戦後の憲法の下でも強行されたのは驚きです。国家権力が基本的人権を抑圧し踏みにじる、しかもそれに対して医者や研究者等の専門家、マスメディアが沈黙していました。。

小笠原登は医師であり真宗大谷派の僧侶でもありました。医学会も教団も国に協力する中で、ひとり強制隔離に反対し、患者を守る立場を貫きました。。

小笠原の弟子であった元厚生省官僚は、現役時代にはモノを言えませんでしたが、後の国賠訴訟で事実に基づく証言をして、国の責任を明らかにしました。。

この映画のコピーは「群れるなひとりになれ　みんなになるなひとりになれ」と言っています。

専門的知識に裏打ちされた良心を持ち、それを貫く勇気は大変なものです。現在のコロナ禍でも強く感じます。

『シャイニー・シュリンプス！愉快で愛しい仲間たち』　憲法と映画(56)（2021.8）

性別が違うことも性指向が違うことも、そんなに大きな違いではない

つだわたる（美賀多台）

シャイニー・シュリンプスは、フランスに実在するゲイたちの水球チームの名前です。映画は、彼らをヒントに作られました。

ある日、彼らのところに水泳のオリンピックメダリスト、マチアスがコーチとして派遣されてきます。彼はインタビューを受けているときに同性愛差別の暴言を吐いたために、水泳連盟が懲罰としてゲイの水球チームのコーチを命じたのです。マチアスの使命は、シャイニー・シュリンプスを「ゲイゲームズ」に出場させることでした。

しかし真面目に練習しようとしない彼らの実力はレズビアンの水球チームにも苦戦するレベルです。

基本はコメディです。下品な下ネタを連発しながらも、国内予選を勝ち抜いてクロアチアで開かれる国際大会に出場し、優勝するという話です。明るく愉快な彼らですが、世間から迫害されている様子も挿入されています。同性婚であっても普通の夫婦のようにすれ違いがあり、恋のときめきもあると描きます。

ジェンダー蔑視

マチアスは無礼な質問をしたインタビュアーを「ホモ野郎」と罵ったことが懲罰の対象になりました。インタビュアーが同性愛者だと知って言ったわけではないですが、怒りに任せて相手を侮辱、罵倒しようとして使った言葉がこれです。

彼が特別に同性愛者を嫌っているわけではなく、無意識に差別していることの表れです。彼のこれまで生活環境などで同性愛者を知らず、日常的常識、人権意識として同性愛者を下劣と見ているからです。日本でもだらしない男をオカマといい「女の腐った」という言い方があります。

彼らと付き合ってマチアスの人間観は変わっていく、と描きました。

メンバーは、ずけずけと本音を言うし、下品な下ネタを連発するなど、それぞれ個性的で自由です。でもLGBTQでも慎ましい人もいると私は思うのですが、日ごろ抑圧されている分、仲間が集えば羽目を外すのでしょう。

監督・脚本のセドリック・ル・ギャロはシャイニー・シュリンプスの一員です。

註1：この映画で「ゲイゲームズ」を初めて知った。1982 年からはじまったLGBTQ（性的少数者を表す言葉でレズビアン（女性の同性愛者）ゲイ（男性の同性愛者）バイ（同性も異性も愛す人）トランスジェンダー（体の性と心の性が異なる人）クエスチョング（性自認、性指向が定まっていない人）の総称）たちを対象にした、世界最大の総合スポーツ競技会で、オリ・パラリンピックの中間年に開催。次回は 22 年香港。

註2：水球は 1 チーム 7 人（内ゴールキーパー一人）の 2 チームが水深 2mのプール、20×30m のコートで相手ゴールにボールを投げ入れるハンドボールに似た球技。水中で激しくぶつかることから「水中の格闘技」いう。

『グレース・オブ・ゴッド 告発の時』個性が連帯して闘う映画　憲法と映画(57) (2021.9)

つだわたる（美賀多台）

この映画の脚本、監督であるフランソワ・オゾンは屈指の映画作家です。裁判が進行中のカトリック教会の犯罪を取り上げる気迫と、その本質を描く映画的技量があります。しかもそれをフランスらしく描きました。

３０ 年前、小学生の頃に小児性愛の神父から性虐待を受けた男アレクサンドルが、その神父が自分の街にやってくることを知り、教会幹部に「神父をやめさせろ」と告発することから、映画は始まります。

彼は熱心な信者で、銀行員として地位も家庭も築いています。思い出すのも嫌な過去、知られたくない体験ですが「子ども達のために」と勇を鼓舞して、教区の責任者、枢機卿に神父の処分を迫ります。フランチェスコ教皇が性虐待を「許さない」と公言していることも背を押しました。

しかし枢機卿は「すでに時効」として隠ぺいしようとします。失望したア レクサンドルは警察に告発しました。それで事態は動き始めます。警察は時効となっていない被害者を捜し始めました。
次の被害者フランソワたちが「沈黙を破る会」をつくり、警察だけに頼らず、被害の実態をマスメディアに公表しました。

権威権力に立ち向かう
忘れ去りたい過去の恥部を公表し、社会的に大きな権威を持つ教会を糾弾する勇気を一人一人では持てなくても、協力し連帯することで持つことはできる、そう映画は描きます。
主に 3 人の被害者が描かれます。彼らの人間性や考え方、社会的地位、家族関係は三者三様です。「被害者」という共通項がなければ知り合うことはないでしょう。
そんな彼らが、一つの目標に向かい協力する姿を描きます。それは個性的でフランス的だと思いました。
リヨンを舞台にした映画で、街を見下ろし威圧するように聳える教会が何度も映像に現れます。その権威を背景に、枢機卿は被害者ではなく、教会を守る姿勢で終始します。それに対峙する個人は小さくとも、輝きます。
題名の「神の恩寵」は、一人ひとりに与えられるが、得る努力がいると読めました。

『スイング・ステート』 選挙は民主主義の手法 憲法と映画（58）（2021.10）

つだわたる（美賀多台）

米国ウィスコンシン州の架空の町、人口が 1 万5千人から5千人に急減した過疎の町の町長選挙を舞台とする風刺のきいた政治的コメディ映画です。しかもトランプ大統領が勝利した後という時期の設定、公開が昨年の大統領選挙の前であるというのも重要な意味がありました。
同州は中西部の北部、ミシガン湖の西湖岸に接し、重工業が廃れているラストベルトの西端です。共和党民主党が拮抗する州から、近年の大統領選挙では民主党が勝ってきましたが、2016 年の選挙では共和党トランプに取られました。
『スイング・ステート』は邦題です。原題は『Irresistible』で、直訳すれば「抵抗できない、抑えられない」という意味です。この映画を見た後で、餌を見せられて思わず食いついたという意味だと思いました。

ヒートアップする選挙だが
軍事基地の撤退により人口が急減し、町財政が危機に陥ったために、町長は福祉を切り下げ、差別的な移民排除を打ち出しました。
それに対して、住民集会で退役軍人の農民ジャックが敢然と反論します。「チェーンの強さは最も弱いリンクで決まる」と弱者に焦点を当てた行政を求めました。

その映像を見た民主党選挙コンサルタント、ゲイリーはこの町に飛んできて、ジャックに町長選挙を闘い、町を変えようと促しました。

大統領選挙でクリントンを支援したゲイリーは逆転負けに大きなショックを受けました。それを払拭し、次は必ず勝つ、そのためにこの町から民主党の風を吹かそうと選挙を闘います。
現職町長側には共和党が付き、ゲイリーの宿敵であるコンサルタントもやってきます。両陣営とも大量のスタッフを送り込み、全国から選挙資金を募り、選挙はヒートアップします。全国ニュースでも取り上げられました。
投票日がやってきて、あっと驚くカラクリが明らかになりました。
映画は米国の選挙の内幕を面白おかしく描きます。地道な政策の練り上げよりも、いかに有権者を取り込むか、イメージアップと中傷合戦、AIを駆使した分析と金のばらまき、面白い映画でした。

『わたしの叔父さん』人生を自分で決めることができる社会　憲法と映画(59)（2021.11）

つだわたる（美賀多台）

働くことは、人生のもっとも重要なことの一つです。日本では、企業が新卒者を一括採用する慣習があり、その時期の社会情勢が生き方に大きな影響を与えます。再就職や別の職種の資格を得るために学校に入りなおすのも大変で、その間の生活費や教育費は自分で手当てしなければなりません。しかも正規雇用が減り、中高年の就職は非常に困難です。
また肉親が高齢等で介護が必要になると、経済的にも精神的にも大きな負担となります。公助、共助はわずかで自己責任がのしかかります。
この映画は、そのような教育や福祉に焦点をあてたものではありません。デンマークのユラン半島で乳牛を飼う叔父と若い姪の話です。

一緒に暮らす

幼くして両親を亡くしたクリスは、酪農家の叔父に引き取られて育ちました。彼女が高校を卒業するときに叔父が病気で倒れて体が不自由になります。彼女は獣医になるための進学をやめて、叔父の世話をしながら酪農を続ける道を選びました。
早朝から牛の世話をする、二人の平穏な日常が続いていました。デジタル社会のデンマークで、クリスは携帯電話を持たない変わった娘です。外との関係が薄い日々です。

そこに変化が訪れます。難産の牛を助けたことから村の獣医の手伝いをすることになりました。さらに教会で出会った青年とデートに誘われます。彼女の目が世間に向き始めました。
ところが獣医にさそわれて、一泊旅行したときに、叔父さんが倒れました。幸い軽い怪我でしたが、彼女は叔父さんのそばにいる、という決意を固めます。付き合い始めた青年や世話を焼く獣医等を振り捨てました。
クリスは叔父さんの世話をするために、彼女の人生をあきらめるのか、そう見えました。しかしよく考えると、デンマークは公的な介護が整い、老後の生活も安心です。叔父さんはいつでも酪農をやめることができるのです。
そしてクリスも望めばいつでも獣医の学校へ進学できる制度です。その生活費も保障されています。
デンマーク社会の中で、二人は一緒に暮らすことを選んだ、そんな映画です。
※この映画は神戸映画サークル協議会の 11 月例会です

『梅切らぬバカ』共存する社会への模索　憲法と映画(60)（2021.12）

つだわたる（美賀多台）

自閉症の息子チュウさん(塚地武雄)と高齢の母(加賀まりこ)の二人暮らし、ちょっと悲哀も感じるささやかな日常を描くコメディ映画です。
50 歳になるチュウさんの先々を心配する母は、実家を離れて障がい者が一緒に暮らすグループホームに入ることを勧めます。
ホームの空きが出たことを聞いた二人は、さっそく入居しました。はじめて親元を離れた暮らしが始まりますが、チュウさんは同居する人々とうまくコミュニケーションがとれず、自分の決めたルールにこだわり、あちこちでぶつかります。
そしてとうとう、周辺の住民とトラブルを起こしたことで、せっかく入ったグループホームを出て、チュウさんは再び、母と一緒に暮らす生活に戻りました。
77 分の短い映画ですが、いろいろなことを考えました。

現実のさまざまな断面

コミュニティカフェ　Rico

母は自分が死んだ後のチュウさんを、とても心配しています。
憲法 25 条という立派な考え方を持っている日本ですが、障がい者が安心して暮らせる社会ではないからです。
社会保障制度も貧弱ですが、この映画では障がい者のグループホームが近所にあること自体を嫌う人が結構いると描きます。
「地価が下がる」「治安が悪くなる」「静かに暮らしたい」と言い、自分の生活を守ることが大事で「普通ではない」人々を排除します。
それは現実にあると思いました。
相談を受けた市職員はノーマライゼーションのまちづくりよりも「中立」を装います。映画は、障がい者を援助する共同作業所等の職員は懸命に働いていると描きます。しかし補助金の水準が低く、その運営が厳しいことや彼らの処遇が低いことには触れません。
そこが残念です。
救いは、隣に引っ越してきた家族とチュウさんたちが仲良くなったということです。

タイトルは「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という諺の引用です。庭を越えて通行の邪魔になっている梅の枝とチュウさんを重ね、切りたくない母の心情を表しています。
でも人間と梅は違う、と私は思ってしまうのです。

『大コメ騒動』　徒党を組んで闘った女たち　憲法と映画(61)（2022.1）

つだわたる（美賀多台）

1918 年富山で起きた米騒動を題材にしたコメディ映画です。
日本はG7で労働争議が一番少ない国です。連合はストを構えることすらせず、賃上げは政府主導の「官製春闘」となっています。実質賃金は下がり続けG7で最下位、OECD諸国の平均以下になりました。韓国よりも低くなっています。

この映画は、生活と家族を守るために、争議を起こした女たちの歴史です。魚が取れなくなる夏、男たちは出稼ぎに行き、残った女たちは米を船に積み込む人足仕事で、家族の生活を支えていました。
ところが戦争(シベリア出兵)が始まるという新聞報道が出て、全国的に米の値段が急激に上がります。人足仕事の給金では買えなくなりました。

女たちは、米屋に押しかけて「前の値段で売ってくれ」、浜に出て「米をよそへもっていくな」と必死の行動に出ますが、警察に蹴散らされます。
米の値段はますます上がり、町には不穏な空気が漂います。警察は騒動の中心人物を逮捕し、米屋は女たちを分断する工作を始めます。

仲間を信じて
大正時代は資本主義と民本主義、労働組合運動も広がった時代ですが、米騒動に立ち上がった女たちとは直接的な関係ありません。彼女たちの多くは文字も読めず、組織もありません。
警察と金持ちは結託して、アメとムチを使い分け、貧乏人の行動を抑え込もうとします。しかし米が買えない、家族が飢えている、不安と不満が高まりました。
ついに女たちは体当たりの行動に出ます。徒党を組み、必死の形相で米屋に押しかけ、米の積み出しを妨害しました。
コミカルですが悲壮感もあります。
それが功を奏して、米屋は元の値段で米を売りました。映画はめでたしめでたしで終わります。
小さな村の闘いです。それが新聞報道や噂などで尾ひれをつけて、全国に伝わりました。
全国的には前年ぐらいから労働争議が勃発していました。それに加え米騒動が各地へ広がり、時の内閣が倒れます。小さな女の力でも仲間を信じて闘えば道は開かれました。
しかし歴史は昭和に入り、日本は軍国主義へ突き進みました。
※この映画は映画サークルの 1 月例会(1 月 21･22 日)、なでしこホール(2 月 14 日)で上映されます

『汚れたミルク』 勇気ある人々 憲法と映画(62) (2022.2)

つだわたる (美賀多台)

実話に基づく映画です。「強欲」資本主義の利益追求を鋭く批判し、先進国のジャーナリズムの実態までも暴きました。
1990 年代、巨大多国籍食品メーカーのネスレはパキスタンで粉ミルクの販売を進めていました。しかし貧困層は上水道もない、女性の識字率も低い社会状況では、粉ミルクを溶くのに不衛生な水を使い、必要量に満たない薄めたミルクを飲ませたために、乳幼児に病気が多発し死者も出しています。
それに気づいたネスレのセールスマン、アヤンは、会社にパキスタンでの粉ミルクの販売中止を求めました。会社は「消費者の自己責任」と言い放ちます。政府機関に訴えても「余計なことをするな」と脅されました。

アヤンは怯むことなく、国際的な人権団体の協力も得て、ネスレの実態を告発するドキュメンタリーが作られます。ドイツの放送局が取り上げようとしました。
しかしアヤンのわずかなミスで、それは中止となりました。

巨大企業との闘い
副題が「あるセールスマンの告発」となっています。
巨大企業に就職したアヤンは、粉ミルクの売り上げを伸ばし、得意の絶頂でした。しかし粉ミルクのために多くの赤ん坊が病気になり死亡している事実を知ります。
製品自体に欠陥はないのですが、瀕死の赤子を見てアヤンは自責に駆られます。そして自分の身を顧みることなく、捨て身の行動に出ました。
その勇気には敬服します。高収入を捨て、身の危険を感じるような脅しを受けながら闘います。彼の妻も父、母も支援を惜しみません。
人権団体の紹介で先進国のジャーナリストが、この問題を取り上げます。しかしテレビ局がアヤンの行動に不信を持ち、急遽放映が中止されました。
この映画は、事件の映画化を検討する企画会議で、アヤンが語るこの間の経緯が映像として流れる構図です。そして結論は「映画化しない」というものでした。
多国籍企業の利益追求の姿勢と、監視すべきジャーナリズムの弱腰が如実に描かれます。
それでも闘う人々はいます。

（この映画は映画サークルの 2 月例会（2 月 18 日 19 日）で上映されます。
神戸映画サークル協議会（神戸映サ）（kobe-eisa.com）

『ボストン市庁舎』 市民と向き合う市政　憲法と映画（63）（2022.3）

つだわたる（美賀多台）

キネマ旬報のベストテン洋画部門の第2位に選ばれています。
世界的なドキュメンタリー作家であるフレデリック・ワイズマンの作品で、米国マサチューセッツ州ボストン市の行政を描きました。
前作『ニューヨーク公共図書館』も 3 時間 25 分と長尺でしたが、今回はそれを上回る 4 時間 34 分です。しかし図書館よりも地方自治体のほうが仕事の範囲が広いので、取り上げる分野も多くなり、結果的にちょっとわかりにくい感じです。
東海岸の州は民主党の支持が強く、この映画に出てくるウォルシュ市長も民主党員で、現在はバイデン政権の労働長官を務めています。現在の市長は彼の後継で、アジア系の女性です。
そういう都市です。

自治体労働者の核心
退役軍人会、警察、福祉、教育、都市計画、請負契約、結婚の立ち合いなど、いろいろな分野で職員と市民、業者が出てきます。
日本の公務員制度は政治的中立「成績主義」ですが、米国では幹部職員は「政治的任用」で市長の同志が職員として配置され仕事をしています。
ですから、この映画でも市長ははっきりと政治的姿勢を出す演説をするし、幹部職員でも市民に向けた挨拶や説明に政治的なものを感じました。
そして市民と向き合っている感じが強く出ていました。私は市民の理解と協力の下でこそ自治体の仕事はできると思っていますが、この映画に出てくる職員にそれを感じました。

神戸市では
人口当たりの公務員の数は、先進資本主義国の中でも日本は最小で、米国の 2／3 程度です。さらに「経費の節減」「効率化」を求めて国も地方も民間委託が進んでいます。神戸市でも、久元市政は現場の実情を聞くことなく民間移管を大規模に進めています。
とりわけこの映画と比べると電話の受付です。神戸市は分野別のコール・センターを設け、それを民間に委託し、市民の苦情を直接聞くという自治体労働者の大切な職務を奪いました。「市長への手紙」も廃止しました。
ウォルシュ市長は「私に連絡してくれ」と言っていました。

『スリーピング・ボイス 沈黙の叫び』 残酷な時代を描く　憲法と映画（64）（2022.4）
つだわたる（美賀多台）

現在、左派政権が民主的な政治を行っているスペインですが、第2次世界大戦前に自国民が殺しあう悲惨なスペイン内戦がありました。
この映画はフランコ独裁政権がつくられた直後、1940 年の女性刑務所を描きました。
1936 年フランコ将軍は選挙で勝った左派の共和国政府に対して、クーデターを起こします。政府側は治安警察や労働者が武装して対抗しますが、ドイツ、イタリアの支援を得た反乱軍は次第に優勢となり、1939 年フランコは勝利宣言を出します。そして政府側で闘った兵士を逮捕、処刑していきました。さらに兵士だけでなく、その妻や恋人、母親も逮捕し刑務所に収容しました。彼女たちは、尋問され拷問、処刑されました。その歴史的事実をしっかりと描く映画です。

これは 2011 年スペインで製作されました。なぜ 21 世紀のこの時期に作られたのだろうと考えました。おそらくこの時代を生きて体験した人々が亡くなる前に、この残酷な事実、時代を記憶し継承しようとしたと思います。

未来のための記録
狭い雑居房で多くの女たちが閉じ込められています。そして名前を呼ばれたものは、裁判を受けることもなく銃殺されていきました。刑務所を管理しているのはカトリック教会のシスターです。
夫が政府側の兵士と戦っているオルテンシアは、妊娠しているが刑務所に収容されています。彼女を助けようと妹ペピータが田舎から出てきます。
ペピータは、密かに共和国派を助ける元医師の家で働きながら、姉に差し入れし、子どものために謝罪するよう説得を続けます。しかし姉からは山岳地帯でゲリラ戦を展開する義兄への連絡係を頼まれました。次第にペピータの身にも危険が迫ります。
刑務所内で出産したオルテンシアは、子どもをペピータに預けるよう、彼女に同情的な女性看守に願いました。
多様な人々が共存する社会は大切です。隣人を憎悪し暴力が荒れ狂う時代があったことをしっかりと伝えることで、その大切さが身にしみてわかると思いました。

（この映画は、映画サークルの 5 月例会（5 月 20 日 21 日）で上映されます）

『英雄の証明』 ICT（情報通信技術）の時代で 憲法と映画（65）（2022.5）

つだわたる（美賀多台）

イラン映画です。イランはイスラム共和制の国で、日本とは政治体制や法制度、社会的な常識、生活習慣等が違います。この映画は、そういう違いがありながら、マスメディアとネット社会という似通った社会の変化を描きました。
借金が払えないために刑務所に入っているラヒムは休暇（刑期中に一時的に外泊することが出来るイランの制度）で、婚約者と姉夫婦に会いに行きます。
その時に婚約者が拾った 17 枚の金貨を借金の返済に充てようとしました。でもうまくいきません。しかたなく持ち主に返そうと「鞄を拾った。連絡を乞う」とビラを貼り、連絡先をラヒム自身にして刑務所の電話番号を入れました。
金貨は持ち主に返り、刑務所長はそれを知りました。ラヒムからすべてを聞き出した所長は刑務所のイメージをよくするために

「正直者の囚人」として新聞やテレビに知らせます。それが報道されると、ラヒムは一躍有名人になりました。そしてチャリティ協会がラヒム救済の寄付金を募り、多くの人が協力し始めます。
しかし「ラヒムの善行」を実証するために、落とし主を連れてくることを求められると状況は一転します。その人は名前も住所も告げずに去り、電話も公衆電話等からでした。見つけることが出来ません。
今度は「ラヒムは大ウソつきだ」というSNSが流されます。ラヒムが噂を流していると思われる貸主の所に行くと喧嘩になりました。その画像も流されて、いよいよラヒムは窮地に追い込まれます。テレビの取材も中止になり、事情が分かっている刑務所長からも罵られました。
結局、ラヒムは元の木阿弥となって刑務所に戻りました。

事実よりもイメージ
金貨の入った鞄を拾って、それを元の持ち主に返したことは事実です。それをどう評価し利用するかは、立場によって違うことを描きました。しかもマスメディアだけではなく個人が発信するSNSが、事実以上に社会的に大きな影響力を持っています。
それがラヒムの人間的評価と人生を左右しました。
日本もよく似ていると思いました。

『大河への道』 落語と映画 憲法と映画(66)(2022.6)

つだわたる(美賀多台)

ここで紹介する映画かどうか少し迷いましたが、私が追求している行政職地方公務員を主役とする映画ですので、書くことにします。
立川志の輔の創作落語を原作としてつくられたコメディ映画で、落語の映像化ですから突っ込みどころ満載になるのは仕方ありません。よほどしっかりした脚本、監督が必要ですが、そのあたりは凡庸でした。
千葉県香取市の観光政策が始まりです。ここ出身の偉人として親しまれ尊敬されている伊能忠敬を主役とする大河ドラマをつくるように、NHKに働きかけることが決まりました。
映画は、現代の市役所のドタバタぶりと江戸時代の忠敬の地図作りにかかわる、二つの場面で構成されています。出演者は現代と江戸時代で一人二役をしていました。
忠敬は佐原の商人でしたが、50 才で隠居します。それから江戸に出て天文学を学び、幕府の許可を受けて、日本国中を回って精度の高い日本(北海道から九州まで)の沿岸地図を作成した人です。
地図は忠敬が死んだ 3 年後に公表されました。その間に何があったのか、これがこの映画の主題でした。

大事な公務

大河ドラマをめざす仕事の責任者は池本主任（中井貴一）です。人口 7 万人の小さな市のですが、彼は課長でも部長でもありません。普段はゴミステーションの網の修理も自分でする総務課の担当者です。

香取市長は出てこなくて、業務は千葉県知事（草刈正雄）が命じ、最後も知事に報告します。

県市の役割分担や業務上の指揮命令系統はいい加減です。そこはやむを得ないと目を瞑ります。でも公務とは何かを描かないのが残念でした。

落語は一人で何役もこなす芸ですから、中心人物と筋、布石以外は削ぎ落しています。しかし映画は周囲の状況も映し出します。そこに映画の面白さがあり、落語にはない良さがあります。しかしそういう撮り方ではありません。

忠敬の死を伏せ、幕府を欺いて地図を完成させたという映画です。現代でも、国民市民のためになる大切な公務は、上司を騙してでもやれと強調すればよかったのです。

『クーリエ／最高機密の運び屋』国益ではなく家族を守る 憲法と映画（67）（2022.7）

つだわたる（美賀多台）

ロシアのウクライナ侵略の影響をうけ、日本では中国や北朝鮮の「脅威」に備え、軍備の増強、核兵器依存という無責任で浅はかな世論が大きくなっています。しかし戦争をしないために、官民をあげた親善交流、周到な外交、国際関係の構築などの準備が重要だ、という声はあまり聞こえません。

この映画は 1960 年代の初め、米ソの対立が大きくなった時期に、ソ連の高官が重要機密を英米に流した「スパイ事件」に基づいています。核戦争の危機を感じた時に、死の恐怖を越えて行動した二人の男がいました。

GRU（ロシア連邦軍参謀本部情報総局）の大佐であり、表向きは科学調査委員会の責任者として働いているペンコフスキーは、フルシチョフの激高しやすい性格から核戦争の可能性を感じていました。

彼はソ連の真の姿（軍拡、宇宙開発競争の裏にある市民生活、経済力）を米国に伝えることで、核戦争を防ぐことが出来ると考えました。米国大使館に接触を図り、東欧諸国を回っていた英国人ビジネスマン、ウィンの協力を得て大量の機密情報を西側に渡し続けました。

キューバ危機

この時期、ソ連はキューバに急速に接近し、そこに核兵器配備を計画します。

これを察知した米国は海上封鎖で対抗して、核戦争が現実の危機となりました。1962 年 10 月のキューバ危機です。
最終段階で、米国ケネディ大統領とソ連フルシチョフ第一書記の決断で、衝突は回避されました。これには二人の行動が影響しています。
しかしペンコフスキーの亡命計画は失敗し、二人はKGB(国家保安委員会)捉えられました。ウィンはスパイ容疑で拷問にかけられます。ペンコフスキーは処刑されました。
二人は、思想信条や損得勘定ではなく、東西冷戦の前線にいて核戦争の危機を感じ取り、心の底から家族を守りたいと思いました。
国家の利益よりも家族のために「できることをしよう」とお互いを信頼し、深い友情を交わします。
戦争を防ぐために核競争でも、軍拡でもない、別の道を実践した二人の男の物語です。「スパイ」のイメージが変わりました。

※この映画は映画サークルの 8 月例会(8 月 27 日県民会館)で上映されます。

『戦争と女の顔』 過酷な戦闘は人間をどう変えるか 憲法と映画(68) (2022.8)

つだわたる (美賀多台)

1945 年、第2次世界大戦が終わった直後のレニングラード(現サンクト・ペテルブルグ)に暮らす二人の女性を描きました。
戦争中は前線の対空砲手であったイーヤは軍病院で看護婦として働いていました。戦友のマーシャから託された子どもと二人暮らしです。しかし心身に戦争の後遺症が強く残り、発作で子供を死なせてしまいます。
マーシャも軍隊から帰ってきてイーヤと一緒に働き始めました。奇妙なことに、彼女は子どもの死に
怒りも悲しみも表しません。
病院で突然倒れたマーシャは、その時に子どもを産めない体だと判明します。そして マーシャはイ
ーヤに「私の子どもを産め」と命令しました。
病院では、全身麻痺で生きる希望をなくした兵士が安楽死を望み、院長がイーヤに頼むシーンが出てきます。これが何度もあったことも示唆されます。
マーシャはそれをネタに院長を脅し、イーヤとの性交を強要しました。イーヤは処女のようです。
マーシャのもとに若い男が訪ねてくるようになり、「結婚してほしい」と彼の実家に連れて行きました。
イーヤとマーシャの関係は非常に近しいけれども、楽しくはありません。二人とも表情と感情の起伏が乏しく、そして時折、鼻血を出して倒れたりします。心身ともに崩壊している感じです。

いったいどうなるのかと見ていましたが、ラストでは二人はともに暮らしていく予感で終わりました。
証言をもとに これは兵士や看護婦として従軍した 500 人の女性を取材して書かれたノンフィクション「戦争は女の顔をしていない」を原案に作られました。
ソ連は戦勝国ですが、ナチスドイツとの戦いで 2000 万人を超える戦死者を出します。(日本 300 万人、中国、アジア諸国 2000 万人)国土の荒廃もありますが、生き残った人々の心身に、どれほどの傷が残ったかを描いています。
戦争や戦闘シーンは一切出てきませんが、その過酷さを想像させます。

『島守の塔』 戦争の何を描くべきか 憲法と映画(69)(2022.9)

つだわたる(美賀多台)

神戸出身で最後の沖縄県官選知事となった島田叡と、彼と一緒に苦労した沖縄県警察部長の荒井退造を中心に、沖縄戦を描く映画でした。

のっぺりした印象の非常に物足りない映画でした。それはアジア太平洋戦争末期における沖縄戦について、全体像を明示せず、現代の日本人が見てわかるという描き方ではないからです。
島田知事が、悲惨な沖縄戦でいかに奮闘したか、に力点が置かれすぎです。
見たのは平日の昼間でしたが、そこそこの入りです。私同様の高齢者が多い感じで、島田叡が須磨生まれで、旧神戸二中(兵庫高校)旧三高(京大)東京帝大(東大)出身ということで親近感を持たれた方が多いのかなと思いました。
映画は、南西諸島を守備する陸軍 32 軍が沖縄に乗り込んできた時期から始まります。大日本帝国軍は 8 月HPで西元さんが触れられたように、沖縄県民を守るのではなく、国体を守るために、本土決戦に備えて、連合軍を少しでも消耗させ、時間を稼ごうと、彼らに犠牲を求めました。
そして圧倒的な軍事力で攻勢をかける連合軍に対し、32 軍は中学生、女学生も徴用し県民を悲惨な戦闘へ陥れました。
島田知事は軍の指示の下で、少しでも県民の犠牲を減らすために奮闘しています。その苦悩は大変なものと想像できました。

過去から現在へ
島田が沖縄赴任を受けた時に、家族がやめてくれと懇願します。学徒出陣、特攻隊があり高齢の補充兵も召集される情勢の下でも、政府高官の家族は、そういうことが言えたのかと思いました。普通の市民なら非国民です。

牛島満司令官は任務第一で、県民の命を顧みることがありません。「最後まで戦え」という命令を出し、自分はさっさと自決しています。この無責任を映画は追求していません。
歴史を俯瞰し、そこで島田叡がどのような役割を担ったかを描くべきでしょう。そして彼の遺体は不明ではなくて、彼も含めた沖縄戦の遺骨が眠る土砂を使って米軍基地をつくるな、を言うべきです。
過去と現在は繋がっていることを描いてほしいと思いました。

『さよならテレビ』　民放の危機的な一面を捉えた 憲法と映画(70)（2022.10）

つだわたる（美賀多台）

東海テレビが、自局のニュース番組の制作現場を撮ったドキュメンタリーです。何を撮るのか、その試行錯誤から映画は始まりました。

そしてテレビ局で働く三種類の雇用関係にある三人を撮ります。正社員のアナウンサー、契約社員のベテラン記者、もう一人は新米の派遣社員です。彼らの一年を追ってテレビ局の矛盾が描かれました。
アナウンサーは看板番組のメインキャスターに抜粋されて、がんばれ頑張れの後押しがありました。
何をどのように報道するか、そこに彼の「個性」をどう反映させるのか、さらに視聴率が取れるか等を背負っての登板です。
ベテラン記者は、ジャーナリストの矜持を持った人として、その履歴も紹介されます。この撮影当時に「共謀罪法」が国会で議論されていました。
この法案が国民的な批判を受けた時に政府は「テロ等準備罪」と呼び名を変えます。
法案の本質をごまかそうとしていると、彼は言いました。
もう一人は制作会社からの派遣社員です。彼は見るからに経験不足の素人です。「働き方改革」の残業時間削減の便法として雇われたのです。
桜の開花等の、いわゆる「街ネタ」のレポートを担当します。しかし「使えない」奴という印象で、一年後には別の放送局に移っていきました。

視聴率
3 人を追うことで「職場の矛盾」が浮かんできます。
職場見学に来た子どもたちに、テレビの役割を「事件事故を知らせる」「弱者への寄り添い」「権力の監視」と説明します。ジャーナリズムの自負です。しかし、それとはかけ離れた職場であり働き方でした。
そして時々刻々と出される視聴率、ライバル番組との比較が最大の関心事であ
ると強調されます。
若い世代のテレビ離れや、広告の減収などテレビ業界は危機的な状況があります。そして報道機関としても信頼が揺らいでいます。

皮肉な映像によって、テレビ局の内実を描きました。働く人々の矛盾は伝わってきます。しかしジャーナリズムの退廃までは触れていません。そこが残念です。
（この映画は映画サークル 11 月例会(11 月 12 日)で上映されます。）

『メイド・イン・バングラディシュ』貧困、搾取と闘う人々 憲法と映画(71)（2022.11）

つだわたる（美賀多台）

事実に基づく映画です。現代のバングラディシュ、首都ダッカで働く若い女性シムが、自分と仲間を守るために労働組合をつくろうと奮闘しました。
シムは縫製工場で働いています。14 歳の時に 40 歳の男と結婚を強制されて、実家を飛び出しました。

それほど広くない部屋で、大勢の女性、女工たちが鼻の頭に汗をかきながら懸命にミシンを踏んで、布を縫っています。冷房はなく古い扇風機が回っています。突然警報が鳴って火事を知らせます。そこで働いていた女性たちは先をこぞって逃げました。劣悪な労働環境であることが分かります。
これが映画の始まりでした。
給料もきちんと払ってくれない会社に対して、女工たちは怒ります。シムは労働者の権利を学ぶ講演会に行き、労働組合をつくることを考えました。
ここからが大変です。
法律では事業所の労働者の 3 割の同意書があれば担当官庁が労働組合を認可することになっています。しかし必要書類を提出しても、なかなか認可されません。それどころか、労働組合に同意した女工の名簿が、会社側にわたっていました。

困難の中でも
バングラディシュは、貧しい国です。この映画でも、街の様子が映し出されます。道端にゴミがまい、未舗装であちこちに水たまりがありました。
彼女たちの給料は、作っているTシャツ 2，3 枚分です。理不尽で一方的な解雇もあります。
闘う方法は労働組合です。しかし認可官庁は公正中立ではなく、会社側の味方をしていると描きます。失業中の夫は「やめろ」と言いました。彼は仕事も労働組合も辞めろというのです。
イスラム教の教えは、女性を家庭に閉じ込めようとし、ヒジャブも強要します。それは現代社会でも生きているのです。
しかしシムは組合長として表に立ちます。仲間を信じて労働組合設立に向かって突進していきました。

映画は、上手には作られていません。でも世の中を変え、国を動かす力は何処にあるのか、しっかりと描きました。

『空のない世界から』　見えない人々　憲法と映画（72）（2022.12）

つだわたる　（美賀多台）

現代の日本で、戸籍のない子どもは1万人ほどいるそうです。この映画は、無戸籍をテーマとした短いもの（67 分）でした。問題を深く掘り下げるところまではいきませんが、どのようにして無戸籍の子どもが生まれるのかは描かれています。

麻衣香は夫のDVから逃げ出しました。携帯電話を壊し、辺鄙な田舎に建つラブホテルにたどりつき、そこの住み込みで働き始めます。その時、彼女は身籠っていました。

そして月日は流れ、出生届を出していない子ども、さくらは7歳になりました。彼女はホテルの外に出してもらえず、ホテルの中で、そこで働く人たちだけを相手に遊び、テレビを見て育ちました。

それでも学校というものがあり、自分もそこに行けるものだと思って、麻衣香に「いつ学校に行けるのか」と再三聞くようになっていました。

そのラブホテルには、雇われ支配人と麻衣香と一緒に働く不法就労のアジア人青年、そして常連客の売春婦がいました。ある日、流行らない老朽化したラブホテルを取り壊すとオーナーが言いました。みんな困ります。

そんな時にさくらの存在が、外の人に知られました。

人間関係の薄さ

麻衣香はDVの夫に見つかるのが怖くて、社会的な人間関係を一切絶っています。しかも世間一般の知識を持っていないようです。この先のことを考えることも出来ません。

売春婦は元市役所職員で「戸籍のない子どもも学校に行ける」と教えました。麻衣香の事情を知ると、DVから逃げることを支援してくれる組織があることも教えます。そして、なによりも「あんたは大きな声で『助けて』というのよ」と、隠れるのではなく、役所や他人に助けを求める生き方を示唆しました。

この映画は、社会保障も知らない、社会的に無知のままで生きている人々がいると描きます。生きる権利を知らない人々、彼らは親類縁者、友人とも切り離されています。この社会は、そのような弱者に対して優しくはないのです。

これは誰の責任なのでしょう

『ある男』　自分の人生を求めて

憲法と映画(73)（2023.1）

つだわたる　（美賀多台）

平野啓一郎の傑作ミステリーを原作とした映画です。戸籍の交換をテーマとして現代社会の息苦しい断面を描きました。宮崎県の山奥で、木を切り出す作業中に「ある男」谷口大祐(窪田正孝)が事故死しました。一年後、伊香保温泉の大きな旅館の主、彼の兄が法事でやってきて、「ある男」は大祐ではないと証言します。

「ある男」は別人に成りすましていたのです。妻(安藤サクラ)は、3年 9 ヶ月、一緒に暮らした夫は誰だったのか、知り合いの弁護士(妻夫木聡)に調査を依頼しました。全く手掛かりのない中で、調査は難航しますが、弁護士の機転から「ある男」の正体がわかりました。彼は殺人犯で死刑囚の息子、原
誠でした。
映画は「殺人犯で死刑囚の息子」を背負った原誠が、自分の人生を生きることが出来なかった姿をたどります。彼はその絶望的な人生を振り払い、新たな人生を手に入れるために別人の戸籍を買ったのです。彼は二度戸籍を変えていました。それに関わった男たちも明らかにされていきますが、凶悪犯罪は絡んでいませんでした。
そして彼らの人生を知った弁護士は、彼自身が生きてきた在日 3 世としての人生、ぎこちない夫婦の関係を反芻していました。

ささやかな幸福とは

この映画は、本人に全く責任のない属性(人種、民族、出生等)によって言われない差別、迫害を受ける人間がいる、差別する側はそれほど強い悪意を持っているわけではない社会を描きました。その差別意識は無意識に刷り込まれている「常識」です。
その一方で、偏見を持たず目の前にいる人間を素直に受け入れることもできる、そんな場合も多くあります。
また愛した男の過去、素性を知ることにどんな意味があるのか、とも問いかけました。強い主張、過激な映像は全くない映画です。でも息苦しさの根底にあるものは何かを考えさせます。そして、それを脱却したささやかな幸福は、誰もが手に入れることが出来ると人間賛歌も見事に描いています。

『モリコーネ』映画の娯楽性と芸術性

憲法と映画(74)（2023.2）

つだわたる　（美賀多台）

原題は「エンニオ」というファーストネームです。邦題の副題に「映画が恋した音楽家」が付いています。まさに映画音楽の巨匠エンニオ・モリコーネの魅力と偉大さを描いたドキュメンタリーでした。
映画は彼自身の語りとその作品、そして多くの映画監督や作曲家が話すモリコーネの魅力から構成されています。
彼の魅力は、挿入された短い映像と音楽を聴いただけで映画自体を「見たい」と思わせる、その独創性です。

作ったのはジュゼッペ・トルナトーレ、傑作『ニュー・シネマ・パラダイス』の監督です。彼は自身の映画音楽のほとんどをモリコーネに依頼しています。心底からそのすばらしさを知っていたのです。
私の印象に残るのは初期の作である『荒野の用心棒』(監督セルジオ・レオーネ)です。ギターと口笛の組み合わせは斬新でC・イーストウッドの登場から引き込まれました。
マカロニウエスタンから始まり、多彩な映画の音楽を担当してきました。その数は約 500 本と言われています。しかしアカデミー作曲賞はなかなか取れず、2007 年に映画音楽への貢献を評価されてアカデミー特別賞を贈られます。その後 2016 年に 6 度目のノミネートで作曲賞を受賞するという伝説を作りました。
晩年になっても、自分のキャリアを否定するようにスタイルを切替える曲を作りました。

革新と独創

映画は映像のモンタージュ(組み合わせ)だけではなく、音楽とのモンタージュも大切です。
監督、音楽担当によっては既成の音楽を当てはめる場合もありますが、モリコーネは必ず、その映像にふさわしい音楽を創作しました。
彼の特性を表す言葉をこの映画から拾うと「映画音楽と実験音楽」「音楽で人物を表現する」「ノイズも音楽」でした。
モリコーネが映画音楽に携わった時代では、その芸術的価値は低いと見られていました。彼も何度か辞めようと思ったと言います。しかし生活音やノイズも音楽だという感性、映像や人物を把握する能力が、映画音楽を素晴らしいものに作り上げました。
タランティーノ監督は「現代のモーツアルト、ベートーヴェン、シューベルトだ」と讃え、モリコーネは「それが分かるのは 200 年先だ」と答えました。

『ラーゲリより愛をこめて』 戦争の悲劇を訴えているが

憲法と映画(75)（2023.3）

つだわたる（美賀多台）

駄作です。私がそう考える理由を書くために、あえて取り上げました。
日本がポツダム宣言を受け入れた敗戦のあとに、中国大陸、朝鮮半島等にいた兵士、民間人約 60 万人がソ連によってシベリアのラーゲリ（強制収容所）に連れ去られます。酷寒の地の強制労働で約 6 万人が死にました。それは 1956 年まで続きます。
映画は、ノンフィクション『収容所から来た遺書／辺見じゅん』を原作として、一人の兵士、山本幡男（二宮和也）に焦点を当てて、ラーゲリでの生活、労働が描かれました。
まずハルピンでの豪華な結婚式から始まりました。一家で同席した幡男は「この幸せを忘れずに」といいます。広島に原爆が落とされた後でした。
すぐにソ連軍が攻め込んできて、敗戦となりましたが、幡男は多くの兵士とともにソ連領内、奥深くに連れ去られました。食事も満足にないラーゲリで、原生林を開墾する厳しい労働がはじまりました。
まったく説明もなく、兵士たちには「なぜこんなことに」「いつ日本に帰れるのか」疑問と怒り、悲しみがまん延していました。暴力沙汰もあります。
幡男は満鉄（南満州鉄道）調査部の社員であり、特務機関に属していたことから、戦犯として他の兵士より長く収容されます。しかし彼は希望を失わずダモイ（帰国）を信じて頑張ろうと同僚を励まし続けました。
彼はがんによって、帰国はかなわず、戦後 11 年を経て同僚が彼の遺言を口伝えで家族に持ち帰りました。

理不尽の根本を問わず

映画全体として、戦争が終わった後に、長期にわたって不当な強制連行強制労働がなぜ行われたのか、説明がありません。兵士たちは不運を嘆き、哀しみはあっても怒り、自分たちをこんな目に合わせた戦争、国家に対する怒りを描きません。
主人公の幡男は中国侵略の先兵である満鉄、特務機関にいましたが、自らの役割、責任を自省しません。ですから彼の遺書には中国への侵略や戦争の是非を問う言葉がありません。
ただラーゲリと言う地獄にあっても道義と誠意が大事と説くだけです。
再び軍事大国への道へ踏み出そうとする現在の日本で、敗戦直後の悲劇を描く理由はなにか、それは二度と戦争をしてはならない、という敗戦直後の日本人の多くの気持ちを蘇らせるもの、と思います。
悲惨な現状は描くだけでなく、その根源に迫るべきです。

『妖怪の孫』情けない思いで見ていた

憲法と映画(76)（2023.4）

つだわたる(美賀多台)

タイトルの「妖怪」は岸信介のことです。日米開戦時の東條内閣の重要閣僚であり、戦後はA級戦犯容疑者となります。その後、総理大臣となって 60 年安保を強行して辞職します。九条改憲など自主憲法制定を訴え、CIAの資金援助を受けて政治活動し、統一協会とも深い関係がありました。

映画は、その「孫」の昨年の参議院選挙中に暴漢に襲われて死去した安倍晋三元総理大臣を中心的に描くドキュメンタリーです。

新し事柄を描いているわけでもありません。彼の生い立ちや政治家としての経歴もありますが、主には第2次政権(2012～2020 年)時代です。

アベ政治が、どれだけ酷かったのかを映像で追っていきました。特に彼の中心的な経済政策アベノミクスは、国民生活の疲弊と経済力の低下を招いたと、具体的な数字で示します。

太陽光や風力発電などの再生可能エネルギーは、かつて世界的なシェアであったものが急激に落ちています。また日本の主要産業である自動車は、世界的な趨勢となっている電気自動車で全く遅れています。

一人当たりのGDPは 12 年 14 位から 21 年 27 位に落ちています。岸田首相自身がアベノミクスは失敗だったと言う映像もありました。

国民に何が受けたか

「もりかけさくら」問題では国会で平気で嘘をつくなど、酷い映像もあります。現役官僚が官邸の強い圧力を受けていること、マスメディアに対しても圧力と懐柔の両面を使って利用していることも映し出されます。

アベ政治の影響で、社会全体が分断されているというアニメも挿入されています。見ていて一番悔しく情けなく思ったのは、この間の国政選挙で彼が連戦連勝であったことです。小選挙区という制約もあり、野党共闘も機能しません。投票率が低く国民の政治的無関心が大きくなっています。マスメディアの批判も弱くなっています。

学生時代の安倍晋三の評価は「要領がいい」です。この映画でも、彼は国民に「やってる感」を見せることが大事だといいます。それに乗せられたのでしょうか。

現在も改憲勢力は衆参議員で 2／3 を上回っていますが、長年、自民党ブレーンであった憲法学者の小林節氏は「自民党の憲法観は戦前回帰」といっています。危険です。

ナレーター古舘寛治のかすれた声が、空しく響きました。

『PLAN75』希望が見えない社会

憲法と映画(77)（2023.5）

つだわたる（美賀多台）

2022年6月に公開された映画で、だいぶ遅れてみました。監督・脚本の早川千絵さんは自己責任と不寛容な現代日本に対して問題提起し、生きることを全肯定する思いでつくった、と言います。

高齢化がさらに進んだ日本です。75 歳以上の人間に安楽死の「権利」を与える法制度「PLAN75」がつくられた社会で、そこに生きる人々が、どのような思いを抱えているのかを描きました。

まず高齢者たち、そして「PLAN75」に係わる若者たち、そして彼らから少し離れた外国人労働者、彼らが多少絡み合いながらも、無関係に生きています。

苦しい高齢者

若者が高齢者を「社会の邪魔もの」として攻撃し、社会的負担も増えたから「安楽死」の制度が出来た、とテレビが解説しました。

夫と死別し、子どもいない78歳の角谷ミチ（倍賞千恵子）はホテルの清掃員として働いています。なぜ働くかは明示されませんが、彼女は自営業であったために年金が少なく、まだ元気だからと思いました。

ある日、仕事中に彼女の同僚が倒れました。ホテルはイメージが悪くなるのを恐れて、高齢の従業員たちの首を切ります。

安定した職場、収入を失った角谷ミチは「PLAN75」に惹かれていきました。

「PLAN75」に従事する若者達の矛盾した思いも描かれています。外国人労働者が高い賃金に惹かれて、それに関わる汚れ仕事をします。

どこを、何を変えるのか

早川さんの意図は、伝わってくるのですが、見ていて不満がつのりました。それはこの法律が成立する社会を、どう変えるのか、そこが不明確だと思ったのです。

若年層の意見だけでこういう法律が成立するとは思いません。投票率の高い高齢者層の支持があったとみるべきです。それは高齢者の中に、安楽な余生を送る者と、負担をかける者の分断があったと、私は見ました。

ですから、この映画は現在の日本社会の痛烈な批判です。高齢化と貧困化、そして社会的分断の誇張です。

さらに死ぬ権利である「PLAN75」は行政が丁寧に対応しますが、生きる権利「生活保護」はかなり手抜きの対応と批判しています。
ミチは「PLAN75」の施設から逃げ出して、生きる道を選ぶ、そこで映画は終わりました。
しかし明日、何かが変わるとは言えないのです。

『ハマのドン』久々の快挙を描いた

憲法と映画(78)(2023.6)

つだわたる(美賀多台)

横浜港湾業界の中心に座り、長年にわたり自民党を支援してきた「ハマのドン」と呼ばれる藤木幸夫(1930年生まれ)、彼が「横浜港にカジノは作らせない」と、政府自民党に対し、正面から反対する態度を表明し、カジノ反対の市民とともに選挙戦を闘う姿、その彼の信条を追うドキュメンタリーでした。
最初、藤木さんはカジノ賛成でした。横浜が活性化すると思ったのです。しかしカジノの本質、博奕が人間を狂わせ、人々の生活を破壊することを知り反対に回ります。
自民党や当時の横浜市長、林文子に誘致を辞めるように言います。しかし逆に藤木さんに圧力がかかりました。
2021年、コロナ禍の横浜市長選挙で、彼はカジノ誘致撤回を掲げる山中竹春の陣営の代表に座ります。自民党は菅首相(当時)の側近である小此木八郎が、大臣を辞任して、しかも「カジノ中止」を明言して立候補します。自公政権は総力を挙げた選挙戦を展開しました。
「ハマのドン」は自民党とのこれまでの関係を振り捨てて「博奕はダメ」「横浜の未来のために」と、住民投票を求める市民19万筆の署名を信じ、菅首相に喧嘩を売ったのです。そして見事に勝ちました。
菅首相はこの選挙のあと退陣します。なんとも胸のすく快挙でした。
映画は、戦後の藤木さんの歩みも挿入します。自由にモノが言えなかった戦前から自由と民主主義の時代への変化、勉強し自分の頭で考えることが大事と仲間を集めます。そして結党直後の自民党にも入党、父親がつくった港湾荷役の会社を引き継ぎ「ハマのドン」の地位を築きました。
この選挙のあとでも自民党が彼を除名したという記事は知りません。

掘り込みが足りない

見ていて気付くのですが、なぜこの人が長年自民党を応援してきたのかという疑問です。横浜港を愛し港湾労働者の幸せを願ったという藤木さんと労働者、労働組合の関係はどうなのか、そういったことを描きません。
少なからず葛藤と対立があったはずです。

藤木さんは「今の自民党は最低だ」と言いますが、私は以前から最低だと思っていました。とりわけ安倍政権はカジノ以前から平気で嘘を垂れ流し、国民を騙してきました。これを藤木さんどう見ていたか、突っ込んだ映像はありません。
90歳を超え、何も怖いものがない男に聞きにくいこと言いにくいことを突っ込むのがドキュメンタリーの値打ちです。

『怪物』現代の恐ろしさ描いた

憲法と映画(79)（2023.7）

つだわたる(美賀多台)

カンヌ映画祭で高い評価を得た是枝裕和監督(脚本:坂元裕二)の最新作です。同じ出来事の経過を 3 つの視点で、繰り返し描くという手法をとった映画でした。
まず親の視点です。
シングルマザー(安藤サクラ)は、わが子が先生にいじめを受けている、と思い込み、説明を求めようと小学校に行きます。学校側は校長(田中裕子)や担任が対応しますが、しらじらしく機械的に謝罪の言葉を繰り返すだけで、彼女に納得いく説明をしません。
二つ目は教師(永山瑛太)の視点です。
教室で暴れる子どもたちを抑えようとして、誤って一人の顔に拳が当たりが鼻血を出してしまいます。担任の教師は、子どもたちの様子からいじめがあると感じました。
鼻血を出した子どもの母親が抗議に来ると聞いて、彼女をモンスターペアレントと見なす校長たちは、担任に「何も言わずに謝れ」と言います。
そして第 3 の視点は子ども達(黒川想矢、柊陽太)です。
教室ではいじめっ子といじめられっ子の関係に見える二人は、本当は心通わす友達でした。彼らは面白がって、それを演じていたのです。しかも二人は、家庭でそれぞれの事情も抱えていました。親や教師をあまり信頼していません。

恐ろしい現実

面白半分の子どものいたずらように見えますが、教師は「体罰教師」として糾弾され辞職に追い込まれました。彼に対する風評はマスメディアやSNS等で拡散するでしょう。
誰にも大きな悪意はなく、ただ真面目な若い教師が誤解されて首になっただけです。責任を取る者もなく、教師の失意だけが残りました。
しかも子どもたちの本当の姿を理解しようとする大人が現れる、という終わり方でもありません。

監視社会であり、管理する側は個人情報も収集集積しようとしていますが、それぞれの都合であり、事実の断片です。信頼を失った人間関係と、面白半分の風評の恐ろしさを感じる映画でした。
よく練られた脚本であり演出ですが、タイトル『怪物』の意味は明示されません。
子ども二人が遊ぶゲーム「怪物だれーだ」と問いかける言葉が残りました。

『世界のはしっこ、ちいさな教室』教育は本当に大事

憲法と映画(80)(2023.8)

つだわたる(美賀多台)

西アフリカの小さな内陸国ブルキナファソ、南アジアのバングラデシュ、ロシアのシベリアで生きる少数民族エヴェンキ族を描くドキュメンタリーです。
それぞれの国の詳しい事情は描かれません。辺境にある小学校の教室で奮闘する教師と子どもたちの日常に焦点を絞っています。でもその限られた映像から、他の状況も推し量る事もできます。

貧しさとは何だろう

ブルキナファソは 60 以上の部族で構成された国で多様な言語があります。公用語はフランス語で、識字率をあげることを重要課題にしています。教師は、現地の言葉が分からない中で、5～60 人の子どもたちにフランス語の読み書きを教えています。
ここは最貧国の一つで、僻地では教室も整っていません。
バングラデシュも貧しい国です。しかも低湿地の洪水多発地帯がおおく、そこでは船の教室です。この国の大きな問題は、女の子は教育よりも早く結婚して支度金を稼ぐ事を求められる習慣です。法律では結婚は 18 歳以上と決められていますが、実態は 18 歳未満で 6 割、14 歳未満でも 2 割が結婚します。
教師は女子を進学させるように母親を説得します。自立した女性には教育が必要です。エヴェンキ族は極寒のシベリア森林地帯で、トナカイを遊牧しながら家族単位で暮らしています。
教師は教室となるテントや教育道具をそりに積み込み、彼らのキャンプ地を回って 10 日間の授業を行います。ロシア語に加えてエヴェンキ族の言葉と文化を伝え守りたいと思っています。

奮闘は実るのか

この映画に登場する教師たちは女性です。あまりにも厳しい自然環境と財政状況の中で、奮闘する彼女たちの情熱が描かれます。

どこまで本当か、あるいは彼女たちの奮闘は、事態を変えることが出来るのか、疑問も残ります。
しかし半年、一年たった子どもの成長を見ると、一人一人の可能性が感じられます。それが未来を拓くと映画は強く訴えました。
愚かなロシアの侵略戦争は続いています。世界中の軍事費が教育費に回ると、人間の未来は間違いなく明るくなります。人類は、なぜそれに気づかないのか、怒りを覚えました。

『教育と愛国』 戦争は教室から始まる、といいます

憲法と映画(81)（2023.9）

つだわたる（美賀多台）

先月に続いて教育にかかわるドキュメンタリーですが、内容は正反対でした。
『世界のはしっこ、小さな教室』は教師の情熱が描かれましたが、この映画には教師と教育を圧し潰そうとする日本の現実がありました。
これは昨年に公開されたものですが、軍事費を 2 倍にして軍事大国になろうとする現在の岸田政権にいたる政治と社会の変化、この十数年ほどの教育現場の危機を描いたものでした。

中学や高校の歴史教科書に焦点を当てて、アジア太平洋戦争における日本軍の加害(従軍慰安婦や、南京大虐殺など)や沖縄戦の実態等の記述を大きく歪め、さまざまな形で教育に介入していく歴史修正主義勢力、権力の実態が描かれていました。
なによりも憲法や以前の教育基本法が禁じてきた政治や権力者の教育への介入が、現在では露骨なほどに行われていました。

教育現場は歪められた

最初に出てくるのは道徳の教科書でした。朝の挨拶の仕方が書かれてあります。
「おはようございます」は言ってから頭を下げるのか、頭を下げながら言うのかが、問われていました。馬鹿馬鹿しいですが、第 1 次安倍内閣の時に教育基本法が改悪され、道徳の授業がつくられました。
こんな挨拶の仕方よりも「人間と嘘」を題材として、国会での嘘答弁は道徳的にどう考えるのか、を取り上げてほしいものだと思いました。

歴史教科書については、加害責任を修正させようとする急先鋒の「新しい歴史教科書をつくる会」や日本会議等が、安倍政権の下で教科書会社と教育現場に圧力を掛けました。
それまで東京都 23 区の学校で採用される等、現場の信頼の厚かった大手出版社は、修正に応じなかったために、採用が激減して、ついには倒産しました。
歴史修正主義の重鎮である歴史学者、伊藤隆（東大名誉教授）は「歴史に学ぶ必要がない」と言います。従軍慰安婦や沖縄戦を授業として取り上げた大阪の教師には、教育委員会内外からものすごい圧力、批判があることが描かれます。維新の吉村知事や松井市長も露骨に介入しました。

教育は社会の根本

タイトルは「教育と愛国」ですが、日本の文化や伝統、国を愛することが問われるものではありません。愛国を装った政治的圧力です。
「政治的中立」の強要は、若い教師に「選挙に行っていいのか」と言わせるほどひどいといいます。10 代の有権者の投票率が非常に低く、若い層で現政権支持が多いというのも、その影響です。
教育の目的を「国や権力者に従う人間をつくる」にしようとしている、本気でその危惧を感じさせる映画でした。

『こんにちは、母さん』サユリ賛歌の映画

憲法と映画（82）（2023.10）

つだわたる（美賀多台）

若い時から山田洋次監督の映画は見続けてきました。『男はつらいよ』シリーズは映画館で全て見ています。神戸を舞台にした『吹けば飛ぶよな男だが』も好きですし『幸福の黄色いハンカチ』は生涯のベストスリーに挙げています。
喜劇だけではなく『学校』シリーズや『家族』『故郷』等では市井の人々の生活や人生を描きながら鋭い社会批判が盛り込まれていました。
国際的な評価では黒澤明監督が高いかもしれませんが、私にとっては最高の映画監督です。ぼそぼそと話す彼の講演も何度も聞いていて、映画に対する思いや、世の中や人間の見方など共感しています。
温かい人間観察と冷静な社会批判があると思います。
しかし最近の作品は首をかしげるものが多くなっていました。
90 才を越えて作ったこの映画は、どうかなと思いながら見ました。

母と息子

大企業の人事部長を務める昭夫(大泉洋)は、久しぶりに東京の下町の実家で一人で暮らす母、福江(吉永小百合)を訪ねます。彼女は、楽しそうに近所の人たちとホームレスを支援するボランティア活動をしていました。しかも彼女と同年代の牧師に恋しているのです。
会社では人員整理の矢面に立ち、家庭は妻と別居中で離婚の危機という昭夫は、しばらく会っていない母のもとで、心休めようと思ったでしょうが、その変わりように戸惑いました。昭夫の娘も妻の家を出てきます。
映画の結末は、母の恋は失恋に終わり、昭夫は友人を救うために、自らが会社を辞める選択をし、妻とは離婚しました。そして実家で母と娘と一緒に暮らすという、見方によればハッピーエンドとなりました。

緩さばかり

ものすごく緩い映画でした。昭夫の会社がどんな事業をしているのか不明で、離婚の原因もわかりにくいものです。昭夫の心情に踏み込みません。
エリート社員の辛さと対照的な、老いてなお可愛い母の恋や、下町の人情がユーモラスに描かれる人情劇でした。
東京大空襲の傷跡は見せますが、軍事大国に舵を切った日本の現実は見当たりません。息を吐き、まあいいかと思いました。

『福田村事件』過去を描き、現代を照射する

憲法と映画(83)(2023.11)

つだわたる(美賀多台)

びっくりしたのは、映画の内容より、この映画を見る人が多いということです。公開当初は小さい元町映画館が一杯だと聞き、2週間ほど後にシネリーブルで見ました。この時も半分程度の入りでした。
実際にあった陰惨な事件の映画と分かっているのに、関心が高いということで、ちょっとうれしくなりました。
関東大震災から 100 年であり、自公政権や小池都知事が朝鮮人虐殺の事実を意図的に隠そうとしている一方で、それに反発したマスメディアがこの映画をより多く紹介したということもあったようです。

フィクションが告発する

映画の中心は福田村の虐殺事件ですが、朝鮮人たちや社会主義者が殺されていること、日本の朝鮮支配の残酷さにも触れています。さらに村の男女の絡みあいまでも出てくるので「ちょっと盛り過ぎ」と思います。
映画は震災前の福田村、在郷軍人会の存在の大きさ、村人の日常生活等から描きます。地元紙の新聞記者は、社会主義者や朝鮮人に対するデマが広がっている、と危惧し憤慨しています。
讃岐の行商人たちは被差別部落出身で、かなりいい加減な薬を売っているとまで描きます。震災後の東京都下では、官憲が社会主義者を無理やり逮捕し、朝鮮人が放火や暴力行為をしているというデマを、意図的に広げ煽っていたと描きました。それを自警団と多くの日本人が信じ込んで、朝鮮人と見れば無差別に虐殺しました。
村人が行商人たちを殺すシーンは、誇張しすぎの感じがあります。しかし当時、日本にいた朝鮮人は 8 万人に過ぎず、その内 5～6 千人が殺されたことから、社会全体が異常であったことがわかります。
福田村は埼玉県の東側、千葉県の西端にある、今の野田市です。彼らが朝鮮人をどれほど知っていたのか、わかりませんが、伝播してきたデマを信じ込み、人殺しまで行く心理こそが恐ろしいと思いました。

現代に問いかける

この虐殺を目の当たりにした新聞記者は、自分が「デマをデマと書かなかったからだ」と言いました。この映画の焦点はここだと思いました。森監督は、これまでも現代のマスメディアが支配層に忖度して事実の報道をしないことに危惧しています。東京新聞の望月衣塑子記者を追った『i－新聞記者ドキュメント－』でもそれを描きました。
デマを黙認し、事実を報じないマスメディアは、殺人に加担するとまで言っているようです。
現在のパレスチナに通じます。

『ぼくは君たちを憎まないことにした』 憎悪の連鎖を止める

憲法と映画(84)（2023.12）　つだわたる(美賀多台)

2015 年 11 月 13 日に起きたパリ同時多発テロ、郊外のスタジアムや市街地の飲食店、そしてコンサートホール、バタクランにテロリスト集団が爆弾を投げ込み、自動小銃を乱射します。130 人の死者、300 人以上の負傷者が出ました。

この時に、ジャーナリストのアントワーヌ・レリスの妻エレーヌは、バタクランで殺害されています。アントワーヌは妻の死を確認した直後に、犯人グループに対し「君たちに憎しみを贈らない」というメッセージをSNSにあげました。それが大反響を呼んだのです。

後に、彼は妻の死からの 2 週間、自らの体験や思いを綴ります。それを原作として作られた映画です。愛する者を奪われた人間の苦しみ、悲しみそして怒りがよくわかる映画でした。しかもそれを耐え忍んで、敵を憎まない、自分の生き方を貫きたいという強い意志と、弱い人間としての苦悩も伝わってきました。それをメッセージにしました。

平凡だが愛に満ちた生活

映画は、アントワーヌと妻エレーヌ、幼子のメルヴィルの生活をていねいに描きます。都心のアパートメントの部屋、愛情豊かで、多少のいざこざを抱えた平凡な生活です。

それが一転して恐怖の街に変わります。エレーヌとの連絡が取れないアントワーヌの苛立ちが描かれますが、映画はテロの現場や殺戮はいっさい見せません。テロリスト集団が誰かさえも、明示しません。

そして彼の「君たちに憎しみを贈らない」とメッセージは一晩で 20 万もシェアされました。それを読んだ多くの人が賛同します。テレビや新聞等のマスメディアも大きく取り上げ、彼は英雄のように扱われました。
しかしアントワーヌとメルヴィルの生活は、エレーヌを失った悲しみで一杯です。それが十二分に伝わりました。

敵を憎まない

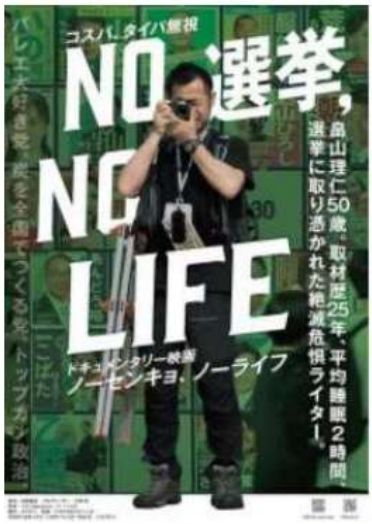
アントワーヌはエレーヌを失った悲しみと苦しみを噛みしめても、誰かを憎むことを明確に拒否します。テロリストを詮索もしません。ただこの悲しみをメルヴィルと一緒に乗り越えようとする姿だけが描かれました。

それが彼の生き方だと映画は明確に示しました。私は深く共感したのです。

『NO 選挙, NO LIFE』『シン・ちむどんどん』選挙の表と裏

憲法と映画(85)（2024.1）

つだわたる(美賀多台)



選挙を追うドキュメンタリー2 本の紹介です。

『NO 選挙』は、国内外や国政、地方などの選挙(主には候補者の活動)を 25 年追い続けて きたフリーのジャーナリスト畠山理仁の取材スタイルを追いかけるドキュ メンタリ―です。

2022 年の参議院の東京選挙区選挙とその年の沖縄県知事選挙が舞 台です。

『シン・ちむ……』は、その同じ沖縄県知事選挙を、ラッパーのダーグ レスターと時事芸人のプチ鹿島が、3 人の候補者、立会演説会、支援者 などに取材するドキュメンタリーです。 選挙は民主主義の有効な手段ですが、現在の選挙制度では国民の意 思が反映されているのか疑問です。投票率が低いのは国民の問題では なく、行っても行かなくても同じという雰囲気、学校での主権者教育が ないためだと思っています。

この 2 本は選挙をちょっと違う切り口で見せました。

選挙を利用する

参議院東京選挙区定数6に 34 人が立候補しました。畠山はすべての候補者に直接取材する 姿勢で、一人一人の主張と素顔を見せていきます。300 万円の供託金没収覚悟で、自分の言 いたいことを訴える人たちは「変」な人が多かったです。

「バレエ大好き党」「議席を減らす党」「沖縄の米軍基地を東京に引き取る 党」等がありました。NHK党が 5 人も候補者をたてているのが驚きです。で も比例区得票率2%を超えて、政党助成金 3 億 3 千万円貰っています。

米軍基地問題の本質

この 2 本の映画は、22 年の沖縄県知事選挙を撮りました。米軍の辺野古 新基地建設の是非が焦点であり、それに反対を表明している現職の玉城デ ニー知事が当選します。

3 人の候補者の主張を公平に撮りますが、選挙戦では米軍基地がどれほ ど市民生活を圧迫し歪めているかはわかりません。だが自公推薦の候補者を 応援しているのは、建設業界であることが、演説会等ではっきり見えます。

『シン・ちむどんどん』は、選挙とは別に沖縄の米軍基地の酷い実態を取材しました。 そして選挙の後で2チャンネルの創

設者「ひろゆき」が辺野古を訪れ、反対運動を冷笑するツ ィートを流し、それに 27 万人が「いいね」をしたことを紹介します。
ここに沖縄の困難はあります。無意識に基地問題を「沖縄の問題」にすり替えているのです。

『モロッコ、彼女たちの朝』 世界を変える一歩

憲法と映画(86)（2024. 2）

つだわたる(美賀多台)

原題は「アダム」です。キリスト教ユダヤ教イスラム教に共通する「最初の人間」の名前で、この映画ではとても深い意味を持っています。
映画は 臨月の大きなおなかを抱えた女性サミアが、仕事と寝泊まりする場所を探して街をさすらっているシーンから始まりました。美容師だったようですが、美容院で断られ、普通の民家を訪ねて、家政婦として働くといいますが断られ続けます。
夜になって、どうしようもなく街の片隅で荷物を抱えてうずくまっています。そこへ、最初は断っていたパン屋の女主人アブラが「うちで寝ろ」と連れ帰ります。
アブラは夫に先立たれ、一人で娘を育てていました。パン屋でサミアはアブラの親戚ということで働きます。店は活気づき、娘にもアブラにも打ち解けます。
そしてサミアは赤ん坊を産みました。しかし結婚していない彼女はこの子は養子に出すと決めています。だから抱くこともせず授乳も拒みます。名前も付けようとしません。
モロッコでは婚外性交渉や中絶は犯罪で、婚外子を生んだ母子は辛い人生を送らねばならないのです。
映画は泣き続ける赤ん坊と膝を抱えるサミアを交互に撮り、やがて彼女は赤ん坊に乳房を含ませます。その心情の変化を見事に表現しました。

名前はアダム

サミアは赤ん坊をすぐに施設に持って行き、自分は故郷に帰って新しい人生を歩むつもりでした。それが二人にとっての幸せだと思い込んでいました。しかし「アダム」という名前を付け、そして翌朝早くアブラたちが寝ている間に赤ん坊を抱えて家を出ました。
映画はそこで終わります。彼女はどこに行くのか、何を考えてるのか示しませんでした。
アブラと一緒に暮らし、困難を乗り越えればいいのに、と思います。しかしサミアにその選択をさせないモロッコの現実、私たちの思いよりもはるかに厳しいものがあると感じさせます。

映画製作の意図「この現実を変えたい」は十分に伝わってくる映画です。イスラム社会、特に生活や政治の中にその教義を持ち込んでいる国では女性の人権は認められていません。
どうすればいいのか、それは示さず「アダム」という名前だけ残す映画でした。

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』 反戦映画を考えた。

憲法と映画(87)（2024.3）

つだわたる（美賀多台）

決して戦争や特攻を美化している映画ではないですが、戦争批判映画としては物足りないし、戦前の日本を描く映画としても粗雑です。原作も含めて、特に若い年齢層に受け入れられていると聞きますから、私の感想を書きます。

物語は、現代の女子高生が敗戦間際の日本に 3 週間ほどタイムスリップする話です。彼女は、死を覚悟して特攻隊に志願し訓練を受けている若者たちと触れ合い、一人に淡い恋心を抱きます。そして彼らは戦場へ飛び立ち、彼女は現代に帰ってきました。

彼女は母子家庭で、現在の暮らしに不満を持ち、母に反発しています。未来に対しても希望を持っていません。それが理不尽な特攻、戦時下の生活、悲惨な空襲などを体験し、現代に帰ってきて、平和な世や母のありがたさがわかります。そして教師になりたいという目標も持ちました。

戦争に反対するために

高畑勲監督は自作『火垂るの墓』や『この世界の片隅に』を評して「戦争を防ぐことはできない」と言います。「庶民が悲惨な目にあった」と描く映画では、戦争に反対する力にならず「国民がそうならないために強力な軍隊が必要」の論を打ち破れない、と指摘しました。

この映画は、特攻兵士がもう一人の主人公です。『永遠の0』のような欺瞞はありませんが、大日本帝国陸軍の本質は描きません。和気あいあいであり、他人に自分の弱みを見せたりしています。不合理な暴力もありません。

戦時下を思わせるシーンはわずかです。「日本は負ける」という彼女の言葉を聞きとがめる警官が出てくるだけで、いやらしい隣組など出てきません。

私が駄目だと思ったのは、わずかでも実際の戦争を体験した彼女の描き方です。現代に帰ってきて、自分と同世代の若者を死地に追いやる戦争、それはどんな戦争だったのか、あるいは平和憲法の存在、現在の世界にある戦争等に関心も持たないということです。

愛する人を奪われる悲しみや、思ったことが言えない不合理を感じて「現代は平和でよかった」ではなく、彼女が現代の矛盾に気づく映画であってほしいと思いました。

『戦雲』「二度と戦場にしない」闘いは続き

憲法と映画(88)（2024.4）

つだわたる（美賀多台）

アジア太平洋戦争の沖縄戦の実態を描いた『沖縄スパイ戦史』の三上智恵監督の最新作で、この映画が描くのは現代です。国境線にある南西諸島の全島を軍事基地にするかのような、日本の防衛政策の急展開を描くドキュメンタリーでした。
本土の私たちが無関心でいるうちに、沖縄県には米軍の辺野古新基地建設だけでなく自衛隊のミサイル基地、大規模な弾薬庫などが増設され、一般的な空港や港も軍事利用ができるようになってきました。
祖先が守ってきた小さな島に住み続けたいと願う住民たちの様々な思い、そして決して小さくはない反対運動を描きながら、国家権力は、それらを踏みつぶし、なぜ与那国島、石垣島に自衛隊を増強するのか、日本の防衛政策の変化を問うています。
そこには戦争を放棄した憲法九条はありません。
沖縄戦を体験し、家族を殺された山里節子さん(「いのちと暮らしを守るオバーたちの会」会長)は、戦争に絶対反対です。軍隊が来れば、そこは戦場になってしまう、二度と戦場にしてはならないという強い思いを込めた、彼女の歌が流れます。

憲法はどこに

沖縄県知事選挙では、辺野古新基地建設に反対する意見は多数派です。しかし国家権力は、その声をまったく聞こうとしません。司法も地方自治よりも基地建設を強行する国の代執行を認めました。

その一方で、沖縄県下の個別の市町村は米軍基地問題や自衛隊の増強に対する対応は様々です。この映画でも、与那国町長は北朝鮮のミサイルを恐れ「自衛隊はいてもらわないと困る」という意見です。

映画『戦雲-いくさふむ-』公式サイトより

石垣島でも、自衛隊の配備の是非を問う住民投票条例を求める署名を集めましたが、市議会も市長もこれを否定しました。

軍隊は住民を守らない、という経験をした沖縄の強い抵抗を、「台湾有事」を煽り、軍事力で国を守る方向に抑え込もうとしています。「戦争になれば逃げられない」という声を聞きながら、過疎の地域に経済の活性化という人参をぶら下げます。

国内外を含めて、多くの観光客を集める沖縄ですが、軍事化が進められる、別の顔を紹介しました。

『オッペンハイマー』　核兵器の残酷さを世界へ

憲法と映画(89)（2024.5）

つだわたる（美賀多台）

3時間を超える大作です。「原爆の父」と呼ばれる天才的物理学者のロバート・オッペンハイマーの生涯を描く伝記映画でした。

映画は、戦中の原爆開発を進める時期と、戦後に彼がスパイとして査問される時期を交錯するように作られ、しかも関係する人が大変多いために、ちょっとわかりにくくなっています。

第2次世界大戦、ナチスドイツが欧州を席巻していた時期、彼らが原爆をつくろうとしていることを察知した米国は、なんとしてもナチスよりも早く原爆開発しようと1942年マンハッタン計画を推し進めました。

その科学者のリーダーとしてオッペンハイマーが選ばれます。彼は理論物理学の研究者として高い評価を得ていましたが、米国共産党の集会に出るなど左翼的な思想の持ち主です。それは承知の人選でした。

オッペンハイマーは、43年にニューメキシコ州の荒野ロスアラモスに巨大な町を造り、研究所を創立します。米国や連合国から優秀な科学者を集めて開発を推し進めました。

1945年5月にドイツが降伏したのち、7月にトリニティ実験を行い、その完成を確認しました。

原爆は広島、長崎に投下され、オッペンハイマーは「原爆の父」と褒めたたえられます。
しかし彼は「私の手は血塗られている」とトルーマン大統領に訴え、戦後は水爆開発に反対する行動にでました。
そしてオッペンハイマーはスパイの容疑で査問にかけられます。彼の目の前で、近しい人々がさまざまな証言をしていきました。

核兵器廃絶をもっと強く

米国アカデミー賞を初め、世界の映画賞を受賞しているように、傑作映画です。オッペンハイマーの人柄の描写や人生の毀誉褒貶、米国政治の汚点である赤狩りの本質にも迫っていました。
しかし現在の核兵器廃絶の運動を、米国世論や世界各国に強く訴え、核保有国の国民感情や情勢を変えるものか、と言えば「弱い」と思いました。
原爆の威力を、その実験風景によって描き、オッペンハイマー自身や科学者の言葉で、恐ろしさを表現しています。しかし映像がありません。人間の上で爆発させた悲惨な現実、広島長崎の街や被爆者の姿を見せません。
「原爆は戦争を終わらせ、米兵の命を救った」と信じている多くの米国民には、これが限界かもしれません。映画は少なくともそれは否定しています。
しかし世界で上映される映画に、日本人の多くが知っている被爆者の映像を出してほしい、と思いました。それがウクライナ、中東で高まっている核兵器使用の危機を防ぐ力になります。

『ダーク・ウォーターズ 巨大企業が恐れた男』公害は予防が大事

憲法と映画(90)（2024.6）

つだわたる（美賀多台）

現在、明石川流域で、大きな問題になっている PFAS を扱った映画です。映画サークルの 5 月例会で多くの人に見ていただきました。
米国の世界的な多国籍化学薬品企業デュポン社が引き起こした環境汚染、健康被害に対し、20 年もの歳月をかけて裁判で勝ったという実話に基づきます。
1998 年オハイオ州シンシナティにある大手弁護士事務所に勤めるロブのもとに、田舎の祖母の知り合いだという農場経営の粗野な男テナントが訪ねてきます。
テナントは、自分の農場の牛の様子がおかしい、次々に死んでいく、隣に立つ工場の廃液のためだから、訴えてくれと頼みます。

ロブは本来、企業側に立つ弁護士で、いったんは断りますが、農場があるウェストバージニア州を訪ねました。そこには荒廃した河川や農場、牛の悲惨な状況がありました。
ロブは訴訟を起こしデュポン社に関連資料を要求しました。大きな部屋が一杯になる膨大な資料が届きます。
ロブは汚染物質の正体を明らかにします。工場の従業員にも被害もあり、デュポン社は PFAS の危険性を知っていながら 40 年以上も垂れ流していたのです。
人体などに有害であるという蓋然性が科学的に明らかにされても、デュポン社は和解に応じませんでした。裁判を長引かせました。

裁判で勝っても

この映画は PFAS の危険性だけでなく、多くのことを明らかにしました。
何よりも裁判に勝っても死んだ人は生き返らず、健康も取り戻せません。環境も破壊されます。公害は予防が大事です。
監督官庁は住民の立場、社会的弱者を守るために動かないという批判が見えます。
そして大企業は法的規制がなければ有害物質でも儲けのために売り続けます。テフロンの売り上げは 10 億ドル／年ですが、補償はわずか数億ドルです。
トップは責任を逃れようと画策します。しかし研究者はきちんとしたデータをすべて残していたのです。裁判にすべて出しました。
マスメディアは中立的な報道をしています。独自調査をしたとは描きません。住民は金で動くことも隠しません。企業城下町の怖さもありました。
さらに同じ弁護士でも、大企業の側と弱者の側に立つ弁護士の違いも見せます。ロブは心身をすり減らし家庭を顧みず闘いました。彼は高い報酬を得る仕事も知っていたのですが、最後まで挫けませんでした。素晴らしい弁護士魂を感じます。
おもわず大手サラ金の弁護士であった大阪の二人、政治家となって弱い者いじめの好きな男たちと比べてしまいました。

『罪深き少年たち』正面から警察の犯罪を描く

憲法と映画(91)（2024. 7）

つだわたる （美賀多台）

実際にあった冤罪事件をもとにした映画です。
1999年韓国の全羅北道で発生した強盗殺人事件で少年3人が捕まりますが、それは警察、検察によってつくられた冤罪事件でした。
3人の少年たちは刑期を終えた後で再審請求をし、16年を経た裁判で警察、検察の証拠捏造などが明らかになり、無罪となりました。

事件の概要

深夜、田舎の小さな商店に強盗が押し入り、金品が盗まれるとともに、寝ていた70歳の老女が殺害されました。数日後、些細な前科を持っていた3人の少年が逮捕されて、そのまま彼らは自供して検察に送検されました。担当した刑事たちは昇進しました。
その翌年「狂犬」とあだ名される刑事ジュンチョルが赴任します。彼のもとに「真犯人は別にいる」という密告電話が入りました。
ジュンチュルが独自に再捜査をすると、物証もなく、自供だけしかないことに気づきます。それも辻褄が合いません。少年たちは真犯人ではないと確信しました。彼らは刑事たちの拷問に脅されて自供していたのです。
ジュンチュルは真犯人と思しき3人にたどりつき、検事に訴えます。しかし逆に警察、検察幹部の罠にはまって、ジュンチュルの捜査は過ちとされました。彼は辺境の勤務地に飛ばされます。
十数年を経て、定年間際になったジュンチュルはお情けで、元の警察署に戻されました。
そこへ少年たちの再審請求する弁護士がやってきます。殺された老女の娘も自分の誤った証言で無実の少年を犯人にしてしまったと、ジュンチュルに再捜査の協力を求めました。
しばらく逡巡したジュンチュルは決然と警察組織と闘いました。

証拠の捏造

金大中が大統領になったのは1998年からですから、韓国の民主化もまだまだ未熟な時期です。
普通の刑事事件でも拷問が横行し、しかも証拠の隠蔽、捏造が行われています。
映画のラストでは、この事件に関わった警察、検察で処分された者はいない、というスーパーが流されました。
これは日本の袴田事件を連想させます。物証がほとんどない中で自白が重要視され、被疑者に有利な証拠は隠し、証拠の捏造疑惑もあります。

映画が上映されている時期に「飯塚事件」(1992年二人の女児が殺害、確定的な物証はなく、逮捕された「犯人」は最後まで犯行を否定、しかし2008年に死刑執行)の再審請求が却下されたというニュースが流れました。
弁護士は有罪の「証拠に疑義がある」と再審請求しましたが、裁判所は、疑義を認めながら「犯人ではないという明らかな証拠ではない」といいました。露骨なぐらい検察よりの見方です。
日本の裁判所は、現在でも「疑わしきは被告の利益」が通りません。

『アイアム・ア・コメディアン』　笑いで社会を変える

憲法と映画(92)（2024.8）

つだわたる（美賀多台）

実際漫才コンビ、ウーマンラッシュアワーの 1 人、村本大輔の 3 年間(2019～21 年)を追ったドキュメンタリーです。副題は「テレビから消えた男」です。
ウーマンラッシュアワーは「THE MANZAI2013」で優勝して、その翌年から「売れっ子」になってテレビに多く出るようになりました。しかし彼らのネタが、原発や米軍基地問題等を扱うようになって、急激にテレビの出演が減り、今ではほとんど見かけることはありません。批判の声がテレビ局に集中したようです。SNSでも炎上しました。
多い時は 200 回／年以上であったテレビ出演が 2020 年には 1 回になったといいます。

村本の変化は 2017 年頃、福島の被災地を訪れた時からです。彼は、その仮設村を見て日本はおかしな国だと思います。漫才ネタを社会の矛盾、政治にシフトしていきました。
映画は彼の舞台だけでなく、村本が鶴橋の居酒屋で在日コリアの若者たちから差別を聞く姿、韓国に行って若者たちに日本をどう思うか、率直な対話を映します。若者たちは、韓国は日本より自由だと言い、彼らの最大のタブーは「北朝鮮」とこっそり言いました。
沖縄でも若者たちと米軍基地について対話をします。
若者たちは村本の意見に賛成でなくても「取り上げてくれるのがうれしい」といいました。 そして米国に行って、彼が目指すスタンダップコメディ(一人で客席に向かって話しかける話芸、社会風刺や人間観察、政治ネタ等)の修行の姿も映しました。片言の英語で客席に語りますが、客も少ないしあまり受けません。
さらに父と母、幼馴染との対話も映し、彼の生い立ちまで触れました。

誇り高きコメディアン

村本大輔は福井県おおい町の出身で、高校中退、学校での成績はほぼビリです。そこから漫才師をめざして大阪へ、NSC(吉本総合芸能学院)に入りました。
父母は離婚していて、父とは「ライブに来たことがない」をネタにされるほど、仲が悪いです。父との怒鳴りあうシーンで、政治批判をするなら政治家になれという父に対して、村本は「コメディアンが最高の仕事、笑いによって国民の空気を変えられる」と言いました。
テレビに出ていませんが、独演会やライブハウスで年間 600 回をこなしたそうです。 村本大輔の視線がよくわかる映画です。彼は差別に敏感で被災者や社会的弱者の目線で社会的事象を笑いに包み、さらに抉ります。もちろん構成はしていますが、人間的には率直で優しく、誤魔化しのない人生を歩いています。

『ぼくの家族と祖国の戦争』一人ひとりが考えるべきこと

憲法と映画(93) (2024. 9)

つだわたる (美賀多台)

戦争シーンのない戦争映画でした。1945 年 4 月、ソ連軍がベルリンを攻撃しているという、誰もが第 2 次世界大戦の終了、ドイツの敗戦も間近に感じられる時期のドイツ占領下のデンマークにあった、実話に基づく出来事を描きました。

戦火を逃れようと 20 万人ものドイツ人が難民となってデンマークに押し寄せます。ドイツ占領軍は「受け入れよ」と命じます。それは絶対で、フュン島にある市民大学も 500 人もの難民を体育館に受け入れざるを得ませんでした。
しかし不衛生で過密な体育館で感染病が蔓延し、難民の子どもたちが次々に死んでいきます。彼らを守るべきドイツ軍は、すでに難民を見捨てて撤退していました。
「体育館を貸すだけ」と割り切っていた市民大学の学長は、悩んだ末に「子どもたちを助けよう」と決断し、医薬品を調達し、病人を隔離するなど、彼のできる範囲でドイツ難民に救いの手を差し伸べました。彼に協力する人は誰もいません。むしろ「売国奴」と唾を吐かれます。
すぐに終戦となり、占領下でドイツに協力した人間を、島の人々は「非国民」として糾弾しました。学長は拷問を受け、そして家族ともども島を追放されました。
映画はそこで終わりです。

自分たちが何をしたかも検証する

これまでの西欧諸国の第 2 次世界大戦を描く映画の多くはナチスドイツの残酷さ非道を暴くものがほとんどでした。このデンマーク映画は、デンマークが受けた被害はあまり描きません。恐らくナチスドイツの暴虐はデンマーク国民は十分知っていることで、その上で戦争中に彼ら自身が何をしたかをかなり冷徹に描きました。
映画『ヒトラーの忘れもの』はデンマーク軍が捕虜にしたドイツの少年兵を使って海岸に残されたドイツの地雷を撤去させた事実を描きました。その残酷さ目を背けるほどです。
現在のデンマークは国連軍に加わるだけでなく、米国の有志軍にも参加する防衛方針を持っています。女性にも徴兵制を適用するようです。
憲法 9 条を守ることだけで平和な国づくりができるものではない、としみじみ考えました。

『ボストン 1947』 世界一の走りを見ながら

憲法と映画(94) (2024. 10)

つだわたる (美賀多台)

パリ五輪報道は、出場選手の活躍よりも国別のメダルを競い合わせるような印象が残りました。その後のパラリンピックは、若いアスリートだけでなく、そこそこの年齢の選手が頑張っているのに感激しました。そしてIOCがガザの惨状を全く見ない姿勢は失望以外ありません。
そんな思いを持っている時にこの映画を見ました。
1936 年ヒトラー政権下のベルリン五輪に「日本人」としてマラソンに出場し、金メダルのソン・ギジョンと銅メダルのナム・スンニョンが、日本の敗戦、朝鮮解放後にマラソンの指導者となって若者たちを育て、1947 年のボストンマラソンで優勝者ソ・ユンボクを生み出すという史実に基づく映画でした。
戦争直後の韓国社会、人々の暮らしとボストンでマラソンを走るまでのさまざまな苦労が描かれます。

民族、国家と人間

最近は映画を見て涙を流すことはほとんどないのですが、不覚にも出ました。
ベルリン大会の表彰台でソン・ギジョンは胸の日の丸をオリーブで隠し、それを報道した東亜日報は日の丸を消した写真を載せました。その後、ソン・ギジョンは競技に出られず、東亜日報は発刊停止処分を受けます。
今度は、韓国の選手として出場するためにボストンに来た時、手渡されたソ・ユンボクのユニフォームには太極旗ではなく星条旗がありました。韓国は米国の軍政のもとで独立国と認められていないとソン・ギジョンは思い知らされたのです。

ベルリンの時の屈辱を思い起こしました。

走ることに命を懸けてきたソン・ギョンは、自身の誇りを国家、民族の象徴としての国旗に見ていたのです。私は、国家、民族と人間を一緒にすることは嫌いです。しかしこの時には、ソン・ギジョンの踏みにじられ気持ちと同調していました。
紆余曲折があって、ソ・ユンボクは太極旗をつけて走り、優勝しました。50 年のボストンマラソンでは韓国選手が 1～3 位を独占する快挙も成し遂げます。その後朝鮮戦争が起きました。
スポーツを楽しむことは平和の象徴です。しかし国際政治に翻弄されています。人間はいつまで国家や民族に拘るのかと思います。

『あしたの少女』韓国社会の醜悪さを暴く

憲法と映画(95)（2024.11）

つだわたる（美賀多台）

スクリーン全体から怒りが伝わってくる映画でした。

ダンスが大好きで明るく快活な高校 3 年生の女生徒がわずか 3 カ月働いただけで自死に追い込まれた事実を追って、醜悪な現代韓国社会の歪みに迫りました。

実業高校 3 年生ソヒは、就職実習ということで、大手携帯電話会社の子会社のコールセンターで働き始めました。そこは契約解消を申し出る人々を「手練手管」で食い止める、あるいは契約延長させるように仕向けるという業務でした。

当然のように、契約者の苦情があり、激しい言葉で罵られます。詐欺的な言い回しで言い抜けます。

ソヒは疑問を持ちながら少しずつ業務に慣れていきます。ある日、彼女を指導していたコールセンターの責任者が自死しました。彼は職場の酷い現状を告発する遺書を残していましたが、会社は社員全員から口止めの念書を取りました。それをおかしいと感じたソヒは最後まで抵抗しましたが、折れました。

ソヒは教師に会社を「辞めたい」と言いますが、教師は「学校の実績に関わるからダメ」と取り合いません。絶望した彼女は、冷たい貯水池に入水しました。

映画の後半は、彼女の死が自死であることを確認した女性刑事ユジンがその「原因」を会社の関係者、学校、教育機関に聞き込み、彼女の友人に会いに行くという展開でした。そこで韓国社会の仕組みが暴露されます。

韓国社会の矛盾

コールセンターを運営する企業は、従業員6百数十人規模でありながら、毎年約6百人が退職し、新規採用で補填されていることが明らかになります。業務内容、給与制度、職場の人間関係など、全く酷い労働環境で、労働者は消耗品です。中でも実習生は最底辺でした。

ユジンは親会社幹部を追及しますが、彼らは「我々は被害者だ」と開き直りました。
ソヒを守るべき教師や学校、それを監督する教育庁は無責任にも「就業内容までわからない」と言い放ちます。しかも就職率が下がれば「補助金が減る」と弁解します。
生徒の死に責任を感じていません。
両親も彼女の状況をまったく知らなかったことが明らかになります。
ユジンはソヒの恋人や友人たちの話も聞きますが、彼らの職場も酷いところだと描かれます。
映画はソヒが死ぬ前に撮ったダンスシーンを流しながら終わりました。
これは 2017 年に起きた女生徒の自死という事実をもとにつくられています。その後に実習中の事故など、就職実習の酷さが広く知られ、韓国は 2023 年に法改正しました。

映画サークルの 10 月例会で上映しました。

『ビバ・マエストロ！指揮者ドゥダメルの挑戦』強烈なメッセージ
憲法と映画(96)（2024.12）
つだわたる （美賀多台）

とても悔しい映画でした。
クラシック音楽に暗い私は、全く知らない人でしたが、ベネズエラの天才的な指揮者グスターボ・ドゥダメルを追ったドキュメンタリーです。
ドゥダメルは、1981 年 1 月生まれ 43 歳、10 代のころからその才能に注目されていました。2004 年第 1 回グスタフ・マーラー国際指揮者コンクール優勝、2009 年に名門ロサンゼルス・フィルハーモニックの音楽監督に就任等、国際的にも高く評価されました。
彼はベネズエラの音楽教育機関エル・システマによって育てられました。
エル・システマは 1975 年にホセ・アントニオ・アブレウ(経済学者で音楽家、1983 年チャベス政権下で文化大臣)によって設立されます。国家の支援によって無償で貧困層の子どもたちに音楽教育を提供しました。

アブレウは、音楽は「社会の発展の要因」「最も高度な価値、連帯、調和、相互の思いやり」をもたらすという信念がありました。
映画題名のマエストロは彼のことです。ドゥダメルは、彼を音楽だけでなくあらゆる面の恩師として尊敬しており、彼の志を受け継いでエル・システマを成長させようと努力しました。
映画はエル・システマのシモン・ボリバル楽団をはじめとする多くの楽団のリハーサル、それを指揮するドゥダメルを描きます。ベートーヴェン『第5』『第9』、ドボルザーク『新世界』等が演奏されます。彼は楽団全てを包み込むように指揮しました。
ユーモアと厳しさの人となりを感じます。

彼を排除したもの

ベネズエラはチャベス政権の末期以降、10 年以上、経済が悪化し政治的混乱が続き、それを弾圧する強権的政治が続いています。国連難民高等弁務官事務所は、ベネズエラからの難民はアフガニスタン、シリア、ウクライナと並ぶ 600 万人を超えると言っています。
2017 年エル・システマの音楽家が、政府批判のデモに参加して死亡した時に、それまで沈黙していたドゥダメルは政府に対して「暴力はダメだ」というメッセージをニューヨーク・タイムズに載せました。
これ以降シモン・ボリバル楽団の演奏活動は中止され、ドゥダメル自身はベネズエラに帰ることが出来なくなりました。
それは、この映画の撮影の最中に起こりました。そのため映画のテーマはドゥダメルの音楽活動の紹介を超えて、政治的メッセージを持ちました。
映画自身はベネズエラの状況、混乱の要因などは描かず、ドゥダメルに加えられた理不尽な扱いを批判するだけです。映画を見た後に、それらを調べずに済ますことは出来ませんでした。

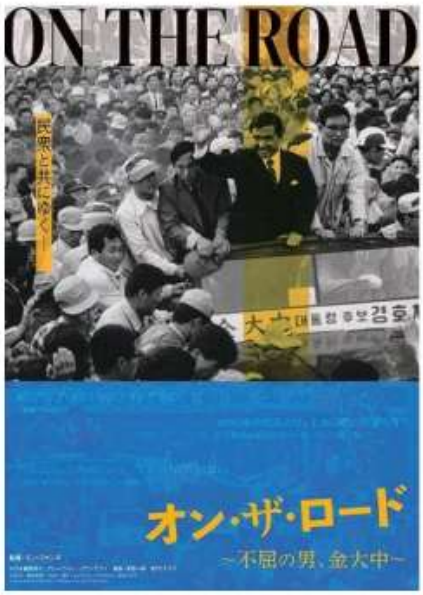
『オン・ザ・ロード～不屈の男金大中～』民主主義を訴え続けた金大中

憲法と映画(97)（2025.1）

つだわたる（美賀多台）

韓国の第 15 代大統領となった金大中を追ったドキュメンタリーです。彼の生きざまと重ねて現代韓国史を描きました。
映画は、1924 年(あるいは 1925 年)に生まれた金大中が、アジア太 平洋戦争のさなか、全羅南道木浦で働き始めた時代から 1987 年までを 描きます。彼は 1998 年に大統領になりますから、その 10 年も前で映画 は終わりました。成功した政治家を描くものではありません。単に金大中の生誕 100 年 を記念した映画でもないと思います。

死地を何度も越えてきた金大中が政治に求めたもの、それは「民主主義」です。現代史をたどり、その真価を現在の韓国社会に問うたものと、 私は感じました。



政治に求めたもの

金大中は、貧しい生活であったので優秀な成績でありながら上級学校に行くこともなく働きました。 朝鮮解放後に海運業で大成功します。地獄の朝鮮戦争を生き延びた彼は、政治家をめざします。

李承晩独裁政権に反対して闘いますが、落選続きです。1961年にやっと当選しますが、その直後 に朴正熙のクーデターが起きました。

彼は国民生活が向上する政策を練り、そして韓国社会に民主主義を根付かせようと奮闘します。それは朴正熙、全斗煥等の軍事独裁政権と真正面から闘う道でした。そのために、国家権力に命を狙われて、何度も命を落としかけます。1973 年、日本滞在中のKCIAによる拉致事件、1980 年の全斗 煥政権下の死刑判決がありました。

その度に彼は復活しました。しかし大統領選挙では何度も苦杯をなめています。

民主主義

この映画を見て気づいたのは、金大中は現実的な政策をつくり、それが少しでも前進するのであれ ば妥協も厭わなかったようです。その上で社会には民主主義が不可欠であり、その根幹は地方自治だ、 と理想も繰り返し訴えていることです。

韓国の地方自治は遅く、実質的な韓国の地方議会の選挙は 1991 年、首長の選挙は 1995 年に行 われました。民主主義が根付くにはまだ短いです。しかし市民の血を流して独裁政治をひっくり返した 力は、今回の伊錫悦大統領のクーデターを阻止したように、市民社会に受け継がれています。

韓国に比べて、日本の地方自治は長いですが、民主主義の重要さを市民社会がどれほど認識しているか、知事選挙を見て疑問に思いました。

民主主義と地方自治、現在の日本でも重要です。

『再会長江』映像に出ない意味を考えた

憲法と映画(98)　(2025.2)

つだわたる（美賀多台）

中国の映画は基本的に検閲があると思ってみてください。政府に都合が悪い事実を描き批判する映画、国策に反する映画はつくれないようです。

『再会長江』は日本人監督がつくったドキュメンタリーで、現在の中国の景観やそこで生きている人々を登場させています。ドローンを活用してスケールの大きな自然を様々な角度から写す観光的な要素が多いのですが、見ていて「おかしいな」と思う描き方が多々ありました。色々な制約があると思います。

10 年の変化

竹内亮監督は 2011 年にNHKで「長江 天と地の大紀行」を撮りますが、その時に行けなかった長江の源流まで撮ろうと「再会」を付けてつくりました。

2010 年代の中国は習近平政権の時代です。その変化を撮ろうというのですからかなり大胆です。

河口の上海や中流にある巨大な三峡ダム、上流域の大都市、重慶等は型どおり撮っています。しかし中国によく行った人はあちこちにあった「習近平賛美」の看板が見えないと言いました。

この映画の焦点はシャングリラ(英国小説に登場する理想郷ですが、2002 年チベット自治州の県が、それに改名)で民宿を営むチベット人女性ツームーとの再会でした。当時 18 才、この地しか知らない少女を、撮影チームが上海に招待します。その時の経緯が詳しく語られ、彼女の心情が赤裸々に描かれました。

私の驚きは、そこではなく、彼女が日本円にして数千万円の借入金で大きな民宿をつくり経営をしているという変化です。

10 年前は、少ない観光客を待っていただけの純朴な少女は大きく変わりました。その要因は何だろうと思いました。映画は彼女が上海を見た影響としかいいませんでしたが、シャングリラの観光客の増加を示しています。

そこに中国の一人当たりのGDP向上と観光政策の充実を感じました。

負の面を描かない

たどりついた長江の源流では氷河が大きく後退していました。明らかに地球温暖化の影響と思いますが、ナレーションではなぜか、それをぼやかしました。

長江をさかのぼっていくと、当たり前ですが僻地へと行きます。そしてそこは少数民族が暮らしています。しかし彼らの 10 年間の変化は明確には描かれていません。

チベット族のツームーだけが若くして成功しているような感じでした。長江の水質が良くなり、多くは明るく生き生きした人々が描かれ、雄大な自然も美しいのですが、私は画面が歪んで見えました。
（これは映画サークルの 1 月例会（1 月 11 日）で上映しました。

『侍タイムスリッパー』 ヒットしています

憲法と映画（99） （2025.3）

つだわたる （美賀多台）

幕末に生きていた会津藩士が、突然、現代にタイムスリップして、150 年という時を飛んできたというSF的要素をもった「コメディでありながら人間ドラマ、そして手に汗握るチャンバラ活劇」という謳い文句の映画です。
物語は、幕末の武士、高坂新左工門が現代の時代劇テレビドラマの撮影中に現れて、おたおたしながらも「記憶喪失の男」として周囲の親切な人々に助けてもらいながら生きていくという話です。
高坂新左工門は、会津藩から勤皇志士の暗殺を命じられるほどの剣術の腕があったので、それを生かして時代劇の「切られ役」集団の一員となります。雑用係で、何かと彼を気遣う女性助監督、山本優子とちょっと良い仲になりそうな展開でした。

社会的視点はないが

タイムスリップ物は、二つの時代を生きる主人公から見た、それぞれの特徴、矛盾が浮き彫りにされます。例えば映画『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』は現代の女子高生がアジア太平洋戦争の敗戦間際にタイムスリップして、特攻隊となった青年に恋をします。そのことで彼女は戦争の残酷さを知りました。
ところがこの映画は、刺客であった武士が現代社会に無理なく溶け込んでいきます。高坂は江戸幕府が滅んでいることに驚き、「文明の利器」に戸惑いはしますが、封建社会の身分制度との違いに気付きません。支配階級であった武士がいないことに違和感を持ちません。
自分自身の生き方についても、勤皇佐幕の対立や藩という制約がない現代では、武士の生き方がどう変わるのか、その辺りの葛藤がありません。
映画全体としても現代社会の矛盾を追及しません。

高い評価

この映画は製作費 2600 万円の自主製作映画で、出資者の安田淳一が監督、脚本、照明、編集,

衣装など１人何役もこなしています。 24 年 8 月に東京の１館での公開から始まり、口コミでその面白さが広がると 300 館以上での上映になりました。神戸では今でも上映しています。
なぜこれほどヒットするのかと考えると、筋立ての面白さだと思いました。そして映画賞等でも高い評価を得ています。
３人が切りあいをしているところへ落雷があってタイムスリップするのですが、３人それぞれが少しずつ時代をずらして現れ、そして再び出会うという作り方でした。いいアイデアだと思います。
でも人間ドラマというのなら幕末と現代の葛藤をどのように表現するかです。残念ながら、それは無いというのが私の評価です。

『ノー・アザー・ランド故郷はほかにない』
人類はジェノサイドを見ているだけ
憲法と映画（100）
つだわたる （美賀多台）

パレスチナとイスラエルの関係を如実に撮ったドキュメンタリーです。ヨルダン川西岸地区という「パレスチナ自治区」にイスラエルが圧倒的な暴力によって「入植地」として侵略している実態が撮られています。
これは、この現状をカメラに収め世界に発信することで、占領を終結させて故郷の村を守ろうとするパレスチナ人青年バーセル・アドラーと、彼に協力しようとその地にやってきたイスラエル人青年ユヴァル・アブラハームの2人による決死の活動です。
2人は、2023年10月までの4年間のマサーフェル・ヤッタというヨルダン川西岸地区南部の小さなパレスチナ人の村と村人たちの生活が、イスラエル軍と入植者たちに壊されていくのを、スマートフォンやハンディカメラで撮りました。
ユヴァルは裏切り者としてイスラエルの極右団体に命を狙われることさえあると思います。
イスラエルはパレスチナ人が住む村を、一方的に軍事演習所に指定して、住居などを壊します。一軒一軒、人が住んでいる家をブルドーザーとパワーショベルで壊していきました。軍人が銃を構えて立ち会い、住民を追い払います。戦車が来るときもあります。
「家を壊すな」と抗議するパレスチナ人は素手です。時には彼らは銃で撃たれます。しかしこの地が彼らの故郷です。 撮影は、ちょうどガザで、ハマスがイスラエル人たちを襲った時期まででした。

50年以上の蛮行

映画は歴史的な説明をしませんが、こんなことは1967年第3次中東戦争以降、50年以上にわたってイスラエルがパレスチナ人の自治区とされるガザやヨルダン川西岸を軍事支配し、日常的に行われてきました。

国連は何度も「国際法違反」という警告を発しています。しかし米国の手厚い庇護の下で、国際的な批判を抑え、日本も含めた先進資本主義国は放置してきました。

このような非道を、私たちも含めて世界中が知るべきで、メディアは頻繁に報道するべきでした。 2023年10月にハマスが、イスラエルを急襲し人質を取ったことを契機に、「天井のない監獄」ガザの住民に「報復攻撃」というジェノサイドが止まりません。世界中の人々は、無防備の子どもたちが殺されるところを見ていますが、止めることは出来ません。

米国をはじめとするG7、日本も含めた先進資本主義諸国はジェノサイドの共犯者です。

※　※　※　※　※　※

「憲法と映画」は100回を区切りとして終わります。長い間ありがとうございました。